

『パンとぶどう酒』第一節「聖なる夜」その四

—— 晩鐘と時禱 ——

高橋 克己

人文学部独文研究室

内容梗概

(一) 序 論 二(156)頁―五(159)頁

(二) 宥和の旋律

- (1) 頭韻と詩脚 六(160)頁―七(161)頁
- (2) 内省する魂 八(162)頁―一(163)頁
- (3) 生ける静謐 一(165)頁―一五(169)頁

(三) 燈火と松明

- (1) 生成と消滅 一六(170)頁―一七(171)頁
- (2) 燈火と月影 一七(171)頁―二二(176)頁
- (3) 発酵と解体 二二(176)頁―二八(182)頁

(四) 思慮深い家長

- (1) 緒言 二九(68)頁―三〇(69)頁
- (2) 親友ランダウエル 三〇(69)頁―三五(74)頁
- (3) ランダウエル絨毯毛織物商会 三五(74)頁―三八(77)頁
- (4) 共和精神と専制 三八(77)頁―四二(81)頁
- (5) 結語 四二(81)頁―四四(83)頁

(五) 黄昏から聖夜へ

- (1) 離在 四五(16)頁―五〇(21)頁
- (2) 噴泉 五〇(21)頁―五六(27)頁
- (3) 晩鐘と時禱 五七(2)頁―六三(8)頁
- (4) 林苑と盟約
- (5) エレウシース

後日刊行予定

和文註解 (一五) (3)のみ

欧文註解 (一五) (3)―(4)

付録

(一九八七年十月十六日、日本独文学会・昭和六十二年度秋季研究発表会、京都 会館、口頭発表の原稿および欧文資料)

Sommaire 一三二(76)頁―一三八(83)頁

Résumé 一三九(84)頁―一四〇(85)頁

Zusammenfassung 一四一(86)頁―一四二(87)頁

Inhaltsübersicht 一四三(88)頁―一四四(89)頁

一四五(90)頁

※既刊部 (一)―(四) および (五) (1) (2) は左記の学術刊行物に掲載されている。

(一) (二) (三) 一九八五年度・高知大学学術研究報告、第三四巻、人文科学篇、一五五頁―二〇二頁所収、一九八六年一月刊

(四) (1) (5) 一九八六年度・高知大学学術研究報告、第三五巻、人文科学篇、六七頁―一〇二頁所収、一九八六年十一月刊。

(五) (1) (2) 一九八七年度・高知大学学術研究報告、第三六巻、人文科学篇、一五頁―四二頁所収、一九八七年九月刊。

※本論 (一五) (3) は、一九八七年(昭和六十二年)一〇月一六日、日本独文学会秋季発表会(京都会館)にて口頭発表した内容に相当する論述である。

秋季発表会(京都会館)にて口頭発表した内容に相当する論述である。

本論要旨

ブレントナーが解したように、今迄「晩鐘」(第十一句)や「夜警」(第十二句)は、「忙しい生活の価値領域」から遁れた「崇高な精神的瞑想の生活の価値領域」において扱えられた。つまり「遁世」の方向で「過去へまた未来へとあらゆる想い出の響く晩鐘」とか、「あたかも捕われた者へ忍び寄る夜警の如く近づく」ものとして、『パンとぶどう酒』第一節「聖なる夜」が、当所なき空漠とした無限への憧憬に駆られ行方なくさ迷う浪漫情緒に適う詩想と解されたのである。

本論は在来この様な解釈を不十分と考え、例えばミレーの名画『晩鐘』に見られる慎ましく謹厳な「人倫の俾谷」を映す詩歌象徴として、当該の「晩鐘」や「夜警」を摺み、これらに静聴する「ドイツの心が、あたかも生育する自然の如く、無言の中で、自ら密やかに遠大な諸力を展開させる」点にも留意する。かくして「無限」とは言っても、憧憬情緒に浸るべき漠然とした観念ではなく、『パンとぶどう酒』の詩想の核心「至福なるギリシア」にキリスト像を理念追求せんと「泡立ちのぼる——無限」の面も強く、しかも市民生活の日常性の只中に「無限」が生成するのである。それは過去の回想へと消滅する「喪失の感情」に呑み込まれず、心底から「魂の歌声」が「自己」展開し自己形成する「のに協和して」響き渡る晩鐘の音「であり」声高に呼ばわる夜警の叫びと考えられるのである。

(3) 晩鐘と時禱

- 一 Still in dämmeriger Luft ertönen geläutete Glocken,
- 二 Und der Stunden gedenk ruft ein Wächter die Zahl.

- 一 ひそやかに黄昏の夜気に響き渡る晩鐘の音
 - 二 して時刻を想い、その数を夜警は声高に呼ばわる。
- (『パンとぶどう酒』第一節、第十一句—第十二句)

『落穂拾い』などの名画で知られるミレーの作品『晩鐘 (L'Angelus)』(一八五八年—五九年)と同様に、『パンとぶどう酒』(一八〇〇年—〇一年)冒頭の都市像においても、祈り (Religio) の時空が、日常の市民生活の只中に開かれて来る。市民とは蓋し、都市貴族や封建貴族などの門閥と明暗を織りなし、慎ましくも謹厳な倫理意識に映える、目立たぬ力強い存在である。

既に第一〇句までの都市像において、この市民意識の生成と深沈は、第二句で「騒然と疾駆し過ぎ去る (hinweg)」と歌われる門閥の華麗な「幾台もの自家用(馬車)と明暗を織り成していた。その生成の光源は、「馬車」の「松明」と対比なす第一句の「月影と燈火の光 (Erleuchtung)」であり、その生成の息吹きは空無へと放下した「孤独」(第八句)な市民意識の奥底から「滔々と湧く噴泉」(第九句—第一〇句)に聴き取られた。

- 一 ... still wird die erleuchtete Gasse,
- 二 Und, mit Rakeln geschmückt, rauschen die Wagen hinweg.
- 九 ... und die Brunnen
- 一〇 Immerquillend und frisch rauschen an duftendem Beet.

呼ばわる(rufet)を各々の最高潮として、石造で築きあげられた西欧都市特有の音響世界を形造っている。ここでは市壁に囲まれた都市の内
部空間そのものが、あたかも音楽堂や教会内陣の如き様を呈する。当日
は第八句に「昼間は」忙しい広場の市場(der geschäftige Markt)とあ
る所から日曜祝祭日ならぬ週日と考えられ、詩人ヘルダーリンたち新教
プロテスタント教徒は教会へ赴かない。また門閥に關してなら、「して松
明に飾られて騒然と馬車は疾駆し過ぎ去る(Und, mit Fahren geschmückt,
tauschen die Wagen hinweg)」(註(5))と第二句で歌われているよう
に、華麗な歌劇場などの音楽会場を屈指するところであろうが、他方ミ
レーの『晩鐘』(註(2))に映える慎ましく謹嚴な市民は、『パンとぶど
う酒』第五句に高唱される如く、「悠然と和やかにわが家にくつろぐ
(Wohlfrieden zu Haus)」(註(5))の市民意識の深沈せる都市内
部空間を言わば大聖堂内陣にしたて、「晩鐘」と「夜警」の音が「響き
渡る(エーターネン)」のである。

竟には「偉大なる運命(モイラ)が轟く(テーネット)」(第六二句)「至
福なるギリシア」(第五五句)における悲劇祝祭の時空で、「畏怖と莊嚴な
る形式(die schrecklichfeierlichen Formen)」が讃歌燃焼する『パンとぶ
どう酒』の詩想の核心へと至るべく、当面の冒頭第一節「聖なる夜」で
は、目下の西欧都市の只中に兆す魂の動静が「ひそやかに」見守られる。
すなわち内省する魂は都市内部空間と靈妙に協和し合いながら、静かに
月影の光(Erleuchtung)に包まれて大自然に抱かれ、目立つことなき遠
大な力を秘める古典ギリシアの崇高美を目指す。このためには或る割り
切れない「空無を孕む内面の飛翔」が、西欧キリスト者の心意識の淵に
芽生え、無限の彼方へと理念追求する止み難い魂の動静が兆さねばなら
ない。当の第十一句から第十二句にかけて「響き渡る」「晩鐘」や人声
が喚起するものも、このような「内面の飛翔」に他ならない。

今日の西欧都市で「声高に呼ばわる夜警(rufet ein Wächter)」(第

十二句)に回り合うのは、恐らくタウバー川沿いの中世風銀光都市ロー
テンブルクのような特殊な所であろう。それに対して「ひそやかに黄昏
の夜気に響き渡る晩鐘の音(Still in dämmriger Luft ertönen geläutete
Glocken)」(第十一句)の方は、西独の首都ボン⁽¹⁰⁾の町中でも毎晩耳にす
ることができる。それは今でも美しく響き渡る教会の晩鐘の音で、あち
こちの教会で鳴らされ、町中の何処に居ても自然と聴こえてくる。敢て
説教したり教訓を垂れるような業とらしさは微塵だに無く、いま尚日常
の市民生活に協和しながら存続しているのである。

名高いシラーの『鐘の歌(Das Lied von der Glocke)』(一八〇〇年)
の標語に、「われ生者を呼び(Vivos voco)死者を悼み(Mortuos plango) 稲妻を砕く(Fulgura frango)」とある通り、「響き渡る晩鐘の音」(第
十一句)は生と死の両面と自然へと拡がりゆく調べである。「至福なる
ギリシア」の死圏において、「新たなる靈感を自ら、万有を生み出す自
然が再び掴む」と見る生者ヘルダーリンにとり、「響き渡る晩鐘の音」
は「至福」を求め祈る人(Homo religiosus)の心の空無に広がりゆき
過去の死圏なす自然の古里ギリシアへの追想をいざなうのである。

但し『パンとぶどう酒』の第一節のみを知る者には、果して「晩鐘の
音」や「呼ばわる夜警」(第十二句)の音が、一体どこに向かっている
のか? 明確に判断できなかったであろう。例えばゼッケンドルフ編
『詩神年鑑(Musenalmannach)』(一八〇七年)により『夜(Die Nacht)』
の表題の下に第一節(第一句-第一八句)のみを知ったブレンターノの
場合を考えてみると、このことは肯ける。

殊に「夜」は明澄で星辰に輝き、孤独で、そして過去へまた未来へとあらゆ
る想い出の響く晩鐘(tönende Glocke)です。そもそも優れた詩歌とは、
このようなもののことを言うのです。

(一八一〇年二月二十一日付ルンゲ宛、ブレンターノの書簡)

「過去へまた未来へとあらゆる想い出の響く晩鐘 (eine rick- und vorwärts tönende Glocke aller Erinnerung)」には、浪漫情緒に適う無限への憧憬が時空を行方なく迷う。「過去」と言っても当所なき空漠とした「後方 (rückwärts)」に過ぎない。もしハイムが『ロマン派』(初版、一八七〇年)で解したように、ヘルダーリンの作品も「浪漫詩文の傍系 (ein Seitentrieb der romantischen Poesie)」と看做されるなら、プレントナーのように『パンとぶどう酒』第一節を読むことも可能であろう。

しかしながら古典ギリシア悲劇祝祭の時空を、西欧キリスト者の意識が真面目に映る紛うことなき明鏡として、歴史の過去にうち建てた『パンとぶどう酒』の詩想には、明確な理念追求の方向が定められ、追想は他をなす措き何より「至福なるギリシア」のキリスト像を指す。だがいまだ冒頭第一節の都市像には、直接ギリシアの筋を示す詩歌象徴は現われておらず、当の「晩鐘の音 (geläutete Glocken)」(第十一句)の広がりには「無限」へと繋がる。但し「無限」とは此所で、プレントナーの解した憧憬のみならず、敢て「泡立ちのぼる——無限」の理念追求をも志向している。と私には思われる。

五八 Fand das höchste Wesen schon kein Gleiches,

五九 Aus dem Kelch des ganzen Seelenreiches

六〇 Schäumt ihm — die Unendlichkeit.

五八 縱んば至高存在が無類無比であろうとも、

五九 靈魂の國そのものなす玉杯より

六〇 神を指し泡立ちのぼる——無限。

(シラー『有情』一七八二年、終結部)

いまだ「至福なるギリシア」は見い出されていない。然れどもシラーやヘルダーリンの思想詩の調べは、漠とした無限への浪漫風憧憬に解消して有情の生の諸相に安住してしまうことなく、敢て空無の彼方へ理念追

求すべく「無限が泡立ちのぼる」(註(21))のである。

ところで「無限が泡立ちのぼる」べき祈りの基底 (Glaubensabgrund-tiefe) は、空無へと放下した魂の「離在 (Abgeschiedenheit)」にあり、この魂の動静は『パンとぶどう酒』第一節の第七句から第九句にかけての詩想に兆していた。

七 だが他方、堅琴の音が彼方の庭園から響いてくる。恐らくは

八 そこで恋人が奏で、或いは孤独な者が

九 彼方の友を想いつつ、また若き日を偲びつつ、して噴泉が

一〇 滔々と湧き、清冽な水しぶきをあげ送り、芳香に匂う花壇を落している。

一一 ひそやかに黄昏の夜気に響き渡る晩鐘の音、

一二 して時刻を想い、その数を夜警は声高に呼ばわる。

「噴泉が滔々と湧き」(第九句—第一〇句)「晩鐘の音が響き渡り」(第十一句)「夜警が声高に呼ばわる」(第十二句)と歌われる詩の心が根ざす「離在」は、蓋し「遁世」ではなく、むしろ正反対に市民生活の日常性の只中に開かれ、正に前述のミレー作『晩鐘』(註(2))に通ずる祈りの慎しみ深い母胎として広がり、この謹厳な市民意識に映えて「晩鐘」も「噴泉」も浮き彫りにされるのである。

プレントナーのような浪漫情緒の持ち主に見えなかったのが、この静かで力強い市民意識の生成と考えられる。成程プレントナーにとり『パンとぶどう酒』第一節は「最も好きな詩歌 (das liebste Gedicht)」に他ならず、正に「祈り」(Beten)のための『時禱詩集』(註(9))のようなものであった。

この詩歌は私に平和を与え、わが頭上に天空を張りわたし、その下で私は母の懷に抱かれ胸下にある子供のよう横たわります。

しかしながら、それはあくまで「遁世」の方向を示し、市民生活の日常

を心して見守るものではなかった。

冒頭六句は、現実へ向けての世の営みが疲労(Ermüdung)へと至るものではないでしょうか。引き続く六句(第七句―第十二句)は、(失なわれた)時への憧れであり、喪失の感情ではないでしょうか。第七句に登場するのは、失なわれた無垢への回顧であり、(第九句から第一〇句にかけて)滔々と湧く噴泉は、正しき義人たちが飲んで元氣となる約束の永遠の泉について語っていないでしょうか? この義人たちを(第十一句の)晩鐘は、響き渡る音を感ずる世界により、待ち望みそして祈るよう警告し、(第十二句の)夜警は時が満ちたのを声高に告げ知らせているのではないのでしょうか?

(一八二六年十二月、プレントナーの日記書簡より)

「思慮深い家長が悠然と和やかにわが家にくつろぐ(ein sinniges Haupt/Wohlfrieden zu Haus)」と頭韻(H)なして高唱される筋も、プレントナーによれば「疲労へと至る(bis zur Ermüdung)」(註(26))に過ぎぬ詩想となる。大方この観点で当該の詩節は読まれて来ていると思われ、例えば今世紀の代表的研究書、シュミット著「ヘルダーリンのエンギー」パンとぶどう酒』(一九六八年)の説明でも、「忙しい生活の価値領域が崇高な精神的瞑想の生活の価値領域には踏みこめないものとして限定づけられ」ている点が留意されるのである。

この「精神的瞑想の生活の価値領域」としてシュミット註は「夜の時代におけるディオニューソスの歎び」を挙げているが、他方プレントナーの『日記書簡』(註(25))では「喪失の感情」とか「義人たち」などキリスト教の『聖書』との関連が中心をなしている。だが郭れにせよ「通世」の姿勢に変わりなく、日常の市民生活の只中には祈りの場が開かれないことになる。すると現世に「義人たち」(註(26))は「捕われた者(Gefangene)」と解され、「忙し」生活の価値領域」(註(27))が言わば牢獄に過ぎなくなるのである。

ああ夜は私を慰めぬ。私は夜を知っている。私は待ち、夜は近づく、
あたかも捕われた者へ忍び寄る夜警の如く。

ここに(ぶどう酒の)杯がある。そう夜は語る。この杯をあなたの涙で充た
しなさい。

此所のこの石を胸に抱きなさい。そうすれば石はあなたのパンとなるであ
らう。

…… (註)

文字通り「パン」と「ぶどう酒」が物語られる当詩節は、プレントナーがヘルダーリンの『パンとぶどう酒』第一節への続篇として起草したものである。

前述のルンゲ宛書簡(註(18))では、第一節の「夜」が「晩鐘(Glocke)」(第十一句)に喩えられており、右の続篇(註(28))では「夜警(Wächter)」(第十二句)に比せられている。

- 一 Still in dämmeriger Luft ertönen geläutete Glocken,
- 二 Und der Stunden gedenk ruhet ein Wächter die Zahl.

- 一 ひそやかに黄昏の夜気が響き渡る晩鐘の音
- 二 して時刻を想い、その数を夜警は声高に呼ばわる。

恐らくプレントナーには、この第十一句と第十二句が強く心に刻まれていたであろう。但しそれは、あくまで「通世」の相において浪漫情緒に適う曖昧な無限への憧憬に駆られ、当然なくさ迷う心情に捕えられていたのである。

反して『パンとぶどう酒』第一節の詩想は、堅実な市民生活の日常性の只中から生成してくる。そして、それはむしろシラーが歌わんとした『ドイツの偉容(Deutsche Größe)』(一七九七年)に一脈通ずると考えられる。

ドイツ人の威厳は決して王侯の頭上に存しなかった。政治上の価値を遠離し、

ドイツ人は自ら固有の価値を樹立した。縦んば帝国が滅んだとて、ドイツの尊厳は揺らぐが悠然と留まらう。その尊厳は人倫の偉容 (eine sittliche Größe) であり、それが住まうのはその国の文化と気質なのである。

(シラー『ドイツの偉容』一七九七年)

更にシラーは続ける。

そして政治の国が揺らぐや、精神の国は弥々堅固で、一層完成した形となったのである。……そしてこの極めて遅鈍な(ドイツ)国民が、全て性急で倏速な諸国民に追いつくであらう。他の諸国民はその時には落花した。その落花の折に、黄金の果実が残り、自己形成し、収穫の果実はふくらむ。

シラーが「精神の国」をこの様に語った十八世紀と十九世紀の転換期は、仏英両国間で政治上の帝国主義戦争たけなわの頃であった。その折に例えば『ドイツ国民に告ぐ』(Reden an die deutsche Nation) 第十三講(一八〇八年)で、フヒテは敢然と「世界帝国の幻像(Gas Traumbild einer Universalmonarchie)」を拒否し、十人十色の「精神の本性(Die geistige Natur)」を称揚したのである。

精神の本性は人類の本質を偏に最高度に多様な諸段階をなし、各々個人においても、また大きな全体としての個体、つまり諸国民においても表現し得た。あたかも各国民が自己を頼みとし、自らの固有性に従い、また更にこの国民に属する個人が、国民共通の固有性とともに自らの特殊な固有性に従い、自己展開し自己形成する丁度そのように、神性の現象は自ら固有の鏡に自己を映し出すのである。

(『ドイツ国民に告ぐ』第十三講)

「神性の現象 (die Erscheinung der Gottheit)」とはシラーやヘルターリンの場合、「美 (schön)」の一語で以て蔽われる。蓋し「哲学者も正に詩人と同様、美 (アイステーシス) の力を所有せねばならず、美意識

のない人間は文学面に拘泥する我らの哲学者であり、精神哲学 (die Philosophie des Geistes) は美の哲学 (eine ästhetische Philosophie) である」と語るのは、フヒテ流に述べれば、「国民に属する個人が、国民共通の固有性とともに自らの特殊な固有性に従い、自己展開し自己形成する」(註(31))と表現でき、此所に「各自が固有の全体 (jeder ein eigenes Ganze ist)」(第五節、第八四句)の根本思想「一にして全 (Eines und Alles)」(第五節、第八四句)が確かめられるのである。

フヒテの言う「自己展開し自己形成する (sich entwickelt und gestaltet)」を、シラーは「ドイツの偉容」において「自己形成 (bildet sich)」(註(30))と表現し、「収穫の果実 (die Frucht der Ernte)」(註(30))の比喩を使いその成果を物語っている。これが『パンとぶどう酒』第九節では、「タベの国ヘスベリアの果実 (Frucht von Heesperien)」と古代ギリシア語を踏まえた典雅な響きとなる。「タベの国ヘスベリア」とは「西欧」を、就く「ドイツ」を意味する。なぜなら「西欧」の「ドイツ」こそが「至福なるギリシア」(註(11))の古典精神を問い求めつつ、自らの心の内にそのギリシア文化の種を宿す「果実」すなわち「精神の国」(註(30))に他ならぬ。と言う自覚がヘルターリンにあったからである。

ところで「精神の国」とは決して「観念の国」ではない。それはシラー自身が『ドイツの偉容』で語るように、慎ましくも謹厳な「人倫の偉容 (eine sittliche Größe)」(註(29))に他ならず、正にこの「人倫の偉容」こそが、当該の『パンとぶどう酒』第一節において、静かで力強い「魂の歌声 (Seelengesang)」(註(32))すなわち『ドイツの歌 (Deutscher Gesang)』として生成しているのである。目下の「晩鐘の音 (geläutete Glocken)」(第十一句)や「呼ばわる夜警 (ruft ein Wächter)」(第十二句)により形造られる時空も、この様な「人倫の偉容」の証左と考えられる。そして悠然と聴きいる「ドイツの心は、このような風土の下で、この新たな

な平安の恵みの中で、始めて真正に芽生え、あたかも生育する自然 (die wachsende Natur) の如く、無言の中で、自ら密やかに遠大な諸力を展開させることだろう」と、ヘルダーリン自身が「一八〇一年一月頃に弟宛の書簡で物語る如くなのである。

註 解

(3) 晩鐘と時禱

(1) ヘルダーリン全集、シュトゥットガルト版、一九四六年—七七年(索引一九八五年)、第一巻、九〇頁。参考のため第一句から第一三句までも此所に掲げておく。

静かに安らう都市。ひそやかに街路に燈火がともり、
して松明に飾られて騒然と馬車は疾駆し過ぎ去る。
満ち足りて家路へと、昼間の飲びに別れを告げ、安らぎを求め歩み
ゆく人々。

して収支得失を慮る思慮深い家長は

五 悠然と和やかにわが家にくつろぐ。(黄昏の今は)葡萄も花束もなく、
して手仕事の品々もなく安らう、(昼間は)忙しき広場の市場。
だが他方、豎琴の音が彼方の庭園から響いてくる。恐らくは
そこで恋人が奏で、或いは孤独な者が

一〇 彼方の友を想いつつ、また若き日を偲びつつ。して噴泉が
滔々と湧き、滑冽な水しぶきをあげ送り、芳香に匂う花壇を響し
ている。

ひそやかに黄昏の夜気に響き渡る晩鐘の音、

して時刻を想い、その数を夜聲は声高に呼ばわる。

今や又ある息吹きが到来し、林苑の樹頭を(天上へと)揺り動かす。

(2) ミレー(一八二四年—七五年)『晩鐘』(ルーブル美術館蔵)。他の『落穂拾い (Les Glanuses)』(一八五七年)もルーブル美術館蔵。

(3) 詳細は筆者の別論、内省と光明——「パンとぶどう酒」第一節「聖なる夜」その一(一九八五年度・高知大学術研究報告、第三十四巻、人文科学

篇、一五五頁―二〇二頁所収、一九八六年二月刊)の(三)燈火と松明(一七〇頁―一八二頁)を参照されたい。

(4) 詳細は筆者の別論、『パンとぶどう酒』第一節「聖なる夜」その三―「離在」と「噴泉」(一九八七年度・高知大学学術研究報告、第三十六卷、人文科学篇、一五頁―四三頁所収、一九八七年九月刊)の(五)黄昏から聖夜へ、その(2)噴泉(二二頁―二七頁)を参照されたい。

(5) 『パンとぶどう酒』第一節、第一句―第二句／第九句―第一〇句。註(1)参照。

(6) 当の第十一句の「ひそやかに」から第一句の「ひそやかに」への関連は言及されていないけれども、シュミット著「ヘルダーリンのエレギー」『パンとぶどう酒』(一九六八年)三六頁には、第十一句の「ひそやかに」と関連して、ヘルダーリンの使う「ひそやかに」が徒ならぬ言葉として注目され、その証左として『平和の祝祭』冒頭などが引用されている。

(7) 『パンとぶどう酒』第一節、第七句。註(1)参照。

(8) シュミット著「ヘルダーリンのエレギー」『パンとぶどう酒』(註(6))三五頁。「数多くの変母音と二重母音により徒ならぬ響き豊かな……テーント・フェルン……エァターネン・ゲロイテ……」。

(9) リルケ文庫編全集、インゼル書店刊六巻本、一九五五年―六六年、第一卷、二四九頁。

(10) 『パンとぶどう酒』第一節、第五句―第六句、註(1)。

(11) 『パンとぶどう酒』第四節、第五五句―第五六句。全集、第二巻、九二頁。

五五 至福なるギリシアよ、汝あらゆる天上の神々の住居よ、
五六 かくして真実なのか、かつて私達が青春に聞いたことは？

(12) 『パンとぶどう酒』第四節、第五七句―第七〇句。全集、第二巻、九二頁。

五七 荘厳なる祝祭の広間、敷床は大海原、そして食卓は山岳なす。

五八 まことに唯一無二の習俗ゆえ太古に建てられし時空、

五九 だが玉座は何処に？ 神殿は何処に？ 何処に玉杯は？

六〇 神酒ネクタールに溢れて、神々の歓喜のための詩歌は？

六一 何処に、一体いずこに輝いているのか、彼方をまで射抜く(アポロー

ン神の弓弩のごとき)あの神託は？

六二 デルポイは微睡んでいる―何処に轟くのか、あの偉大なる運命

(モイラ)は？

六三 何処にあの神速の運命は、何処で碎けるのか？ 普通の幸に満ちて、

六四 雷鳴とともに消澄なる大気から眼界を過り、運命(モイラ)が突

入して来るのは何処か？

六五 父なる神気アイテル、かく叫び舌から舌へと言葉は翔んだ、

六六 幾重にも。この生を一人で担える者は誰もいなかった。

六七 分有されて、このような富は歓喜となる。見知らぬ者とも取りかわ

して、

六八 それは歓呼となる。睡りつつ言葉の力は生育する。

六九 父よ、消澄なる者よ、この言葉は久遠の彼方まで響き渡るのだ。

この太古の

七〇 証は、父祖から伝来され、的を射て、創造的に下って来る。

(13) 『オイディプスへの註解』(一八〇四年)第三章。全集、第五巻、二〇一頁。

詳細は筆者の別論、ヘルダーリンの西歐ギリシア論―「至福なるギリシア」(一九八四年／八五年／八六年度・高知大学学術研究報告、第三三巻／第三四巻／第三五巻、人文科学篇、一三頁―一七頁／一七頁―二二頁／二二頁―二六頁、一九八五年三月／一九八六年三月／一九八六年十二月刊)

(14) 『ヘルダーリンの西歐ギリシア論』(註(13)) (三) 神話の神 (1) 内面の

飛翔(第三四巻、二二頁―二四頁)参照。

(15) 五巻本ハンザ版シラー全集、一九六五年―七六年、第一巻、四一九頁。

(16) 『あたまも祝祭の日に……』第三節、第二二句―第二七句。全集、第二

巻、一一八頁。

二一 すなわち自然そのものが……

……

二三 生ける自然が今や甲冑の響きにして目覚め、

二四 して至高なる蒼穹の神気から、基底なす深淵まで水底深く、

二五 古典古代の如き堅固なる立法に則り、神聖なる混沌から誕生し、

二六 新たなる靈感を自ら、

二七 万有を生み出だす自然が再び掘む。

(17) 全集、第八卷、二八三頁参照。

(18) 全集、第七卷、第二分冊、四〇七頁。

この様に「鐘」に感激する心の動きは、例えばゲーテの『ファウスト』第一部における「夜」の場面で「復活祭の始まる時刻」(第七四五句)を告げる「鐘の音」(第七七三句)に関連して活写されている。

あの少年の頃には、かくも予感に満ち、溢れんばかりに鐘の音が響き渡り、そして祈りが、燃える悦楽だったのだ。

(ハムブルク版作品集、一九八二年、第三卷、三一頁、第七七三句—第七七四句)

(19) ハイム『ロマン派』(初版、一八七〇年)第三巻「浪漫主義最盛期」第一章(二八九頁—三三四頁)のヘルダーリン論(第四版、一九二〇年、三四一頁—三七六頁)の表題(二八九頁)が「浪漫詩文の傍系」(第四版、三四一頁)である。

シュミット著「ヘルダーリンのエレギー『パンとぶどう酒』」(註(6))三五頁において、「噴泉」(第九句)と「晩鐘」(第十一句)が「浪漫詩歌の二大主題(Zwei Hauptthème der romantischen Poesie)」、彼方と逝く時の流れ」に関連づけられる場合など、この種の解釈の一例であらう。そして当解釈によれば、「噴泉は、常なる生成と常なる消滅を物語り、晩鐘は、その音響が、時の大いなる脈動を感ぜしめる」(同三五頁)ことになる。

(20) 『パンとぶどう酒』のキリスト像に関しては筆者の別論、ヘルダーリンの西欧ギリシア論——至福なるギリシア」(註(13)) (三) 神話の神(1) 最深の親密性(第三五巻、二頁—四頁)を参照されたい。

(21) ヴァイマル版シラー全集、第一巻、一九四三年、一一一頁。

(22) 詳しくは筆者の別論、『パンとぶどう酒』第一節「聖なる夜」その三——「離在」と「噴泉」(註(4))を参照のこと。殊に(1)の註(13)。

(23) 『パンとぶどう酒』第一節、第七句—第十二句。全集、第二巻、九〇頁。註(1)参照。

(24) ルイーゼ・ヘンゼルのためのクレメンス・ブレンターノの日記書簡より、一八一六年十二月。註(1)ヘルダーリン全集、第七巻(資料篇)、第二分冊、

四三三頁。

(25) 右記(註(24))日記書簡。四三四頁。

引き続きブレンターノは当日日記書簡において、『パンとぶどう酒』第一節への統篇を創作すると言う「素晴らしい課題(eineschöne Aufgabe)」に触れる。後に註(28)で話題とする第一節への統篇(ヘルダーリンの「夜」への統篇)に関しては、別に註(18)に引用した一八一〇年一月二十一日付ルンゲ宛書簡にも「詩歌創作の願望(die Begerde, ein Gedicht zu erfinden)」として、引用に続く箇所において言及されている。詳細は各々の欧文註解を参照されたい。

(26) 詳細は筆者の別論、『パンとぶどう酒』第一節「聖なる夜」その二——「四」思慮深い家長(一九八六年度・高知大学学術研究報告、第三十五巻、人文科学篇、六七頁—一〇二頁所収、一九八六年十一月刊)を参照されたい。

(27) シュミット「ヘルダーリンのエレギー『パンとぶどう酒』」(註(6))三五頁。

この研究への批判は筆者の別論、『パンとぶどう酒』冒頭の都市像(一九八三年度・高知大学学術研究報告、第三十二巻、人文科学篇、二二頁—七〇頁所収、一九八四年三月刊)の「結語」(六〇頁—六四頁)の六二頁にこうある。

シュミットの「ヘルダーリンのエレギー『パンとぶどう酒』」でも、「忙しい生活の価値領域」が「崇高な精神的理想の生活の価値領域には踏みこめないものとして限定づけられており」、この二元論を解釈の基調として(三五頁)、

ひき続く詩行では、もはや昼の喜びについては語られず、それとは全く別種である、夜の時代におけるディオニュオスの飲びについて語られるのである。

と説明されている。この解釈もヴァックヴィッツの解釈と同様に、冒頭の都市像を思想詩の中心問題(例えば「至福なるギリシア」とは異質なものとしてそれに対立させる姿勢を示している)。

……これに対し、本論の思想詩読解は異なった方向をとった。すなわち私は、日常性に裏付けられながらも内面への道を辿る冒頭の都市

像に着眼し、その都市像の動静そのものの中に、「至福なるギリシア」(第四節)の「天上の祝祭」(第六節)へと至る道標の光明を読み取るうとしたのである。……従って、本論は、ヴァックヴィッツやシュミットの二元論に対する異議申し立てと考えられるであろう。(六二頁)

この他に英米系の研究でも『パンとぶどう酒』冒頭の都市像は、ブレントナー流に読解されている。それは例えばアンガー著『ヘルダーリンの主要な詩歌』(一九七五年)に、「晩鐘や夜警の叫び声が強く主張する点は、時の分断性や無常性を知っていることであり、これらの音響は故に、真正な時間(万物流転諸行無常)意識を誘う。」(七〇頁)と述べられている件に確かめることができると思われる。

(28) 註(一)ヘルダーリン全集 第七卷(資料篇)、第三分冊、五三九頁。

話題の牢獄と解された現世を、ヴァックヴィッツ著『一八〇〇年頃の悲哀と理想』(一九八二年)四七頁では「冥界(Unterwelt)」と説明する。

松明を飾して騒然と去る馬車は、私見によれば、ヘルセボネー神話への秘教的暗示である。「パンとぶどう酒」冒頭で直ちに現われるこの暗示が指し示すのは、当詩歌のような二行連句詩型作品すべての隠れた主題、すなわち現実の営みのある地上界と、この営みにより抑圧された冥界との相互関係である。

(29) 五卷本シラー全集(註(15))第一卷、四七三頁。

話題の「人倫の偉容(eine stichtliche Größe)」に関しては、更にシラーの別の詩歌作品「市民の歌(Bürgerlied)」(一七九八年九月成立、一七九九年「詩神年鑑」所収、後に「エレウシスの祝祭(Das Eleusische Fest)」と改題)の第二六節、第二〇七句に云う「人倫(Sitte)」を参照。ヴァイマル版シラー全集(註(21))第一卷、四三三頁。

二〇七 して偏に人倫(seine Site)によりて

二〇八 人間は自由で威力ある存在となり得る。

ところで「人倫」を形造るものがシラーやヘルダーリンにとっては、政治力や経済力よりもむしろ「詩歌の威力(Die Macht des Gesanges)」(註(21)シラー全集、第一卷、二二五頁)であつたと考えられ、しかも「ドイツの詩神(Die deutsche Muse)」(一八〇三年刊)でシラーが歌っているように、「ドイツの芸術が開花したのは、王侯の好意ある輝きにおい

てではなかった」(註(15)五卷本全集、第一卷、二二四頁)と言う脈絡が重要である。この点ではヘルダーの『人間性促進のための書簡(Briefe zur Beförderung der Humanität)』第八集(一七九六年)末尾を飾る第一〇七書簡の次の件も興味深い証言であろう。全集、第一八卷、一八八三年、一三七頁。作品集、一九七八年、第五卷、一六八頁―一六九頁。

どの時代においても、また如何なる言葉においても、詩歌(Poese)は或る国民の様々な過誤および完全性の精華であり、その国民の様々な物の考え方の鏡であり、その国民の努力目標たる至高のものの表現であった。……多様な思考様式や努力や願望を感ずこの画廊において私達は諸時代および諸国民を、その政治史とか戦史と言った慰めなき失望の道程においてよりも、確実に一層と深く知ることになる。すなわち後者において私達が国民に同じ見することはせいぜい支配と殺戮に過ぎないのに対し、前者では国民が如何に思考し、何を願望し欲したのか、どの様に自ら喜んだのかを学ぶのである。

此所でヘルダーが言う「詩歌」として、まず念頭に浮かぶのはゲーテの叙事詩「ヘルマンとドロテア」(一七九七年)であろう。少くとも当の「人倫の偉容」でシラーは、一七九四年来の盟友ゲーテのこの作品を考え併せ得たと思われる。実際イエーナの『一般文芸新聞(Allgemeine Literatur-Zeitung)』(一七九七年十二月)で碩学シュレーゲル兄(一七六七年―一八四五年)が早速に「『ヘルマンとドロテア』は偉大な様式を有した完成された芸術作品(ein vollendetes Kunstwerk)であり、かつ分かり易く、心情に溢れ、祖國的(vaterländisch)である」(ハムブルク版ゲーテ作品集、一九八二年、第二卷、七四二頁に註として引用)と称えた程であり、一九世紀初頭以来「パンとぶどう酒」が埋もれたままであったのに対し、恐らく「ヘルマンとドロテア」こそドイツの「祖國的」な詩歌作品の代表として持て映された模様である。蓋し「ロマン派」(一八三五年―三六年)でハイネがゲーテの文芸の本質に見た「丸く収まった芸術作品(ein abgerundetes Kunstwerk)」(世紀記念版全集、第八卷、一九七二年、三五頁)の性格は、「ヘルマンとドロテア」にも拭い去り難く、この叙事詩に具現された「人倫の偉容」が結局は、「疾風怒濤から初期ロマン派の若き旗手へと受け継がれた彼の進歩的で革命的な醗酵

gegeben wurden. Diese fanden in dem von Goethe und Schiller geschaffenen ästhetischen Klima unter dem Druck der historischen Ereignisse allzu leicht den Weg der irrationalistischen Umkehr und institutionalisierten dauerhaft jene Scheidung zwischen Literatur und Gesellschaft, gegen die sich das Beste im Jugendwerk der beiden Weimarer gerichtet hatte. ... Der bedeutendste dichterische Ausdruck der von der Weimarer Klassik bewirkten ästhetischen Restauration ist wohl der Roman „Wilhelm Meisters Lehrjahre“, den Goethe, das Fragment der „Theatralischen Sendung“ überarbeitend, von Mai 1794 bis August 1796 schrieb. ...

187)Honte, Jacques: Hegel secret. 1968.

188)Bertaux, Pierre: Hölderlin und die Französische Revolution. Frankfurt am Main. Suhrkamp. 1969.

189)Weiss, Peter „Hölderlin“(Stück in zwei Akten) Neufassung. Dezember 1971 — April 1972. Frankfurt am Main. Suhrkamp. 1972. S.188-192.

LOTTE ZIMMER Nicht doch nicht doch

ein grosser Verehrer sagt er
Ist er Ihrer Gedichte
schreibt auch selbst und ist
Redaktor

an der Rheinischen Zeitung

(Auftritt der junge Karl Marx. Er bleibt abwartend stehn. Hölderlin verbeugt sich tief.)

.....

S.188

MARX Es war die Begegnung

mit Ihrer Dichtung
vor allem dem Hyperion
die mir die eigenen Versuche
mit einem Schlag zerschmetterte
Vor solchem Licht und
solcher Deutlichkeit
mussten meine eignen Schreibereien
zu nichts zerfallen

Sie gaben mir Verehrtester
viel Verdross denn

S.189

plötzlich sah ich dass alles
was ich für Poesie hielt
auf dem Mond konstruiert war
Und dann

S.190

in dem was mir da unterging
und sich auf ein verschwommenes
Jenseits eingerichtet hatte
versuchte ich

mich wieder aufzubaun
In das zerrissne Allerheiligste
mussten neue Götter gesetzt werden

(Hölderlin ist Marx näher getreten. Er lauscht äusserst gespannt.)

.....

Vor Ihnen

S.190

stelle ich die beiden Wege
als gleichwertig hin

S.191

Dass Sie

S.192

ein halbes Jahrhundert zuvor
die Umwälzung nicht
als wissenschaftlich begründete
Notwendigkeit sondern
als mythologische Ahnung
beschrieben
ist Ihr Fehler nicht

.....

blühe — fragst du mich, wann diß seyn wird? Dann, wann die Liebblingin der Zeit, die jüngste, schönste Tochter der Zeit, die neue Kirche, hervorgehn wird aus diesen befleckten veralteten Formen, wann das erwachte Gefühl des Göttlichen dem Menschen seine Gottheit, und seiner Brust die schöne Jugend wiederbringen wird, wann — ich kann sie nicht verkünden, denn ich ahne sie kaum, aber sie kömmt gewiß, gewiß. Der Tod ist ein Bo-
te des Lebens, und daß wir jezt schlafen in unsern Krankenhäusern, diß zeugt vom nahen gesunden Erwachen. Dann, dann erst sind wir, dann isr das Element der Geister gefunden! ...

Vgl. „Hypérion“ Vol. I. I.Livre: OEuvres de la Pléiade. S.158-159.

Pluie du ciel, ô ferveur! Tu nous ramènera le printemps des nations! L'É-tat ne peut disposer de toi. Mais qu'il ne te gêne point, et tu viendras, avec tes voluptés toutes-puissantes, tu nous envelopperas dans un nuage d'or et nous élèveras au-dessus de la condition mortelle; alors, pleins de stupeur, nous douterons d'être ces mêmes indigents qui interrogeaient les astres pour (S.158/S.159) savoir s'ils verraient encore un prin-temps... Quand cela sera, me demandes-tu? Quand la préférée du Temps, sa plus jeune, sa plus belle fille, la nouvelle Église, surgira de ces formes désuètes et souillées, quand le réveil du sens du divin rendra à l'homme son dieu et au coeur sa jeunesse, quand... je ne l'annoncer, car c'est à peine si je la pressens, mais je ne doute pas qu'elle vienne. La mort est messagère de vie: si nous dormons maintenant dans notre hôpital, c'est que bientôt nous nous réveillerons guéris. Alors seulement nous serons, alors aurons trouvé l'élément où l'esprit respire!

Vgl. „Hellas und Hesperien bei Hölderlin“ (V(4)34) (III) „Gott der Mythe“ (5) „Reich Gottes“ (Forschungsberichte der Universität Kôchi fürs Jahr 1985. Geisteswissenschaften. Vol.34. 1986. S.34-37)..

182) „das geistige Wehen“ (V(4)5): StA. Bd.3. S.50)

183) Hölderlin. Eine Chronik in Text und Bild. Hrsg.: Beck, Adolf / Raabe, Paul: Schriften der Hölderlin-Gesellschaft (Tübingen). Bd.6/7. Frankfurt am Main. Insel. 1970. S.389.

Politisch war auch er Republikaner, Demokrat.

184) Heine „Die romantische Schule“ I. Buch: Säkularausgabe. Berlin/Paris. Aufbau/Centre National de la Recherche Scientifique. Bd.8. 1972. S.35.

der Geist wurde Materie unter seinen Händen, und er gab ihm die schöne gefällige Form. So wurde er der größte Künstler in unserer Literatur, und alles was er schrieb wurde ein abgerundetes Kunstwerk.

Vgl. „Hellas und Hesperien bei Hölderlin“ (V(4)34) (I) Schillers Aufbruch (3) „Das Ideal und das Leben“ (Forschungsberichte der Universität Kôchi fürs Jahr 1984. Vol.33. Geisteswissenschaften. 1985. S.22-26).

Vgl. Takahashi, Katsumi: VERINNERLICHUNG UND ERLEUCHTUNG — Über die erste Strophe von Hölderlins „Brod und Wein“: „Heilige Nacht“ Erster Teil (Forschungsberichte der Universität Kôchi fürs Jahr 1985. Vol.34. Geisteswissenschaften. 1986. S.155-201). S.170.

185) Vgl. V(4)157: Schillers Brief an Körner vom 25. Dezember 1788.

186) Baioni, Giuliano „Classicismo e Rivoluzione. Goethe e la Rivoluzione francese“ (Napoli. Guida Editori. 1969) 5. Kap.: Goethe-Jahrbuch. Bd.92. Weimar. Hermann Böhlau Nachfolger. 1975. S.73-127; „Märchen“ — „Wilhelm Meisters Lehrjahre“ — „Hermann und Dorothea“ (Übersetz.: Köster, Monika). S.83. Goethe und Schiller — es ist kaum erforderlich, das zu sagen — werden dadurch nicht plötzlich zu Reaktionären, denn sie vermitteln dem bürgerlichen 19. Jahrhundert die hohe humanistische Tradition der europäischen Aufklärung. Aber diese ausschließlich ästhetische Mission, die sie angesichts der politischen Realität der Revolution ihrer Klasse gegenüber vollbringen zu müssen glaubten, hatte die Tendenz, alle jene fortschrittlichen und revolutionären Fermente zu beseitigen, die von ihrem Sturm und Drang aus an die jungen Vertreter der Frühromantischen Schule weiter-

bau aufgehört hat, entscheidender Produktionszweig eines Landes zu sein, in welchem sich neben der ackerbauenden eine gewerbtreibende Klasse, neben den Dörfern Städte gebildet haben. ...

- Vgl. Takahashi, Katsumi: Das Stadtbild im Anfang von „Brod und Wein“ (Forschungsberichte der Universität Kôchi fürs Jahr 1983. Vol.32. Geisteswissenschaften. S.21-70. März 1984).
- 173) Fujihira „Die Utopie ...“ (V(4)163) S.105.
- 174) Das Stadtbild im Anfang von „Brod und Wein“ (V(4)172). S.30.
- 175) Takahashi, Katsumi: Über die erste Strophe von Hölderlins „Brod und Wein“: „Heilige Nacht“. Zweiter Teil: (IV) „Ein sinniges Haupt“ (Forschungsberichte der Universität Kôchi fürs Jahr 1986. Vol.35. Geisteswissenschaften. S.67-102. November 1986).
- 176) Takahashi, Katsumi: LANDAUER — „ein sinniges Haupt“ in Hölderlins „Brod und Wein“ (DOITSU BUNGAJU: DIE DEUTSCHE LITERATUR hrsg. v. der Japanischen Gesellschaft für Germanistik. Bd.73. Herbst 1984. S.83-91). S.83. Mit der Frage, ob das „sinnige Haupt“ ein „gescheiter Kaufmann“²⁾ oder ein „besonnener Hausvater“ ist, habe ich mich schon in meiner Arbeit: „Das Stadtbild im Anfang von ‚Brod und Wein‘“³⁾ auseinandergesetzt. ...
- 2) Im zweiten Band (1967) der Hölderlin-Übertragung ins Japanische (S.109) lautet es: „Nukarinonai Shonin“ (Tomio Tezuka).
- 3) Forschungsberichte der Universität Kôchi. Vol.32. Geisteswissenschaften. März 1984. S.38f. ...
- 177) Wackwitz, Stephan: Trauer und Utopie um 1800 — Studien zu Hölderlins Elegienwerk. Stuttgart. Hans-Dieter Heinz. 1982. S.30.
- Im Gegensatz zur menschlichen Erinnerung, die allein Verluste — die vergangene Jugend und die fernen Freunde — bilanzieren kann, ist die ökonomische Reflexion — die Überlegungen des „sinnigen Haupts“, des bourgeois — affirmativ. „Gewinn und Verlust“ werden „wohlzufrieden“ bedacht, denn die Praxis des Markts hat sich gelohnt. ...
- Vgl. Das Stadtbild im Anfang von „Brod und Wein“ (V(4)172). S.40.
- 178) Mann, Thomas (1875-1955) „Kultur und Sozialismus“ (1929): Gesammelte Werke. Berlin. Aufbau. 1956 (12 Bände). Bd.11. S.714.
- Was not tâte, was endgültig deutsch sein könnte, wäre ein Bund und Pakt der konservativen Kulturidee mit dem revolutionären Gesellschaftsgedanken, zwischen Griechenland und Moskau, um es pointiert zu sagen — schon einmal habe ich dies auf die Spitze zu stellen versucht. Ich sagte, gut werde es erst stehen um Deutschland, und dieses werde sich selbst gefunden haben, wenn Karl Marx den Friedrich Hölderlin gelesen haben werde — eine Begegnung, die übrigens im Begriffe sei, sich zu vollziehen. ...
- 179) Hölderlin „Hyperion“: StA. Bd.3. S.1.
- HYPERION ODER DER EREMIT IN GRIECHENLAND.
- Vgl. „Hypérion“ (V(4)5): OEuvres de la Pléiade. S.135.
- HYPERION OU L'ERMITE DE GRÈCE.
- 180) „Hyperion“ (V(4)5) Bd.1. II. Buch. Brief 30. S.159: StA. Bd.3. S.89.
- Heilige Natur! du bist dieselbe in und außer mir. Es muß so schwer nicht seyn, was außer mir ist, zu vereinen mit dem Göttlichen in mir. ...
- Vgl. „Hypérion“ Volume premier. II. Livre: OEuvres de la Pléiade. S.210.
- Nature sacrée! tu es en moi et hors de moi la même. Peut-être n'est-il pas si difficile d'unir ce qui est hors de moi au divin qui est en moi.
- 181) „Hyperion“ Bd.1. I. Buch. Brief 7. S.55: StA. Bd.3. S.32.
- O Regen vom Himmel! o Begeisterung! Du wirst den Frühling der Völker uns wiederbringen. Dich kann der Staat nicht hergebieten. Aber er störe dich nicht, so wirst du kommen, kommen wirst du, mit deinen allmächtigen Wonnen, in goldne Wolken wirst du uns hüllen und empor uns tragen über die Sterblichkeit, und wir werden staunen und fragen, ob wir es noch seyen, wir, die Dürftigen, die wir die Sterne fragten, ob dort uns ein Frühling

Vgl. Takahashi, Katsumi: Schiller contra Kleist — „Die Götter Griechenlandes“ und „Das Lob des einzigen Gottes“ („Die deutsche Literatur“ hrsg. v. dem Zweigbezirk Chûgoku-Shikoku der Japanischen Gesellschaft für Germanistik. Sansyusya. Bd.19. 1986. S.18-27).

Vgl. Kleist, Franz(1769-97) „Das Lob des einzigen Gottes“ („Der Teutsche Merkur“ hrsg. v. Wieland. August 1789. S.113-129: V(4)109).

164)Fujihira „Die Utopie ... “(V(4)163) S.102.

165)Stolberg(V(4)113) „Freiheitsgesang aus dem zwanzigsten Jahrhundert“ (1775) V.1-5/V.17-30: Der Göttinger Hain(V(4)87). S.195-196.

Sonne, du säumst!

Sonne, du säumst!

Weilen dich kühlende

Wellen des Meeres?

Sonne, du säumst!

5

... ..

Wir sahen dich einst,

Rauschender Strom,

Mitten im fliegenden Laufe gehemmt!

Bebend und bleich,

20

Wehend das Haar,

Stürzte der Tyrannen Flucht

Sich in deine wilden Wellen,

In die felsenwälzende Wellen

Stürzten sich die Freien nach;

25

Sanfter wallten deine Wellen!

Der Tyrannen Rosse Blut,

Der Tyrannen Knechte Blut,

Der Tyrannen Blut!

Der Tyrannen Blut!

30

166)Stolberg „Über die Fülle des Herzens“(1777-82): Der Göttinger Hain(V(4)87). S.231-243. S.231: Über die Fülle des Herzens.

167)Beck, Adolf „Hölderlin und Fr. L. Stolberg. Die Anfänge des hymnischen Stiles bei Hölderlin“: Iduna. Jahrbuch der Hölderlin-Gesellschaft. Bd.1. 1944. S.88-114.

168)Fujihira „Die Utopie ... “(V(4)163) S.104.

169)Fujihira „Die Utopie ... “(V(4)163) S.105.

170)Fujihira „Die Utopie ... “(V(4)163) S.108.

171)Fujihira „Die Utopie ... “(V(4)163) S.110.

172)Engels, Friedrich(1820-95) „Der Status quo in Deutschland“(1847): Marx/Engels. Werke. Institut Marxismus-Leninismus beim ZK der SED(Hrsg.). Berlin. Dietz. Bd.4. 1964. S.44.

England exportiert gar keine Ackerbauprodukte, sondern hat fortwährend auswärtige Zufuhren nötig; Frankreich importiert wenigstens ebensoviel davon, als es ausführt, und beide Länder stützen ihren Reichtum vor allem auf ihre Ausfuhr von Industrieerzeugnissen. Deutschland dagegen exportiert wenig Industrieprodukte, aber große Massen von Korn, Wolle, Vieh usw. Die überwiegende Bedeutung des Ackerbaus war noch viel größer als jetzt zu der Zeit, als Deutschlands politische Verfassung festgesetzt wurde — im Jahre 1815, und wurde damals noch durch den Umstand vermehrt, daß gerade die fast ausschließlich ackerbautreibenden Teile Deutschlands sich am eifrigsten an dem Sturz des französischen Kaiserreichs beteiligt hatten. Der politische Repräsentant des Ackerbaus ist in Deutschland wie in den meisten europäischen Ländern der Adel, die Klasse der großen Grundbesitzer. Die der ausschließlichen Herrschaft des Adels entsprechende politische Verfassung ist das Feudalsystem. Das Feudalsystem ist überall in demselben Maße zerfallen, in welchem der Acker-

S.195
S.196

Freundlos, ohne Bruder, ... // // // // Sieht er in dem langen Strom der
Zeiten / Ewig nur — sein eignes Bild. (1.Fas. 23.Str. V.177-184)

Ferner:

Da die Götter menschlicher noch waren,
Waren Menschen göttlicher.

(„Die Götter Griechenlandes" 1.Fas. 24.Str. V.191-192)

160)Takahashi, Katsumi „Hellas und Hesperien bei Hölderlin"(V(4)34) (II)Das
klassische Griechentum und das abendländische Christentum(Forschungsberich-
te der Universität Kōchi fürs Jahr 1984/1985. Vol.33. S.41-52/Vol.34. S.2-
20).

161)„Brod und Wein" 7.Str. V.109-110/V.119-124: StA. Bd.2. S.93/S.94.

Aber Freund! wir kommen zu spät. Zwar leben die Götter,
Aber über dem Haupt droben in anderer Welt.

110

...

.....

S.93
S.94

Donnernd kommen sie drauf. Indessen dünket mir öfters

Besser zu schlafen, wie so ohne Genossen zu seyn,

120

So zu harren und was zu thun indeß und zu sagen,

Weiß ich nicht und wozu Dichter in dürftiger Zeit?

Aber sie sind, sagst du, wie des Weingotts heilige Priester,

Welche von Lande zu Land zogen in heiliger Nacht.

Vgl. „Le Pain et le vin" v.109-110/v.119-124: OEuvres de la Pléiade. S.812/
S.813.

Mais nous venons trop tard, ami. Oui, les dieux vivent,

Mais là-haut, sur nos fronts, au coeur d'un autre monde.

110

...

.....

S.812
S.813

Alors, dans un fracas de foudre, ils surgiront. Mais jusqu'au jour de
leur venue,

Les sommeil souvent me paraît moins lourd que cette veille

120

Sans compagnon, cette fiévreuse attente... Ah! que dire encor? Que faire?

Je ne sais plus, — et pourquoi, dans ce temps d'ombre misérable, des
poètes?

Mais ils sont, nous dis-tu, pareils aux saints prêtres du dieu des vignes,

Vaguant de terre en terre au long de la nuit sainte.

162)Hölderlin „Patmos" 1.Str. V.1-8: StA. Bd.2. S.165.

Nah ist

Und schwer zu fassen der Gott.

Wo aber Gefahr ist, wächst

Das Rettende auch.

5

Im Finstern wohnen

Die Adler und furchtlos gehn

Die Söhne der Alpen über den Abgrund weg

Auf leichtgebaueten Brücken.

Vgl. „Patmos"(Traduction par Roud, Gustave) v.1-8: OEuvres de la Pléiade.
S.867.

Tout proche

Et difficile à saisir, le dieu!

Mais aux lieux du péril croît

Aussi ce qui sauve.

Dans la ténèbre

5

Nichent les aigles et sans frémir

Les fils des Alpes sur des ponts légers

Passent l'abîme.

163)Fujihira, Norio:„Die Utopie im 18. Jahrhundert Deutschlands — Stolbergs
„Die Insel" und Heinses „Ardinghello und die glückseligen Inseln"(For-
schungsberichte der Kyōyō-Fakultät der Universität Meyiji. Bd.144. 1981.
S.95).

157) Schillers Brief an Körner vom 25. Dezember 1788: Weimarer Nationalausgabe(V(4)111). Bd.25. 1979. S.167.

Mir schiens daß Dir wirklich die Stolbergische Sottise und mein Gedicht einige Details an die Hand gegeben haben würden, Deine allgemeine Richtschnur auf einen besondern Fall anzuwenden. Ueberhaupt glaube ich ist hier die allgemeine Regel festzusetzen. Der Künstler und dann vorzüglich der Dichter behandelt niemals das wirkliche sondern immer nur das ideale oder das kunstmäßig ausgewählte aus einem wirklichen Gegenstand. Z. B. er behandelt nie die Moral, nie die Religion sondern nur diejenige Eigenschaften von einer jeden, die er sich zusammen denken will — er vergeht sich also auch gegen keine von beyden, er kann sich nur gegen die aesthetische Anordnung oder gegen den Geschmack vergehen. Wenn ich aus den Gebrechen der Religion oder der Moral ein schönes übereinstimmendes Ganze zusammenstelle, so ist mein Kunstwerk gut, und es ist auch nicht unmoralisch oder gottlos, eben, weil ich beyde Gegenstände nicht nahm, wie sie sind, sondern erst wie sie nach einer gewaltsamen Operation, d.i. nach Absonderung und neuer Zusammenfügung wurden. Der Gott den ich in den Göttern Griechenlands in Schatten stelle ist nicht der Gott der Philosophen, oder auch nur das wohlthätige Traumbild des großen Haufens, sondern es ist eine aus vielen gebrechlichen schiefen Vorstellungsarten zusammen gefloßene Mißgeburt — Die Götter der Griechen, die ich ins Licht stelle sind nur die lieblichen Eigenschaften der Griechischen Mythologie in eine Vorstellungsart zusammen gefaßt. Kurz, ich bin überzeugt, daß jedes Kunstwerk nur sich selbst d.h. seiner eigenen Schönheitsregel Rechenschaft geben darf, und keiner andern Foderung unterworfen ist. ...

Vgl. Kant „Grundlegung zur Metaphysik der Sitten“(1785) Vorrede: Werke(V(4)21). Akademie-Textausgabe. Bd.4. S.388-389.

Alle Gewerbe, Handwerke und Künste haben durch die Vertheilung der Arbeiten gewonnen, da nämlich nicht einer alles macht, sondern jeder sich auf gewisse Arbeit, die sich ihrer Behandlungsweise nach von andern merklich unterscheidet, einschränkt, um sie in der größten Vollkommenheit und mit mehrerer Leichtigkeit leisten zu können. Wo die Arbeiter so nicht unterschieden und vertheilt werden, wo jeder ein Tausendkünstler ist, da liegen die Gewerbe noch in der größten Barbarei. ... : so frage ich hier doch nur, ob nicht die Natur der Wissenschaft es erfordere, den empirischen von dem rationalen Theil jederzeit sorgfältig abzusondern und vor der eigentlichen (empirischen) Physik eine Metaphysik der Natur, vor der praktischen Anthropologie aber eine Metaphysik der Sitten voranzuschicken, die von allem Empirischen sorgfältig gesäubert sein müßten, um zu wissen, wie viel reine Vernunft in beiden Fällen leisten (S.388/S.389) könne, und aus welchen Quellen sie selbst diese ihre Belehrung a priori schöpfe, es mag übrigens das letztere Geschäfte von allen Sittenlehrern (deren Name Legion heißt) oder nur von einigen, die Beruf dazu fühlen, getrieben werden. ...

158) Stolberg „Gedanken über ... Die Götter Griechenlandes“(V(4)113) S.100: Schiller und sein Kreis(V(4)113). S.45.

Jeder Lasterhafte fand einen Gott, oder eine Göttin, gegen welche er unschuldig scheinen, oder mit deren Beispiel er wenigstens seine Frevel beschönigen konte. ...

159) Stolberg „Gedanken ...“(V(4)158) S.102: Schiller und sein Kreis. S.47. Vermeßner ist diese Klage:

Alle jene Blüten sind gefallen / Vor des Nordes winterlichem Wehn; /
Einen zu bereichern, unter allen, / Müßte diese Götterwelt vergehn.

(Schiller „Die Götter Griechenlandes“ 1.Fas. 20.Str. V.153-156)

Zur Lästung gesellt sich die Satyre — Satyre! Himmel und Erde! gegen Wen?

Jene Polypennatur der griechischen Staaten, wo jedes Individuum eines unabhängigen Lebens genoß, und wenn es Noth that, zum Ganzen werden konnte, machte jetzt einem kunstreichen Uhrwerk Platz, wo aus der Zusammenstückelung unendlich vieler, aber lebloser, Theile ein mechanisches Leben im Ganzen sich bildet. ...

154) Hegel „System der Wissenschaft. Erster Theil: die Phänomenologie des Geistes" (Bamberg und Würzburg, bei Joseph Anton Goebhardt, 1807) Vorrede. S.38-39; Gesammelte Werke (Akademie-Ausgabe) in Verbindung mit der deutschen Forschungsgemeinschaft hrsg. v. der Rheinisch-Westfälischen Akademie der Wissenschaften (Düsseldorf). Bd.9. Hamburg. Felix Meiner. 1980. S.27: Werke(V(4)21). Bd.3. S.36.

Die Thätigkeit des Scheidens ist die Krafft und Arbeit des Verstandes, der verwundersamsten und größten, oder vielmehr der absoluten Macht. Der Kreis, der in sich geschlossen ruht, und als Substanz seine Momente hält, ist das unmittelbare und darum nicht verwundersame Verhältniß. Aber daß das von seinem Umfange getrennte Accidentelle als solches, das gebundene und nur in seinem Zusammenhange mit andern Wirkliche ein eigenes Daseyn und abgesonderte Freyheit gewinnt, ist die ungeheure Macht des Negativen; es ist die Energie des Denkens, des reinen Ichs. Der Tod, wenn wir jene Unwirklichkeit so nennen wollen, ist das furchtbarste, und das Todte fest zu halten, das, was die größte Krafft erfordert. Die kraftlose Schönheit haßt den Verstand, weil er ihr diß zumuthet was sie nicht vermag. Aber nicht das Leben, das sich vor dem Tode scheut und von der Verwüstung rein bewahrt, sondern das ihn erträgt, und in ihm sich erhält, ist das Leben des Geistes. Er gewinnt seine Wahrheit nur, indem er in der absoluten Zerrissenheit (S.38/S.39) sich selbst findet. Diese Macht ist er nicht, als das Positive, welches von dem Negativen wegsieht, wie wenn wir von etwas sagen, diß ist nichts oder falsch, und nun, damit fertig, davon weg zu irgend etwas anderem übergehen; sondern er ist diese Macht nur, indem er dem Negativen ins Angesicht schaut, bey ihm verweilt. ...

Vgl. Hölderlin/Hegel/Schelling „Das älteste Systemprogramm des deutschen Idealismus" (1796); StA. Bd.4. S.298; Hegel. Werke(V(4)21). Bd.1. S.235.

Zuletzt die Idee, die alle vereinigt, die Idee der Schönheit, das Wort in höherem platonischem Sinne genommen. Ich bin nun überzeugt, daß der höchste Akt der Vernunft, der, indem sie alle Ideen umfaßt, ein ästhetischer Akt ist, und daß Wahrheit und Güte, nur in der Schönheit verschwistert sind. Der Philosoph muß eben so viel ästhetische Kraft besitzen, als der Dichter. Die Menschen ohne ästhetischen Sinn sind unsre Buchstaben Philosophen. Die Philosophie des Geistes ist eine ästhetische Philosophie. Man kan in nichts geistreich seyn, selbst über Geschichte kan man nicht geistreich raisonniren — ohne ästhetischen Sinn. Hier soll offenbar werden, woran es eigentlich den Menschen fehlt, die keine Ideen verstehen, — und treuherzig genug gestehen, daß ihnen alles dunkel ist, sobald es über Tabellen und Register hinausgeht. Die Poësie bekommt dadurch eine höhere Würde, sie wird am Ende wieder, was sie am Anfang war — Lehrerin der Menschheit; denn es gibt keine Philosophie, keine Geschichte mehr, die Dichtkunst allein wird alle übrigen Wissenschaften und Künste überleben. ... (StA. Bd.4. S.298)

155) „Phänomenologie des Geistes" Vorrede. S.38-39(V(4)154).

156) „Phänomenologie des Geistes" Vorrede. S.32; Akademie-Ausgabe. Bd.9(V(4)154). S.24; Werke(V(4)21). Bd.3. S.31.

die Begeisterung, die wie aus der Pistole mit dem absoluten Wissen unmittelbar anfängt, ... (Akademie-Ausgabe. Bd.9. S.24)

Vgl. Takahashi, Katsumi „Hellas und Hesperien bei Hölderlin"(V(4)34) (III) „Gott der Mythe" (6) „Intellectuale Anschauung"/(7) „Die absolute Zerrissenheit" (Forschungsberichte der Universität Kôchi fürs Jahr 1985. Vol.34. Geistes Wissenschaften. S.37-52).

Werk, tretet hin und erkennt das tiefste Gefühl von Wahrheit und Schönheit der Verhältnisse, wirkend aus starker, rauher, deutscher Seele, auf dem eingeschränkten düstern Pfaffenschauplatz des *medii aevi*. ...

q) „EIN BUND DER KONSERVATIVEN KULTURIDEE MIT DEM REVOLUTIONÄREN GESELLSCHAFTSGEDANKEN“

153) Schiller „Über Bürgers Gedichte“: Weimarer Nationalausgabe. Bd.22(V(4)149). S.245.

Bei der Vereinzelung und getrennten Wirksamkeit unsrer Geisteskräfte, die der erweiterte Kreis des Wissens und die Absonderung der Berufsgeschäfte notwendig macht, ist es die Dichtkunst beinahe allein, welche die getrennten Kräfte der Seele wieder in Vereinigung bringt, welche Kopf und Herz, Scharfsinn und Witz, Vernunft und Einbildungskraft in harmonischem Bunde beschäftigt, welche gleichsam den ganzen Menschen in uns wieder herstellt. ...

Vgl. Schiller „Philosophie der Physiologie“ (1779) I. Das geistige Leben. §.1: Weimarer Nationalausgabe. Bd.20(V(4)111). S.10.

§.1. Bestimmung des Menschen. Soviel wird, denke ich, einmal fest genug erwiesen seyn, daß das Universum das Werk eines unendlichen Verstandes sei und entworfen nach einem treflichen Plane. So wie es izt durch den allmächtigen Einfluß der göttlichen Kraft aus dem Entwurffe zur Wirklichkeit hinrann, und alle Kräfte wirken, und in einander wirken, gleich Saiten eines Instruments tausendstimmig zusammenlautend in eine Melodie: so soll der Geist des Menschen, mit Kräften der Gottheit geadelt, aus den einzelnen Wirkungen Ursach und Absicht, aus dem Zusammenhang der Ursachen und Absichten all den grossen Plan des Ganzen entdeken, aus dem Plane den Schöpfer erkennen, ihn lieben, ihn verheerlichen, oder kürzer, erhabner klingend in unseren Ohren: der Mensch ist da, daß er nachringe der Größe seines Schöpfers, mit eben dem Blik umfaße die Welt, wie der Schöpfer sie umfaßt — Gottgleichheit ist die Bestimmung des Menschen. Unendlich zwar ist diß sein Ideal: aber der Geist ist ewig. Ewigkeit ist das Maas der Unendlichkeit, das heist, er wird ewig wachsen, aber es niemals erreichen.

Vgl. „so fließt in Einen Bund der Wahrheit / in Einen Strohm des Lichts zurück!“ („Die Künstler“ V.480-481: V(4)135).

Vgl. Schiller „An die Freude“ („Thalia“ hrsg. v. Schiller. 1786: V(4)131) 2. Str. V.13-20; Weimarer Nationalausgabe. Bd.1(V(4)108). S.169: „An die Freude“ Zweite Fassung (Ausgabe letzter Hand 1805: V(4)131). 2.Str. V.13-20; Weimarer Nationalausgabe. Bd.2. Teil I(V(4)74). S.185.

Wem der große Wurf gelungen, eines Freundes Freund zu seyn; wer ein holdes Weib errungen, mische seinen Jubel ein! Ja — wer auch nur eine Seele sein nennt auf dem Erdenrund! Und wer's nie gekonnt, der stehle weinend sich aus diesem Bund!	15	Wem der große Wurf gelungen Eines Freundes Freund zu seyn, Wer ein holdes Weib errungen, Mische seinen Jubel ein! Ja — wer auch nur Eine Seele Sein nennt auf dem Erdenrund! Und wer's nie gekonnt, der stehle Weinend sich aus diesem Bund!
(Erste Fassung. 1786)	20	(Zweite Fassung. 1805)

Vgl. Schiller „Ueber die ästhetische Erziehung ...“ (V(4)134) 6. Brief: Weimarer Nationalausgabe. Bd.20(V(4)111). S.322-323.

Die Kultur selbst war es, welche der neuern Menschheit diese Wunde schlug. Sobald auf der einen Seite die erweiterte Erfahrung und das bestimmtere Denken eine schärfere Scheidung der Wissenschaften, auf der andern das verwickeltere Uhrwerk der Staaten eine strengere Absonderung der Stände und Ge- (S.322/S.323) schäfte nothwendig machte, so zerriß auch der innere Bund der menschlichen Natur, und ein verderblicher Streit entzweyte ihre harmonischen Kräfte. ...

Das Unzulängliche,
Hier wird's Ereignis;
Das Unbeschreibliche,
Hier ist's getan;
Das Ewig-Weibliche
Zieht uns hinan.

12110

Vgl. Koike, Tatsuo: Schriften. Hrsg.: Koike=Tatsuo-Schriften=Veröffentlichungsgesellschaft. Bd.2: „Die Seele der Kunst“. S.320-321.

Vgl. Goethe „Von deutscher Baukunst“(1772): Werke(V(4)14). Bd.12. S.11.

Mit welcher unerwarteten Empfindung überraschte mich der Anblick, als ich davor trat! Ein ganzer, großer Eindruck füllte meine Seele, den, weil er aus tausend harmonierenden Einzelheiten bestand, ich wohl schmecken und genießen, keineswegs aber erkennen und erklären konnte. ... Wie oft bin ich zurückgekehrt, von allen Seiten, aus allen Entfernungen, in jedem Lichte des Tags zu schauen seine Würde und Herrlichkeit! Schwer ist's dem Menscheng Geist, wenn seines Bruders Werk so hoch erhaben ist, daß er nur beugen und anbeten muß. Wie oft hat die Abenddämmerung mein durch forschendes Schauen ermattetes Aug' mit freundlicher Ruhe geletzt, wenn durch sie die unzähligen Teile zu ganzen Massen schmolzen, und nun diese, einfach und groß, vor meiner Seele standen und meine Kraft sich wonnevoll entfaltete, zugleich zu genießen und zu erkennen! Da offenbarte sich mir, in leisen Ahndungen, der Genius des großen Werkmeisters. ...

Vgl. Hegel „Philosophie der Geschichte“(V(4)21) Einleitung: Werke in 20 Bänden(V(4)21). Bd.12. S.67.

Die Hauptsache ist, daß die Freiheit, wie sie durch den Begriff bestimmt wird, nicht den subjektiven Willen und die Willkür zum Prinzip hat, sondern die Einsicht des allgemeinen Willens, und daß das System der Freiheit freie Entwicklung ihrer Momente ist. Der subjektive Wille ist eine ganz formelle Bestimmung, in der gar nicht liegt, was er will. Nur der vernünftige Wille ist dies Allgemeine, das sich in sich selbst bestimmt und entwickelt und seine Momente als organische Glieder auslegt. Von solchem gotischen Dombau haben die Alten nichts gewußt.

Vgl. Goethe „Maximen und Reflexionen“ 87: Werke(V(4)14). Bd.12. S.377.

Antike Tempel konzentrieren den Gott im Menschen; des Mittelalters Kirchen streben nach dem Gott in der Höhe.

Vgl. „Von deutscher Baukunst“(1772): Werke(V(4)14). Bd.12. S.7/S.10/S.12/S.14.

Als ich auf deinem Grabe herumwandelte, edler Erwin, und den Stein suchte, der mir deuten sollte: Anno domini 1318. XVI. Kal. Febr. obiit Magister Ervinus, Gubernator Fabricae Ecclesiae Argentinensis, ... Wenigen ward es gegeben, einen Babelgedanken in der Seele zu zeugen, ganz, groß, und bis in den kleinsten Teil notwendig schön, wie Bäume Gottes; ... (S.7//S.10) ... Wohl! wenn uns der Genius nicht zu Hülfe käme, der Erwinen von Steinbach eingab: vermannigfaltige die ungeheure Mauer, die du gen Himmel führen sollst, daß sie aufsteige gleich einem hoherhabnen, weitverbreiteten Baume Gottes, der mit tausend Ästen, Millionen Zweigen und Blättern wie der Sand am Meer ringsum der Gegend verkündet die Herrlichkeit des Herrn, seines Meisters. ... (S.10//S.12) ... Und nun soll ich nicht ergrimmen, heiliger Erwin, wenn der deutsche Kunstgelehrte, auf Hörensagen neidischer Nachbarn, seinen Vorzug verkennt, dein Werk mit dem unverstandnen Worte Gotisch verkleinert. Da er Gott danken sollte, laut verkündigen zu können: Das ist deutsche Baukunst, unsre Baukunst, da der Italiener sich keiner eignen rühmen darf, viel weniger der Franzos. ... wir ... treten anbetend vor das Werk des Meisters, der zuerst die zerstreuten Elemente in ein lebendiges Ganze zusammenschuf. ... (S.12/S.14) ... Und von der Stufe, auf welche Erwin gestiegen ist, wird ihn keiner herabstoßen. Hier steht sein

vor und es wird mir wohl nicht leicht werden, den Karlos mit Verstand zu lesen, da er lange Zeit die Zaubervolke war, in die der gute Gott meiner Jugend mich hüllte, daß ich nicht zu frühe das Kleinliche und Barbarische der Welt sah, die mich umgab. ...

Vgl. lettre à Schiller, première quinzaine de septembre 1799 (Traduction par Naville, Denise): OEuvres de la Pléiade. S.744.

... noble maître! — J'ai aussi étudié votre Fiesco, et j'en ai pareillement admiré la structure interne, toute la forme vivante, par quoi cette oeuvre me semble impérissable, bien plus encore que par les caractères si grands et pourtant si vrais, les situations éblouissantes, le miroitement ensorcelant du langage. Les autres pièces, je les garde en réserve, et il ne me sera guère plus facile sans doute de lire Don Carlos avec calme et réflexion, car il fut longtemps le nuage magique dont un Dieu de bonté entoura ma jeunesse, afin de ne pas me dévoiler trop tôt la mesquinerie et la barbarie du monde. ...

147) Hölderlins Brief 194: StA. Bd.6. S.364-365(V(4)146).

148) Naito, Katsuhiko: Eine Betrachtung über Schillers „Über Bürgers Gedichte“ („Akademia“ hrsg. v. der wissenschaftlichen Gesellschaft der Universität Nanzan, Nagoya. Bd.21. 1958. S.71-97).

149) Schiller „Über Bürgers Gedichte“ (1791): Weimarer Nationalausgabe(V(4)74). Bd.22. 1958. S.245-264. S.253.

Eine der ersten Erfordernisse des Dichters ist Idealisierung, Veredlung, ohne welche er aufhört, seinen Namen zu verdienen. Ihm kommt es zu, das Vortreffliche seines Gegenstandes (mag dieser nun Gestalt, Empfindung oder Handlung sein, in ihm oder außer ihm wohnen) von gröbern, wenigstens fremdartigen Beimischungen zu befreien, die in mehreren Gegenständen zerstreuten Strahlen von Vollkommenheit in einem einzigen zu sammeln, einzelne, das Ebenmaß störende Züge der Harmonie des Ganzen zu unterwerfen, das Individuelle und Lokale zum Allgemeinen zu erheben. Alle Ideale, die er auf diese Art im einzelnen bildet, sind gleichsam nur Ausflüsse eines innern Ideals von Vollkommenheit, das in der Seele des Dichters wohnt. Zu je größerer Reinheit und Fülle er dieses innere allgemeine Ideal ausgebildet hat, desto mehr werden auch jene einzelnen sich der höchsten Vollkommenheit nähern. Diese Idealisierkunst vermessen wir bei Hn. Bürger. ...

150) „Über Bürgers Gedichte“: Bd.22(V(4)149). S.246.

Es ist also nicht genug, Empfindung mit erhöhten Farben zu schildern; man muß auch erhöht empfinden. Begeisterung allein ist nicht genug; man fordert die Begeisterung eines gebildeten Geistes. Alles, was der Dichter uns geben kann, ist seine Individualität. ...

Vgl. Bd.22(V(4)149). S.256: „Über Bürgers Gedichte“

Selbst in Gedichten, von denen man zu sagen pflegt, daß die Liebe, die Freundschaft u.s.w. selbst dem Dichter den Pinsel dabei geführt habe, hatte er damit anfangen müssen, sich selbst fremd zu werden, den Gegenstand seiner Begeisterung von seiner Individualität loszuwickeln, seine Leidenschaft aus einer mildernden Ferne anzuschauen. Das Idealschöne wird schlechterdings nur durch eine Freiheit des Geistes, durch eine Selbsttätigkeit möglich, welche die Übermacht der Leidenschaft aufhebt.

151) „Über Bürgers Gedichte“: Bd.22(V(4)149). S.257.

... — aber eben deswegen möchten wir es, seiner glänzenden Vorzüge ungeachtet, nur ein sehr vortreffliches Gelegenheitsgedicht nennen — ein Gedicht nämlich, dessen Entstehung und Bestimmung man es allenfalls verzeiht, wenn ihm die idealische Reinheit und Vollendung mangelt, die allein den guten Geschmack befriedigt. ...

152) Goethe „Faust“ (V(4)51/66) V.12104-12111 (Chorus mysticus): Werke(V(4)14). Bd.3. S.364.

Alles Vergängliche

Ist nur ein Gleichnis;

141)Martini, Fritz: Deutsche Literaturgeschichte. Von den Anfängen bis zur Gegenwart. 6.Aufl. Stuttgart. Kröner. 1972. S.181.

Haller ... in großen Lehrgedichten ... Mit ihm beginnt jene machtvolle Gedankendichtung, die bei Schiller eine reife Vollendung fand.

142)Burckhardt „Gedächtnisrede auf Schiller“(V(4)138): Mayer „Schillers Gedichte ...“(V(4)138) S.73.

Fortan steht er einzig unter allen lyrischen Dichtern, weil er mit starkem, geläutertem Willen der Verewigung des einzelnen Momentes, der einzelnen Situation wesentlich entsagt, nicht zu jener Gattung gehört, in der vor allem groß sind Properz, Ovid, Byron, Victor Hugo, Goethe. Schiller verewigt das Ganze einer Empfindung in der edelsten und gewaltigsten Stilform. Fortan sammelt er alle Strahlen des Gefühls vollständig, so daß er trotz der Allgemeingiltigkeit seiner Gedichte doch so ergreift, wie nur das Momentane irgend kann. Tausende haben schöne Liebeslieder gedichtet, nur Er die Würde der Frauen ...

Vgl. Brentano(V(4)73) „Brief an Philipp Otto Runge vom 21. Januar 1810“: StA. Bd.7. 2.Teil. S.407.

... und einige Oden des wahnsinnig gewordenen Würtemberger Dichters Hölderlin, z.B. seine Elegie an die Nacht, seine Herbstfeyer, sein Rhein, Pathmos, und andere, welche in den zwey Musenalmanachen Seckendorf's von 1807 und 1808 vergessen und unerkant stehen. Niemals ist vielleicht hohe betrachtende Trauer so herrlich ausgesprochen worden. Manchmal wird dieser Genius dunkel und versinkt in den bittern Brunnen seines Herzens; meistens aber glänzet sein apokalyptischer Stern Wermuth wunderbar rührend über das weite Meer seiner Empfindung. Wenn Sie diese Bücher finden können, so lesen Sie diese Lieder doch. Besonders ist die Nacht klar und sternenhell und einsam und rück- und vorwärts tönende Glocke aller Erinnerung; ich halte sie für eines der gelungensten Gedichte überhaupt. Während ich Solches erlebte, entstand in mir unbewußt die Begierde, ein Gedicht zu erfinden, ...

143)Hölderlins Brief 243: StA. Bd.6. S.436(V(4)132).

... Liebeslieder immer müder Flug, ... ein anders ist das hohe und reine Frohloken vaterländischer Gesänge. ...

144)Burckhardt „Gedächtnisrede auf Schiller“(V(4)138) S.72.

Alles an dieser Erscheinung ist unhistorisch und a priori unmöglich, und dennoch ist dieser Posa in der Entwicklung der deutschen Poesie und Gefühlswelt unentbehrlich, man darf wohl sagen, dieser Kosmopolit ist die nationalste Figur der deutschen Literatur.

145)Hölderlins Brief 139 an Schiller vom 20. Juni 1797 : StA. Bd.6. S.241.

... , aber von Ihnen dependir'ich unüberwindlich; ... Aber diese schlimme Alternative ist fast unvermeidlich, wo gewaltiger und verständlicher, als die Natur, aber ebendeßwegen auch unterjochender und positiver der reife Genius der Meister auf den jüngern Künstler wirkt. ...

Vgl. lettre à Schiller, 20 juin 1797(Traduction par Naville, Denise): OEuvres de la Pléiade. S.415-416.

... , mais par rapport à vous ma dépendance est insurmontable, ... (S.415/S.416) ... Mais cette redoutable alternative est presque inévitable lorsque le génie accompli des maîtres, plus puissant et plus compréhensible que la nature, mais de ce fait plus asservissant et plus positif, exerce son action sur l'artiste plus jeune. ...

146)Hölderlins Brief 194 an Schiller, erste Hälfte September 1799: StA. Bd. 6. S.364-365.

... — edler Meister! — Ihren Fiesko habe ich auch studirt und gerade auch wieder den innern Bau, die ganze lebendige Gestalt, nach meiner (S. 364/S.365) Einsicht das Unvergänglichste des Werks, noch mehr als die großen und doch so wahren Charaktere, und glänzenden Situationen und magischen Farbenspiele der Sprache bewundert. Die Übrigen stehen mir noch be-

Wie sich in sieben milden Strahlen
 Der weiße Schimmer lieblich bricht, 475
 Wie sieben Regenbogenstrahlen
 Zerrinnen in das weiße Licht,
 So spielt in tausendfacher Klarheit
 Bezaubernd um den trunk'nen Blick,
 So fließt in Einen Bund der Wahrheit, 480
 In Einen Strom des Lichts zurück!
 (Ausgabe letzter Hand. 1805: Nationalausgabe. Bd.2. Teil I. S.396)

p) „IDEALISIERKUNST“

136) Schiller „Was heißt und zu welchem Ende studiert man Universalgeschichte? / Eine akademische Antrittsrede“ (26. Mai 1789): Weimarer Nationalausgabe (V(4)74). Bd.17. 1970. S.359-376. S.373.

Nicht lange kann sich der philosophische Geist bey dem Stoffe der Weltgeschichte verweilen, so wird ein neuer Trieb in ihm geschäftig werden, der nach Uebereinstimmung strebt — der ihn unwiderstehlich reizt, alles um sich herum seiner eigenen vernünftigen Natur zu assimiliren, und jede ihm vorkommende Erscheinung zu der höchsten Wirkung die er erkennt, zum Gedanken zu erheben. Je öfter also und mit je glücklicherm Erfolge er den Versuch erneuert, das Vergangene mit dem Gegenwärtigen zu verknüpfen: desto mehr wird er geneigt, was er als Ursache und Wirkung in einander greifen sieht, als Mittel und Absicht zu verbinden. Eine Erscheinung nach der andern fängt an, sich dem blinden Ohngefähr, der gesetzlosen Freyheit zu entziehen, und sich einem übereinstimmenden Ganzen (das freylich nur in seiner Vorstellung vorhanden ist) als ein passendes Glied anzureyhen. ...

137) Hölderlins Brief 231 an den Bruder, wohl zweite Hälfte März 1801: StA. Bd.6. S.419-420.

Und so sei denn auch unter uns, bei dieser Bundeserneuerung, die gewiß nicht Ceremonie oder Laune ist, a Deo principium. Wie wir sonst zusammendachten, denke ich noch, nur angewandter! Alles unendliche Einigkeit, aber in diesem Allem ein vorzüglich Einiges und Einigendes, das, an sich, kein Ich ist, und dieses sei unter uns Gott! ... (S.419/S.420) ... Hier in dieser Unschuld des Lebens, hier unter den silbernen Alpen, soll mir es auch endlich leichter von der Brust gehen. Die Religion beschäftigt mich vorzüglich. ...

Vgl. lettre à son frère, probablement deuxième quinzaine de mars 1801 (Traduction par Naville, Denise): OEuvres de la Pléiade. S.997-998.

Sois donc des nôtres dans cette alliance nouvelle qui n'a rien d'une cérémonie ou d'une fantaisie, a Deo principium. Les idées que nous partageons autrefois, je les ai toujours, mais mieux appliquées dans la pratique. Tout est unité infinie, mais dans ce Tout il est une unité, un principe unifiant par excellence qui, en soi, n'est pas un Moi; que cela soit, entre nous, Dieu! ... (S.997/S.998) ... Ici, dans cette innocence de la vie, ici, au pied des Alpes argentées, cela me viendra enfin plus facilement du coeur. La question religieuse me préoccupe essentiellement. ...

138) Burckhardt, Jacob (1818-97) „Gedächtnisrede auf Schiller“ (9. November 1859): Jahrbuch der Deutschen Schillergesellschaft. Bd.4. Stuttgart. Kröner. 1960. Mayer, Hans „Schillers Gedichte und die Traditionen deutscher Lyrik“ (S.72-89) S.72-73.

Es ist wohl das höchste Programm, das je aufgestellt (S.72/S.73) worden ist. Man darf das Gedicht neben seinen philosophischen Schriften und den Briefen über Don Carlos nennen als den stärksten Beweis für seine Gewissenhaftigkeit im Fache.

139) Vgl. V(4)138.

140) Burckhardt: op.cit. (V(4)138). S.74: „Erlebnisdichtung“

134) Storz, Gerhard: Der Dichter Friedrich Schiller. Stuttgart. Klett. 1959. 4. Aufl. 1968. S.206-214: Die Götter Griechenlands – Die Künstler. S.213.

Das Musikalische eines Gedichtes schwebt mir weit öfter vor der Seele, wenn ich mich hinsetze, es zu machen, als der klare Begriff vom Inhalt, über den ich oft kaum mit mir einig bin. ... an Körner, 25. Mai 1792.

Vgl. „Eine gewisse musikalische Gemütsstimmung geht vorher“ (V(4)126)

Vgl. Dichter über ihre Dichtungen. Friedrich Schiller. 2 Bände. München. Heimeran. 1969. Bd.1. S.725.

Das Musikalische eines Gedichtes schwebt mir weit öfter vor der Seele, als der klare Begriff von Inhalt, über den ich oft kaum mit mir einig bin. Ich bin durch meine Hymne an das Licht, die mich jetzt manchen Augenblick beschäftigt, auf diese Bemerkung geführt worden. ...

Vgl. Schiller „Ueber die ästhetische Erziehung des Menschen in einer Reihe von Briefen“ 22. Brief (die Musik)/23. Brief (die ästhetische Gemütsstimmung): Weimarer Nationalausgabe. Bd.20(V(4)111). S.381/S.384-385.

Die Musik in ihrer höchsten Veredlung muß Gestalt werden, und mit der ruhigen Macht der Antike auf uns wirken; die bildende Kunst in ihrer höchsten Vollendung muß Musik werden und uns durch unmittelbare sinnliche Gegenwart rühren; die Poesie, in ihrer vollkommensten Ausbildung muß uns, wie die Tonkunst mächtig fassen, zugleich aber, wie die Plastik, mit ruhiger Klarheit umgeben. ... (S.381//S.384) ... Durch die ästhetische Gemütsstimmung wird also die Selbstthätigkeit der Vernunft schon auf dem Felde der Sinnlichkeit (S.384/S.385) eröffnet, die Macht der Empfindung schon innerhalb ihrer eigenen Grenzen gebrochen, und der physische Mensch so weit veredelt, daß nunmehr der geistige sich nach Gesetzen der Freyheit aus demselben bloß zu entwickeln braucht. ...

135) Schiller „Die Künstler“ („Der Teutsche Merkur“ hrsg. v. Wieland. März 1789. S.283-302: V(4)112) 33.Str. (S.302). V.466-481; Weimarer Nationalausgabe. Bd.1(V(4)108). S.214: „Gedichte“ Zweyter Theil. 1803; Weimarer Nationalausgabe. Bd.2. Teil I(V(4)74). S.138: „Die Künstler“ (Ausgabe letzter Hand. 1805. Viertes Buch) 31.Str. V.466-481; Weimarer Nationalausgabe. Bd.2. Teil I(V(4)74). S.396.

Erhebet euch mit kühnem Flügel
hoch über euren Zeitenlauf;
fern dämmre schon in euerm Spiegel
das kommende Jahrhundert auf.
Auf tausendfach verschlungnen Wegen
der reichen Mannigfaltigkeit
kommt dann umarmend euch entgegen
am Thron der hohen Einigkeit.
Wie sich in sieben milden Strahlen
der weisse Schimmer lieblich bricht,
wie sieben Regenbogenstrahlen
zerrinnen in das weiße Licht:
so spielt in tausendfacher Klarheit
bezaubernd um den trunknen Blick,
so fließt in Einen Bund der Wahrheit
in Einen Strom des Lichts zurück!

470

475

480

(„Der Teutsche Merkur“ 1789. S.302: Nationalausgabe. Bd.1. S.214)

Erhebet euch mit kühnem Flügel
Hoch über euren Zeitenlauf;
Fern dämm're schon in eurem Spiegel
Das kommende Jahrhundert auf.
Auf tausendfach verschlung'nen Wegen
Der reichen Mannichfaltigkeit
Kommt dann umarmend euch entgegen
Am Thron der hohen Einigkeit.

470

oder der Götter, deren Größe und Macht das ganze Innere durchdringt und den Dichter als Individuum verschwinden läßt. Hymnen, Dithyramben, Päne, Psalmen gehören in diese Klasse, ... (S.451/S.454) ... β) Auf einem zweiten Standpunkte stehen diejenigen Arten der lyrischen Poesie, welche sich durch den allgemeinen Namen Ode, im neueren Sinne des Worts, bezeichnen lassen. ... (S.454/S.456) ... γ) Die ganze unendliche Mannigfaltigkeit der lyrischen Stimmung und Reflexion breitet sich endlich auf der Stufe des Liedes auseinander, ... (S.456/S.460) ... Die dritte Stufe in dieser Sphäre wird durch eine Behandlungsweise ausgefüllt, deren Charakter neuerdings unter uns Deutschen am schärfsten in Schiller hervorgetreten ist. Die meisten seiner lyrischen Gedichte, wie die »Resignation«, »Die Ideale«, »Das Reich der Schatten«, »Die Künstler«, »Das Ideal und das Leben«, sind ebensowenig eigentliche Lieder als Oden oder Hymnen, Episteln, Sonette oder Elegien im antiken Sinne; sie nehmen im Gegenteil einen von allen diesen Arten verschiedenen Standpunkt ein. Was (S.460/S.461) sie auszeichnet, ist besonders der großartige Grundgedanke ihres Inhalts, von welchem der Dichter jedoch weder dithyrambisch fortgerissen erscheint noch im Drange der Begeisterung mit der Größe seines Gegenstandes kämpft, sondern desselben vollkommen Meister bleibt und ihn mit eigener poetischer Reflexion, in ebenso schwingreicher Empfindung als umfassender Weite der Betrachtung mit hinreißender Gewalt in den prächtigsten, volltönendsten Worten und Bildern, doch meist ganz einfachen, aber schlagenden Rhythmen und Reimen nach allen Seiten hin vollständig expliziert. Diese großen Gedanken und gründlichen Interessen, denen sein ganzes Leben geweiht war, erscheinen deshalb als das innerste Eigentum seines Geistes; aber er singt nicht still in sich oder in geselligem Kreise wie Goethes liederreicher Mund, sondern wie ein Sänger, der einen für sich selbst würdigen Gehalt einer Versammlung der Hervorragendsten und Besten vorträgt. So tönen seine Lieder, wie er selbst von seiner Glocke sagt:

Hoch überm niedern Erdenleben
Soll sie in blauem Himmelszelt,

...

(Schiller „Das Lied von der Glocke“ 1800. V.397-408)

Vgl. Hölderlin „Deutscher Gesang“ V.20: „Chant allemand“ v.20(V(4)23).

Den Seelengesang.: Le chant de l'âme.

133) Schillers Brief an Körner vom 21. Oktober 1800: Weimarer Nationalausgabe(V(4)111). Bd.30. 1961. S.206.

Verschiedene, wie die Künstler, habe ich wohl zwanzigmal in der Hand herum geworfen, eh ich mich entschied. Deinen Gedanken wegen dieses Gedichts hatte ich anfangs auch aber er ist nicht auszuführen. Leider ist daßelbe durchaus unvollkommen und hat nur einzelne glückliche Stellen, um die es mir freilich selbst leid thut. Die Freude hingegen ist nach meinem jetzigen Gefühl durchaus fehlerhaft, und ob sie sich gleich durch ein gewisses Feuer der Empfindung empfiehlt, so ist sie doch ein schlechtes Gedicht und bezeichnet eine Stufe der Bildung, die ich durchaus hinter mir lassen mußte um etwas ordentliches hervorzubringen. Weil sie aber einem fehlerhaften Geschmack der Zeit entgegen kam, so hat sie die Ehre erhalten, gewissermaßen ein Volksgedicht zu werden. Deine Neigung zu diesem Gedicht mag sich auf die Epoche seiner Entstehung gründen; ...

Vgl. „Goethe und Schiller ... diese ausschließlich ästhetische Mission ... hatte die Tendenz, alle jene fortschrittlichen und revolutionären Fermente zu beseitigen, die von ihrem Sturm und Drang aus an die jungen Vertreter der Frühromantischen Schule weitergegeben wurden. ... der von der Weimarer Klassik bewirkten ästhetischen Restauration ... "(V(4)186).

unrichtig (S.259/S.260) als eine Art des Liedes aufführt. Er weist auf Schiller hin, dessen Gedichte im Ganzen und Großen eine eigentlich normale Erscheinung dessen sind, was wir schöne Gedankenpoesie nennen; ... Es muß eine Poesie geben, welche den Gedanken merklicher in Gedankenform ausspricht, aber doch noch auf so starker Grundlage pathetischer Stimmung, daß wir sie noch nicht zum Didaktischen zählen dürfen. Sie wird aller hohen Anerkennung wert sein, wenn sie ihre Stellung an der Grenze der Poesie, wenn sie ihren Glanz, ihren rhetorisch deklamatorischen Stil als einen Schmuck zugesteht, dessen sie um ihres innern Mangels willen bedarf. Die Grenze zwischen dem, was dem echt Poetischen näher und was ihm ferner liegt, wird hier schwebend und ist nicht weiter zu verfolgen. Schiller bleibt, wie gesagt, Vorbild und reinstes Muster.

Vgl. Schiller „Ueber naive und sentimentalische Dichtung“: Weimarer Nationalausgabe. Bd.20(V(4)111). S.452-453.

Unter Deutschlands Dichtern in dieser Gattung will ich hier nur Hallers, Kleists und Klopstocks erwähnen. Der Charakter ihrer Dichtung ist sentimentalisch; durch Ideen rühren sie uns, nicht durch sinnliche Wahrheit, ... Unwillkürlich drängt sich die Phantasie der Anschauung, die Denkkraft der Empfindung zuvor, und man schließt Auge und Ohr, und betrachtend in sich selbst zu versinken. ... (S.452/S.453) ... nur diese zwey Felder besitzt die Dichtkunst; entweder sie muß sich in der Sinnenwelt oder sie muß sich in der Ideenwelt aufhalten, da sie im Reich der Begriffe oder in der Verstandeswelt schlechterdings nicht gedeihen kann. Noch, ich gestehe es, kenne ich kein Gedicht in dieser Gattung, weder aus älterer noch neuerer Litteratur, welches den Begriff, den es bearbeitet, rein und vollständig entweder bis zur Individualität herab oder bis zur Idee hinaufgeführt hätte. ... Dasjenige didaktische Gedicht, worinn der Gedanke selbst poetisch wäre, und es auch bliebe, ist noch zu erwarten. Was hier im allgemeinen von allen Lehrgedichten gesagt wird, gilt auch von den Hallerischen insbesondere.

Vgl. Hölderlins Brief 243 an Wilmans, Dezember 1803: StA. Bd.6. S.436.

Übrigens sind Liebeslieder immer müder Flug, denn so weit sind wir noch immer, trotz der Verschiedenheit der Stoffe; ein anders ist das hohe und reine Frohloken vaterländischer Gesänge. ...

Vgl. lettre à Wilmans, décembre 1803: Oeuvres de la Pléiade. S.1013.

Les chants d'amour s'envolent d'ailleurs toujours d'une aile un peu lasse, car nous en sommes toujours au même point, malgré la diversité des sujets; la haute et pure jubilation des chants natals est tout autre chose. L'allure prophétique de la Messiede et de certaines odes est une exception. ...

Vgl. Hegel, G.W.F. „Vorlesungen über die Ästhetik“ Einleitung. III. (1).

2. Schiller, Winckelmann, Schelling / III.Teil. 3.Abschnitt. 3.Kap. Die

Poesie. C. Die Gattungsunterschiede der Poesie. II. Die lyrische Poesie.

2. Besondere Seiten der lyrischen Poesie. c. Die Arten der eigentlichen

Lyrik: Werke in 20 Bänden(V(4)21). Bd.13. 1970. S.89 / Bd.15. 1970. S.451 / S.454/S.456/S.460-461.

2. Schiller, Winckelmann, Schelling / Da ist denn einzugestehen, daß der Kunstsinn eines tiefen, zugleich philosophischen Geistes zuerst gegen jene abstrakte Unendlichkeit des Gedankens, jene Pflicht um der Pflicht willen, ... früher schon die Totalität und Versöhnung gefordert und ausgesprochen hat, ... Es muß Schiller das große Verdienst zugestanden werden, die Kantische Subjektivität und Abstraktion des Denkens durchbrochen und den Versuch gewagt zu haben, über sie hinaus die Einheit und Versöhnung denkend als Wahre zu fassen und künstlerisch zu verwirklichen. ... (Bd.13. S.89/Bd.15. S.451) ... α)Auf der einen Seite nämlich hebt das Subjekt die Partikularität seiner Empfindung und Vorstellung auf und versenkt sich in die allgemeine Anschauung Gottes

- 129) Lessing(V(4)118) „Pope, ein Metaphysiker"(1755): Werke. 25 Teile. 25 Bände. Bongs Goldene Klassiker Bibliothek. 1925/1929/1935. Faksimile-Neudruck. Hildesheim. Olms. 1970. Bd.20(24.Teil). S.98-99.
Vorläufige Untersuchung, / Ob ein Dichter, als ein Dichter, ein System haben könne? ... (S.98/S.99) Ein Gedicht ist eine vollkommene sinnliche Rede. ... Ein System metaphysischer Wahrheiten also, und eine sinnliche Rede; beides in einem — — Ob diese wohl einander aufreiben? ...
- 130) „Pope ... ": Werke. 3 Bände. München. Winkler. 1969/1969/1972. Bd.3. 1972. S.802. Anmerkungen.
Ein Gedicht ... : Der Satz ist wörtlich der Aesthetik Baumgartens entnommen.
- 131) Schiller „An die Freude"(1786) 1.Str. V.1-8: Weimarer Nationalausgabe. Bd.1(V(4)108). S.169. Erste Fassung.
Freude, schöner Götterfunken,
Tochter aus Elisium,
Wir betreten feuertrunken
Himmliche, dein Heiligthum.
Deine Zauber binden wieder, 5
was der Mode Schwert geteilt;
Bettler werden Fürstenbrüder,
wo dein sanfter Flügel weilt.
- Vgl. „An die Freude" Zweite Fassung(Ausgabe letzter Hand 1805). 1.Str. V. 1-8: Weimarer Nationalausgabe. Bd.2. Teil I(V(4)74). S.185.
Freude, schöner Götterfunken,
Tochter aus Elisium,
Wir betreten feuertrunken
Himmliche, dein Heiligthum.
Deine Zauber binden wieder, 5
Was die Mode streng geteilt,
Alle Menschen werden Brüder,
Wo dein sanfter Flügel weilt.
- 132) Todorow, Almut „Gedankenlyrik: Die Entstehung eines Gattungsbegriffs im 19. Jahrhundert" Stuttgart. Metzler. 1980. I.Teil. Kap.I: Gedankenlyrik — ein Neologismus der Lyriktheorie der 50er Jahre. S.13.
Moriz Carriere hat den entsprechenden Begriff als erster fixiert. Er machte in der zweiten Fassung seiner Untersuchung über das Wesen der Poesie, 1884, geltend, er habe längst vor Friedrich Theodor Vischer — nämlich 1854 in der ersten Fassung dieser Poetik — die Lyrik der Betrachtung „als Gedankenlyrik bezeichnet" und Vischer habe diesen Ausdruck dann in seiner Ästhetik(1846-1857) lediglich „adoptirt".
Vgl. S.125: „Das Wesen und die Formen der Poesie"(Leipzig 1854)
Vgl. Vischer, Friedrich Theodor „Ästhetik oder Wissenschaft des Schönen" (Bd.1. 1846/Bd.2. 1847-48/Bd.3. 1.Abschnitt. 1851/Bd.3. Die Baukunst. 1852/Bd.4. Die Bildnerkunst. 1853/Bd.4. Die Malerei. 1854/Bd.5. Die Musik. 1857/Bd.6. Die Dichtkunst. 1857) 2.Aufl. hrsg. v. Vischer, Robert. München. Meyer & Jessen Verlag. 1922(Bd.1-3)/1923(Bd.4-6). Faksimile-Nachdruck. Hildesheim. Georg Olms. 1975. Bd.6. S.252//S.259-260.
§894 Die Lyrik der Betrachtung steht ... An der Grenze der Prosa liegt als besondere Form das Epigramm und mit ihm eine große, unbestimmte Masse, die sich unter dem Namen der schönen Gedankenpoesie zusammenfassen läßt und namentlich der modernen Zeit und der deutschen Poesie angehört. ... (S.252//S.259) ... Das Epigramm nun ist der kleine benannte Punkt in einer ganzen weiten Welt von Dichtungen, die keinen Namen haben und die wir als Poesie des schönen Gedankens bezeichnen; sie verhalten sich zum Epigramme wie das Ausgeführte zum Zusammengezogenen. Es ist die schwer zu bestimmende Form, die auch Hegel zuletzt, aber gewiß

So wie die Anmuth der Ausdruck einer schönen Seele ist, so ist Würde der Ausdruck einer erhabenen Gesinnung.

126)Hölderlins Brief 144 an Schiller wohl zwischen 15. und 20. August 1797: StA. Bd.6. S.249.

Ich betrachte jetzt die metaphysische Stimmung, wie eine gewisse Jungfräulichkeit des Geistes und ...

Vgl. lettre à Schiller probablement entre le 15 et le 20 août 1797: OEuvres de la Pléiade. S.423.

Je considère maintenant le penchant métaphysique comme une certaine virginité de l'esprit et ...

o)„DAS MUSIKALISCHE“

126)Vgl. V(4)126.

Vgl. Schillers Brief an Goethe vom 18. März 1796: Goethe-Artemis-Gedenkausgabe(V(4)18). Bd.20 hrsg. v. Beutler, Ernst. Stuttgart/Zürich. Artemis.

1950: Der Briefwechsel zwischen Goethe und Schiller. S.164-165(Brief 158).

Bei mir ist die Empfindung anfangs ohne bestimmten und klaren Gegenstand; (S.164/S.165) dieser bildet sich erst später. Eine gewisse musikalische Gemütsstimmung geht vorher, und auf diese folgt bei mir erst die poetische Idee. ...

Vgl. V(4)134: „Das Musikalische ...“(Schillers Brief an Körner 25.5.1792)

Vgl. V(4)142: „das Ganze einer Empfindung“(Burckhardt „Gedächtnisrede auf Schiller“ den 9. November 1859)

Vgl. V(4)147: „die ganze lebendige Gestalt“(Hölderlins Brief an Schiller. Erste Hälfte September 1799)

127)Schillers Brief an Goethe vom 30. Juni 1797: StA. Bd.7. Dokumente. II. Teil. S.98: Artemis-Gedenkausgabe. Bd.20(V(4)126). S.368-369(Brief 337).

Aufrichtig, ich fand in diesen Gedichten viel von meiner eigenen sonstigen Gestalt, und es ist nicht das erstmal, daß mich der Verfasser an mich mahnte. Er hat eine heftige Subjektivität, und verbindet damit einen gewissen philosophischen Geist und Tiefsinn. Sein Zustand ist gefährlich, da solchen Naturen so gar schwer beykommen ist. (Bd.7. II. Teil. S.98)

Vgl. Goethe „Glückliches Ereignis(=Erste Bekanntschaft mit Schiller)“(V(4)118): Werke(V(4)14). Bd.10. S.541.

Schiller ... erwiderte darauf als ein gebildeter Kantianer; und als aus meinem hartnäckigen Realismus mancher Anlaß zu lebhaftem Widerspruch entstand, so ward viel gekämpft und dann Stillstand gemacht; keiner von beiden konnte sich für den Sieger halten, beide hielten sich für unüberwindlich. ... Wenn er das für eine Idee hielt, was ich als Erfahrung aussprach, so mußte doch zwischen beiden irgend etwas Vermittelndes, Bezügliches obwalten! Der erste Schritt war jedoch getan, Schillers Anziehungskraft war groß, er hielt alle fest, die sich ihm näherten; ... und so besiegelten wir, durch den größten, vielleicht nie ganz zu schlichtenden Wettkampf zwischen Objekt und Subjekt, einen Bund, der ununterbrochen gedauert, und für uns und andere manches Gute gewirkt hat.

128)Goethes Brief an Schiller vom 1. Juli 1797: StA. Bd.7. II. Teil. S.100: Artemis-Gedenkausgabe. Bd.20(V(4)126). S.370(Brief 338).

Ich will Ihnen nur auch gestehen daß mir etwas von Ihrer Art und Weise aus den Gedichten entgegensprach, eine ähnliche Richtung ist wohl nicht zu verkennen, allein sie haben weder die Fülle, noch die Stärke, noch die Tiefe Ihrer Arbeiten. (Bd.7. II. Teil. S.100)

Vgl. Goethe „Hermann und Dorothea“(Oktober 1797): Werke(V(4)14). Bd.2. S. 514: IX. Gesang „Urania“ Aussicht. V.299-301.

Desto fester sei bei der allgemeinen Erschütterung, Dorothea, der Bund! Wir wollen halten und dauern, Fest uns halten und fest der schönen Güter Besitztum.

Vgl. „Brod und Wein“ 5.Str. V.81-88: StA. Bd.2. S.92.

Möglichst dulden die Himmlischen diß; dann aber in Wahrheit
 Kommen sie selbst und gewohnt werden die Menschen des Glücks
 Und des Tags und zu schau die Offenbaren, das Antliz
 Derer, welche, schon längst Eines und Alles genannt,
 Tief die verschwiegene Brust mit freier Genüge gefüllet, 85
 Und zuerst und allein alles Verlangen beglückt;
 So ist der Mensch; wenn da ist das Gut, und es sorget mit Gaaben
 Selber ein Gott für ihn, kennet und sieht er es nicht.

Vgl. „Le Pain et le vin“ v.81-88: OEuvres de la Pléiade. S.811.

C'est chose que les dieux souffrent jusqu'à l'extrême, alors
 Dans la réalité de leur présence ils apparaissent et les hommes
 S'accoutument au Jour, au bonheur, à contempler les Révélés, la face
 De ceux-là qui jadis ont nommé le Tout et l'Un,
 Comblé le coeur secret de libre et vaste plénitude, 85
 Et les premiers, les seuls, exaucé tout désir.

Tel est l'homme: quand son vrai bien l'attend, qu'un dieu lui-même

De ses dons lui prépare, il ne le sait voir ni reconnaître.

121) Schiller „Ueber Anmuth und Würde“: Weimarer Nationalausgabe. Bd.20(V(4)111). S.251/S.252/S.253.

Die griechische Fabel legt der Göttin der Schönheit einen Gürtel bey, der die Kraft besitzt, dem, der ihn trägt, Anmuth zu verleyhen, und Liebe zu erwerben. Eben diese Gottheit wird von den Huldgöttinnen oder den Grazien begleitet. ... Alle Anmuth ist schön, denn der Gürtel des Liebreizes ist ein Eigenthum der Göttinn von Gnidus; ... Gürtel der Venus ... (S.251/S.252) ... Anmuth ist eine bewegliche Schönheit; ... Dieser Gürtel, als das Symbol der beweglichen Schönheit, hat aber das ganz besondere, daß er der Person, die damit geschmückt wird, die objektive Eigenschaft der Anmuth verleyht; ... (S.252/S.253) ... Der Gürtel des Reizes wirkt also nicht natürlich, ...

122) „Ueber Anmuth und Würde“ (V(4)121).

123) Biblia. Novum Testamentum graece et latine. Ed. Nestle, Eberhard/Nestle, Erwin. Stuttgart. Württembergische Bibelanstalt. 1930. S.2: Secundum Matthaeum. I. 18: Vulgata(V(4)2). Tomus II. S.1527: Biblia Germanica 1545(V(4)2). II. Teil. S.246: Die heilige Schrift(V(4)2). Das Neue Testament: im Jahre 1956 vom Rat der Evangelischen Kirche in Deutschland im Einvernehmen mit dem Verband der evangelischen Bibelgesellschaften in Deutschland genehmigte Fassung. S.5: Das Evangelium des Matthäus. 1.Kap. 18.

Τοῦ δὲ Ἰησοῦ Χριστοῦ ἡ γένεσις οὕτως ἦν. μνηστευθεῖσας τῆς μητρὸς αὐτοῦ Μαρίας τῷ Ἰωσήφ, πρὶν ἢ συναλθεῖν αὐτοῦς εὐρέθη ἐν γαστρὶ ἔχουσα ἐκ πνεύματος ἁγίου.

Christi autem generatio sic erat: Cum esset desponsata mater eius Maria Ioseph, antequam convenirent, inventa est in utero habens de Spiritu sancto.

Christi autem generatio sic erat

cum esset desponsata mater eius Maria Ioseph

antequam convenirent inventa est in utero habens de Spiritu Sancto

Die geburt Christi war aber also gethan. Als Maria seine Mutter dem Joseph vertrauet war / ehe er sie heim holet / erfand sichs / das sie schwanger war von dem heiligen Geist.

Die Geburt Jesu Christi geschah aber also. Als Maria, seine Mutter, dem Joseph vertrauet war, erfand sich's, ehe er sie heimholte, daß sie schwanger war von dem heiligen Geist.

124) Michelangelo Buonarroti(1475-1564) „Pieta“: San Pietro(Citta del Vaticano).

125) Schiller „Ueber Anmuth und Würde“: Weimarer Nationalausgabe. Bd.20(V(4)111). S.289.

von sich. Es ging immer tiefer ins Leben, und das Fest wurde heiliger; die Augen glänzten von Freudentränen, die Lippen bebten, die Herzen wallten vor Wonne. ...

Vgl. Goethe „Glückliches Ereignis (=Erste Bekanntschaft mit Schiller)“: Werke(V(4)14). Bd.10. S.538.

... ich nenne nur Heinses „Ardinghello“ und Schillers „Räuber“. Jener war mir verhaßt, weil er Sinnlichkeit und abstruse Denkweisen durch bildende Kunst zu veredeln und aufzustutzen unternahm, dieser, weil ein kraftvolles, aber unreifes Talent gerade die ethischen und theatralischen Paradoxen, von denen ich mich zu reinigen gestrebt, recht im vollen hinreißenden Strome über das Vaterland ausgegossen hatte. ...

119) Hofmannsthal. Brief an Carl J. Burckhardt. Den 24. August 1924: Reclam-Ardinghello(V(4)85). S.605-606.

Dieser Heinse war solch ein kühner, ausgreifender älterer Deutscher; die Romane schließen Deutschland und Italien in eines, dahinter aber noch Levante, die griechischen Inseln, den Mittelmeerkreis. Vieles ist in (S. 605/S.606) ihnen verbunden (im Wollen mehr als im künstlerischen Vollbringen): deutsches Wesen und verstehende Bewunderung des Italienischen, wie bei Stendhal, allerlei sehr merkwürdige Figuren sind gegeneinander gestellt: Das alles hat mir mein Gewebe von Menschenschicksalen wieder sehr lebendig gemacht. ...

120) Heinse „Ardinghello“(V(4)85) Zweiter Band. Vierter Teil. Schluß. S.303-317: “Εν καὶ Πᾶν und Αὐθῆρ(V(4)13: „Brod und Wein“ 4.Str. V.69) usw.

Man könnte auf diese Weise aber wohl doch noch die sonderbare Meinung des Xenophanes und seiner Schüler Parmenides und Melissos erklären, daß Eins Alles und Alles Eins sei. Nämlich, aller Grundstoff ist sich gleich, nur die Form seines unendlichen Wesens verschieden. ... (S.303/S.304) ... Alles wechselt miteinander ab und geht wieder in das Eins zurück. Vater Äther, aller Lebengeber! Und so wird und vergeht ewig alles, was ist. ... (S.304/S.305) ... Die Vollkommenheit des Weltalls besteht in allen möglichen Arten von Formen. Alle Geschöpfe sind bloß Gedanken Gottes und des höchsten Vergnügens in ihrem Maße fähig. Gott dachte: »Es werde Licht!« und es ward Licht. ... (S.305/S.306) ... Gott ist unendlich Eins, und in jedem Punkt Eins, und Eins in jedem angenommenen Maße, das dann Verhältnis in Bewegung und Verbindung nach seiner Realität und Form zueinander hat. ... (S.306/S.307) ... Und dies ist das Heilige (welches einige Alten für Feuer, Ursprung der Lebenswärme hielten, weil Feuer wäre: Wesen in seine größte Freiheit verbreitet), wovon alles in jedem lebendigen Eins ausgeht, sinnlich wird und erscheint und in dessen Liebesschoß sich alles wieder einsenkt; ... (S.307/S.308) ... jedes besondere Ding ein Spiel, ein Mutwille des Wesens, und kann keinen Augenblick ohne das Ganze bestehen. Das ist eine ganz andre Hoffnung, Sicherheit von Unsterblichkeit, wann ich Stürme durch die Atmosphäre brausen höre und in mir fühle: bald wirst auch du die Wogen wälzen und mit dem Meer im Kampf sein! ... (S.308/S.309) ... Eins zu sein und Alles zu werden, was uns in der Natur entzückt, ist doch etwas ganz anders als das Schlaraffenleben, welches, vernünftigerweise und aller Erfahrung nach undenkbar, bezauberte Phantasien sich vorstellen. ... (S.309/S.310) ... Das erstere wäre entweder reine Weltaristokratie, jedes Element nämlich so göttlich als das andre; wo nach dem Homer Juno, Neptun und Apollo den Zeus binden könnten. Oder aristokratische Weltmonarchie; ein Element unter den andern der König. Oder demokratisch-aristokratische Weltmonarchie; Tiere und Pflanzen schon der Form nach von Ewigkeit da, wie Ihr oben selbst meintet. Aus diesem haben die Griechen ihre reizenden Dichtungen und schönen Göttergestalten geschöpft; und die erhabensten Philosophen dieser gefühlvollen Nation, wie selbst Aristoteles und Plato, konnten sich davon nicht losmachen. ...

Band 2: Schiller und sein Kreis(Hrsg.: Fambach, Oscar). Berlin. Akademie. 1957. „Gedanken ... "(S.44-49) S.44.

Ich habe von Kindheit an die Poesie mit Leidenschaft geliebt, denn lebhaft Empfinden schien mir immer der süsseste Genuß, dessen ein Mensch sich erfreuen kan. Ich hielt früh den Dichter, welcher lebhaft Empfindungen, die denjenigen, welchem er sie mittheilt, veredlen, in andern erweckt, für ein wohlthätiges, für ein geflügeltes, heiliges Wesen, wie Platon sagt. Die Begeisterung ist eine Leidenschaft; ...

114)Stolberg „Gedanken über ... "(V(4)113) S.104: Schiller und sein Kreis (V(4)113). S.48.

Wenn ich auch Schillers Rundgesang auf die Freude nie gelesen hätte, so würde ich doch gewiß sein, daß ein Mann von seiner glühenden Empfindung, Momente müsse gehabt haben, sel'ge Momente, in welchen seine Seele dahin schmolz bei der Empfindung des Allgegenwärtigen, Allliebenden. ...

115)„Brod und Wein" Titel/Widmung: StA. Bd.2. S.90. Über Heinse(V(4)85).

BROD UND WEIN / AN HEINZE

Vgl. OEuvres de la Pléiade. S.807.

LE PAIN ET LE VIN / À Heinse.

116)Heinse „Ardinghello"(V(4)85) Zweiter Band. Vierter Teil. S.270.

Und die Liebe ward geboren, der süße Genuß aller Naturen füreinander, der schönste, älteste und jüngste der Götter, von Uranien, der glänzenden Jungfrau, deren Zaubergürtel das Weltall in tobendem Entzücken zusammenhält. ...

117)Hölderlin „Hymne an die Göttin der Harmonie" Motto: StA. Bd.1. S.130.

Urania, die glänzende Jungfrau, hält mit ihrem Zaubergürtel das Weltall in tobendem Entzücken zusammen. Ardinghello

118)Schiller „Ueber naive und sentimentalische Dichtung": Weimarer Nationalausgabe(V(4)111). Bd.20. S.464.

... denn die bloß sinnliche Glut des Gemähltes und die üppige Fülle der Einbildungskraft machen es noch lange nicht aus. Daher bleibt Ardinghello bey aller sinnlichen Energie und allem Feuer des Kolorits immer nur eine sinnliche Karrikatur, ohne Wahrheit und ohne ästhetische Würde. ...

Vgl. Lessing, Gotthold Ephraim(1729-81) „Emilia Galotti"(1772) / Goethe „Die Leiden des jungen Werther"(V(4)16). Lessing(V(4)89) und Goethe(V(4)106) in bezug auf den Göttinger „Hainbund"(V(4)86).

Vgl. Heine, Heinrich. Brief an Detmold, Johann Hermann. Den 15. Februar 1828: Reclam-Ardinghello(V(4)85). S.578.

Er ist einer jener Dämonen, die ich vielleicht jetzt repräsentiere, zu denen auch Sie gehören, und die einst den Olymp stürmen werden. ...

Vgl. Wagner, Richard „Autobiographische Skizze"(1843): Reclam-Ardinghello (V(4)85). S.583.

Damals [1834] war ich einundzwanzig Jahre alt, zu Lebensgenuß und freudiger Weltanschauung aufgelegt; »Ardinghello« und »Das junge Europa« spukten mir durch alle Glieder: ... Die damals spukenden Ideen des »jungen Europa«, sowie die Lektüre »Ardinghello«, geschärft durch meine sonderbare Stimmung, in welche ich gegen die deutsche Opernmusik geraten war, gaben mir den Grundton für meine Auffassung, welche besonders gegen die puritanische Heuchelei gerichtet war, und somit zur kühnen Verherrlichung der »freien Sinnlichkeit« führte.

Vgl. Heinse „Ardinghello" Erster Band. Dritter Teil. Schluß: Reclam-Ardinghello. S.196.

Nach Mitternacht ging es in ein echtes Bacchanal aus; ... Man entkleidete die Jungfrauen, die, Glut in allen Adern, sich nicht sehr sträubten, zuerst bis auf die Hemder, und schlitzte diese an beiden Seiten auf bis an die Hüften; und die Haare wurden losgeflochten. ... Man holte hernach aus der nahen Villa Sacchetti Efeu zu Kränzen und belaubte Weinranken mit Trauben zu Thyrsusstäben, und jeder Jüngling warf alle Kleidung

lem Wieland auf, der denn auch 1756 in seinen „Sympathien“ und 1757 in der Vorrede zu den „Empfindungen eines Christen“ die gehässigsten Ausfälle gegen Uz als sittenverderbenden Wortführer der leichtfertigen Anakreontik machte. Dieser antwortete 1757 in dem poetischen „Schreiben an einen Freund“ würdig mit dem Hinweis auf die Unschuld seines Lebens wie seiner dichterischen Versuche, die den ernststen Fragen der Philosophie und dem Preise der Gottheit nicht minder gewidmet waren als harmlos-heiterem Scherze; nur öden Schwulst und ungeschicklichplump moralisierenden Fanatismus lehnte er ab und forderte von der Dichtung vor allem die reizende Schönheit der Form, nicht bloß einen sittlich-erbaulichen Inhalt. ...

n) „ANMUTH UND WÜRDE“

- 111) Schiller „Anmuth und Würde“ (1793): Werke. Nationalausgabe. Weimar. Hermann Böhlaus Nachfolger. Bd. 20. 1962. S. 251.
Vgl. „Das Reich der Schatten“ 1. Str. V. 1 („Horen“ hrsg. v. Schiller. 9. Stück. 1795. September. S. 1); Weimarer Nationalausgabe. Bd. 1 (V(4)108). S. 247: „Das Reich der Formen“ („Gedichte“ Erster Theil. 1800); Weimarer Nationalausgabe. Bd. 2. Teil I (V(4)74). S. 118: „Das Ideal und das Leben“ 1. Str. V. 1 („Gedichte“ I. Teil. 2. Aufl. 1804/Ausgabe letzter Hand. 1805); Weimarer Nationalausgabe. Bd. 2. Teil I. S. 164/S. 396.

Ewig klar und spiegelrein und eben
Fließt das zephyrleichte Leben
Im Olymp den Seligen dahin.

(„Das Reich der Schatten“ 1795. V. 1-3: „Das Reich der Formen“ 1800. V. 1-3: Bd. 1. S. 247)

Ewigklar und spiegelrein und eben
Fließt das zephyrleichte Leben
Im Olymp den Seligen dahin.

(„Das Ideal und das Leben“ 1804. V. 1-3: Bd. 2. Teil I. S. 396)

- 112) Schiller „Die Künstler“ („Der Teutsche Merkur“ hrsg. v. Wieland. März 1789. S. 283-302) 31. Str. (S. 300-301)/5. Str. (S. 285); Weimarer Nationalausgabe. Bd. 1 (V(4)108). S. 213/S. 202: „Die Künstler“ („Gedichte“ Zweyter Theil. 1803); Weimarer Nationalausgabe. Bd. 2. Teil I (V(4)74). S. 138: „Die Künstler“ („Gedichte“ Viertes Buch. Ausgabe letzter Hand. 1805); Weimarer Nationalausgabe. Bd. 2. Teil I (V(4)74). S. 395 (28. Str.)/S. 384 (5. Str.).

Sie selbst, die sanfte Cypria,
umleuchtet von der Feuerkrone
steht dann vor ihrem mündgen Sohne 435
entschleyert — als Urania;

... S. 300
S. 301 Bd. 1. S. 213
S. 285 Bd. 1. S. 202

die furchtbar herrliche Urania,
mit abgelegter Feuerkrone 60
steht sie — als Schönheit vor uns da.

(„Die Künstler“ 1789. 31. Str./5. Str. V. 433-436/V. 59-61)

Die furchtbar herrliche Urania,
Mit abgelegter Feuerkrone, 60
Steht sie — als Schönheit vor uns da.

... Bd. 2. Teil I. S. 384
Bd. 2. Teil I. S. 395

Sie selbst, die sanfte Cypria,
Umleuchtet von der Feuerkrone
Steht dann vor ihrem münd'gen Sohne 435
Entschleiert — als Urania;

(„Die Künstler“ 1805. 5. Str./28. Str. V. 59-61/V. 433-436)

- 113) Stolberg, Friedrich Leopold (1750-1819) „Gedanken über Herrn Schillers Gedicht: Die Götter Griechenlandes“ („Deutsches Museum“ 8. Stück. August 1788. S. 97-105) S. 97: Ein Jahrhundert deutscher Literaturkritik (1750-1850).

ceterum nec cohibere parietibus deos neque in ullam humani oris speciem assimilare ex magnitudine caelestium arbitrantur: lucos ac nemora consecrant deorumque nominibus appellant secretum illud, quod sola reverentia vident. (S.16)

Im übrigen verträgt es sich nicht mit der Vorstellung der Germanen von der Erhabenheit der Himmlischen, Götter in Wände einzuschließen und irgendwie menschenähnlich darzustellen. Sie weihen ihnen vielmehr Lichtungen und Haine, und mit Namen von Göttern bezeichnen sie jenes geheimnisvolle Wesen, das sie nur in ihrer Verehrung und im Geiste schauen. D'ailleurs, enfermer les dieux entre des murs ou les représenter sous (S. 75/S.76) quelque apparence humaine leur semble peu convenable à la grandeur des habitants du ciel; ils leur consacrent des bois et des bocages et donnent le nom de dieux à cette réalité mystérieuse que leur seule piété leur fait voir.

108) Schiller „Die Götter Griechenlandes“ 1. Fas. („Der Teutsche Merkur“ hrsg. v. Wieland (V(4)85). März 1788. S.250-260) S.255: Werke. Nationalausgabe. Weimar. Hermann Böhlau Nachfolger. Bd.1. 1943. S.193; 14.-15.Str.

Damals trat kein gräßliches Gerippe
vor das Bett des Sterbenden. Ein Kuß
nahm das letzte Leben von der Lippe,
still und traurig senkt' ein Genius
seine Fackel. Schöne lichte Bilder
scherzten auch um die Nothwendigkeit,
und das ernste Schicksal blickte milder
durch den Schleyer sanfter Menschlichkeit. 105

Nach der Geister schrecklichen Gesetzen
richtete kein heiliger Barbar,
dessen Augen Thränen nie benetzen,
zarte Wesen, die ein Weib gebahr.
Selbst des Orkus strenge Richterwaage
hielt der Enkel einer Sterblichen,
und der Thrakers seelenvolle Klage
rührte die Erinnyen. 110

Nach der Geister schrecklichen Gesetzen
richtete kein heiliger Barbar,
dessen Augen Thränen nie benetzen,
zarte Wesen, die ein Weib gebahr.
Selbst des Orkus strenge Richterwaage
hielt der Enkel einer Sterblichen,
und der Thrakers seelenvolle Klage
rührte die Erinnyen. 115

Vgl. Takahashi, Katsumi: Hellas und Hesperien bei Hölderlin — „Seeliges Griechenland“ (V(4)34). 120

109) Novalis „Apologie von Friedrich Schiller“ (1789-90): Schriften in 4 Bänden. Leipzig. Bibliographisches Institut. 1928. Bd.2. S.90.

Man hat fast überall über das vortreffliche Gedicht des Herrn Rats Schiller „Die Götter Griechenlands“ Weh und Ach geschrien, ihn für einen Atheisten und ich weiß nicht für was erklärt und voll heiligen Eifers ihn geradezu der Hölle übergeben. Kluge und unparteiische Köpfe haben größtenteils darüber mit mehr Gerechtigkeit geurteilt, doch keiner außer Wieland, der einen Wink davon im „Deutschen Merkur“ gab, hat sich öffentlich erklärt, um die Frömmel und andre enthusiastische Köpfe, die vielleicht ein heiliger Enthusiasmus schnell übereilte, zu beschämen. Ob ich mich gleich nicht zu den klugen Köpfen rechne, so schmeichle ich mir doch, wenigstens unparteiisch zu sein, indem ich weder den Dichter kenne, noch Atheist, Naturalist, Deist, Neolog oder strenger Orthodoxe bin, überhaupt zu keiner Sekte zähle. ... Stollberg, ein Mann, den ich wegen seines Dichtergenies verehere, scheint mir selbst das Gedicht aus einem falschen Gesichtspunkte angesehen zu haben, wie auch ... Kleist im „Deutschen Merkur“ („Das Lob des einzigen Gottes / ein Gegenstück / zu den Göttern Griechenlands“ August 1789); ...

110) Deutsche National-Litteratur. Bd.45 (V(4)83). II. Teil. J.P. Uz. S.1-101. Einleitung (Muncker, Franz. S.5-22). S.16.

Neben mißgünstigen Recensionen, die sie veranlaßten, hetzten sie vor al-

m) „HEILIGER BARBAR“

105) Voß „Briefe“ Bd.I. S.96-97: Der Göttinger Hain(V(4)87). S.351.

Voß an Brückner / 26. Oktober 1772(V(4)89) ...

Das obige schwarze Buch heißt das Bundesbuch, und soll eine Sammlung von den Gedichten unsers Bundes werden, die einstweilen durchgehends gebiligt sind. Noch steht nichts darin, weil die Gesänge, die jeder auf das Bündnis unter der Eiche gemacht, anfangen sollen, aber nach meinem Gefühl noch nicht eingeschrieben werden können. Nächstens schick ich Ihnen einige davon. Jetzt feilt noch ein jeder daran. Auch Sie, wertester Freund; auch du, künftiger Bundesbruder und deutscher Biedermann, mußt einen Gesang auf dieses edle Bündnis singen und einschreiben lassen.

Vgl. „Kinder- und Jugendliteratur der Aufklärung“ (Hrsg.: Ewers, Hans-Heiko) Stuttgart. Reclam-Universal-Bibliothek. 1980. S.239-240: Lossius(1760-1819)

„Lieder und Gedichte“(1787) S.68-70. „Der deutsche Knabe“ 44 Verse.

Ich bin ein deutscher Knabe.

Mein Mut wird stark, wie meine Hand,

Ich lobe mir mein Vaterland,

Das Wäldchen und die Hütte.

Du bist kein deutscher Knabe.

5

S.68

...

S.69

Wie, du ein deutscher Knabe?

Siehst jeden deutschen Biedermann,

Der nicht französisch parliren kan,

Verächtlich an, du Thore!

Ich bin ein deutscher Knabe.

25

...

S.239

S.69

Du bist kein deutscher Knabe.

Dem Spiegel machst du oft Besuch,

30

...

S.240

S.70

Wärest du ein deutscher Knabe,

Was reitest du in fremdes Land,

Kennst du denn schon dein Vaterland

Von innen und von außen?

40

Ich bleib ein deutscher Knabe.

Das Land, das mir mein Leben gab.

Giebt mir ein Plätzchen einst zum Grab.

Am blauen Veilchenhügel.

106) Voß „Briefe“ Bd.I. S.144-145: Der Göttinger Hain(V(4)87). S.359.

Voß an Brückner / Göttingen, 4. August 1773

Seinen (Klopstocks) Geburtstag feierten wir herrlich. ... Oben stand ein Lehnstuhl ledig, für Klopstock, mit Rosen und Levkojen bestreut, und auf ihm Klopstocks sämtliche Werke. Unter dem Stuhl lag Wielands Idris zerrissen. ... die Fidibus waren aus Wielands Schriften gemacht.

Boie, der nicht raucht, mußte doch auch einen anzünden, und auf den zerrissenen Idris stampfen. Hernach tranken wir in Rheinwein Klopstocks Gesundheit, Luthers Andenken, Hermanns Andenken, des Bunds Gesundheit, dann Eberts, Goethens (den kennst du wohl noch nicht?), Herders usw. Klopstocks Ode der Rheinwein ward vorgelesen, und noch einige andere. Nun war das Gespräch warm. Wir sprachen von Freiheit, die Hüte auf dem Kopf, von Deutschland, von Tugendgesang, und du kannst denken, wie. Dann aßen wir, punschten, und zuletzt verbrannten wir Wielands Idris und Bildnis.

107) Tacitus „Germania“(V(4)22: Reclam/V(4)42: Les Belles Lettres) Kap.9: S.16/S.17(Deutsch: Woyte, Curt) // S.75-76(Text établi et traduit par Perret, Jacques).

- S.233: Hegel. Werke. 20 Bde(V(4)21). Bd.1. S.230: „Eleusis“ V.10-21. 10
 dein Bild, Geliebter, tritt vor mich,
 und der entflohenen Tage Lust; doch bald weicht sie
 des Wiedersehens süßern Hoffnungen —
 Schon mahlt sich mir der langersehnten, feurigen
 Umarmung Scene, dan der Fragen des geheimern
 des wechselseitigen Ausspähens Scene, 15
 was hier an Haltung, Ausdruck, Sinnesart am Freund
 sich seit der Zeit geändert, — der Gewisheit Wonne,
 des alten Bundes Treue, fester, reifer noch zu finden,
 des Bundes, den kein Eid besiegelte,
 der freyen Wahrheit nur zu leben, Frieden mit der Sazung 20
 die Meinung und Empfindung regelt, nie einzugehn.
- 101) Hölderlin „Kanton Schweiz“. die Fußnote über „Stätte des Schwurs“(V.69):
 StA. Bd.1. S.145(V(4)103).
 Rütli, eine Wiese nah am Waldstättersee, dem Mytenstein gegenüber, wo
 Walther Fürst und seine Gesellen schwuren: »frei zu leben oder zu ster-
 ben!«
- 102) „Kanton Schweiz / An meinen lieben Hiller“(1791) V.40-44: StA. Bd.1. S.
 144. 40
 Staunend wandelten wir vorüber. — Ihr Väter der Freien!
 Heilige Schaar! nun schau'n wir hinab, hinab, und erfüllt ist
 Was der Ahndungen künste versprach, was süße Begeist' rung
 Einst mich lehrt' im Knabengewande, gedacht' ich des hohen
 Hirten in Mamre's Hain' und der schönen Tochter von Laben,
- 103) „Kanton Schweiz“ V.68-85: StA. Bd.1. S.145. 70
 Lebt dann wol, ihr Glücklichen dort! im friedsamem Thale
 Lebe wol, du Stätte des Schwurs! dir jauchz'ten die Sterne,
 Als in heiliger Nacht der ernste Bund dich besuchte.
 Herrlich Gebirg! wo der blaiche Tyrann den Knechten vergebens,
 Zahm und schmeichlerisch Muth geboth — zu gewaltig erhub sich
 Wider den Trotz die gerechte, die unerbittliche Rache —
 Lebe wol, du herrlich Gebirg. Dich schmückte der Freien 75
 Opferblut — es wehrte der Thräne der einsame Vater.
 Schlummre sanft, du Heldengebein! o schließ ein auch wir dort
 Deinen eisernen Schlaf, dem Vaterlande geopfert,
 Walthers Gesellen und Tells, im schönen Kampfe der Freiheit!
- Könnt' ich dein vergessen, o Land, der göttlichen Freiheit!
 Froher wär' ich; zu oft befällt die glühende Schaam mich, 80
 Und der Kummer, gedenk' ich dein, und der heiligen Kämpfer.
 Ach! da lächelt Himmel und Erd' in fröhlicher Liebe
 Mir umsonst, umsonst der Brüder forschendes Auge.
 Doch ich vergesse dich nicht! ich hoff' und harre des Tages,
 Wo in erfreuende That sich Schaam und Kummer verwandelt. 85
- 104) Hölderlins Brief 51 an die Schwester vom 19. oder 20. Juni 1792: StA.
 Bd.6. S.77.
 Es muß sich also bald entscheiden. Glaube mir, liebe Schwester, wir krie-
 gen schlimme Zeit, wenn die Oestreicher gewinnen. Der Misbrauch fürstli-
 cher Gewalt wird schrecklich werden. Glaube das mir! und bete für die
 Franzosen, die Verfechter der menschlichen Rechte. ...
- Vgl. lettre à sa soeur. 19 ou 20 juin 1792. Traduction par Naville, Denise:
 OEuvres de la Pléiade. S.83.
 La décision doit donc être proche. Crois-moi, chère soeur, les temps se-
 ront durs si les Autrichiens l'emportent. L'abus du pouvoir princier se-
 ra terrible. Crois-moi! et prie pour les Français, défenseurs des droits
 de l'homme.

- Verständlich den Guten, aber mit Recht
Die Achtungslosen mit Blindheit schlägt
Die entweihenden Knechte, wie nenn ich den Fremden?
Vgl. „Le Rhin”(V(4)7) v.135-149: OEuvres de la Pléiade. S.853
- Maintenant c'est aux demi-dieux que je songe 135
Et il faut qu'une connaissance me soit donnée
De ces être sans prix, puisque leur vie
Fait battre si souvent mon coeur plein de désir.
Mais celui qui comme toi reçut en partage, ô Rousseau,
Une âme qui ne peut être soumise, une âme 140
De très profond support,
Cette justesse de sens
Et ce don si doux de savoir entendre et de parler,
Pareil au dieu du vin, avec une plénitude sacrée
Et le désordre d'un divin délire, de telle 145
Sorte qu'il rende intelligible aux gens de coeur
Le langage des êtres les plus purs, mais frappe
Les sans-respect d'un juste aveuglement, les esclaves
Profanateurs, — cet inconnu, quel nom lui donnerai-je?
- 97) Herder „Auf den 14. Juli 1790”: Sämtliche Werke(V(4)75). Bd.29. 1889. S.
659-660: Werke in 5 Bänden(V(4)17). Bd.1. S.48.
Rings um den hohen Altar siehst du die Franken zu Brüdern
Und zu Menschen sich weihn; Göttliches, heiliges Fest! S.659
Wie spricht Jehovah zum Volk? Spricht er in Donner und Blitzen? S.660
Milder kommt er hinab; Wasser des Himmels entsüht
Weihend die Menge zum neuen Geschlecht mit der Taufe der Menschheit.
Vierzehnder Julius, dich sehn unsre Enkel einmal!
- 98) Hölderlins Brief 58 an den Bruder (Anfang Juli 1793): StA. Bd.6. S.85.
Cotta schrieb aus Frankreich, wie ich von Stuttgart aus erfuhr, den 14ten
Julius, den Tag ihres Bundesfestes werden die Franzosen an allen Enden
und Orten mit hohen Thaten feiern. ...
Vgl. lettre à son frère(début juillet 1793). Traduction par Naville, Denise.
N° 58: OEuvres de la Pléiade. S.90.
Selon des informations de Stuttgart, Cotta, qui est en France, dit que
les Français vont partout célébrer par des hauts faits le 14 juillet,
jour de leur fête nationale. ...
- 99) Schwegler, Albert „Erinnerungen an Hegel”(1839): StA. Bd.7. I. Teil. S.
450. REVOLUTIONÄRE STIMMUNG IM STIFT. angeblich nach Ch.Ph. Leutwein.
Eines Morgens, ... an einem Sonntag, es war ein schöner klarer Früh-
lingsmorgen, seien Hegel und Schelling mit noch einigen Freunden auf eine
Wiese unweit Tübingen gezogen und hätten dort einen Freiheitsbaum aufge-
richtet.
- Vgl. Dilthey, Wilhelm(1833-1911) „Das Erlebnis und die Dichtung”(1905). 8.
Aufl. Leipzig/Berlin. Teubner. 1922. S.362. Vgl. (V(4)4).
In demselben Jahre 1793, in dem in Frankreich das Christentum abgeschafft
und der Kultus der Vernunft eingeführt wurde, stellten die jungen Studen-
ten auf dem Marktplatz einen Freiheitsbaum auf, den sie in hellem Jubel
umtanzten. ...
- 100) Hölderlin „Am Tage der Freundschaftsfeier” V.129-133: StA. Bd.1. S.62.
Doch siehe es kam
Der seelige Tag — 130
O Brüder in meine Arme! —
O Brüder, da schlossen wir unsern Bund,
Den schönen, seeligen, ewigen Bund.
- Vgl. Neuffer, Christian Ludwig(1769-1839) / Magenu, Rudolf(1767-1846) /
Schelling, Friedrich Wilhelm Joseph(1775-1854) / Hegel, Georg Wilhelm Fried-
rich(1770-1831) „Eleusis / An Hölderlin. August. 1796”: StA. Bd.7. I. Teil.

93) Goethe „Götter, Helden und Wieland. Eine Farce“ (1774): Werke(V(4)14)
Bd.4. S.207//S.212.

ADMET. ... Das verdiente einige ahnungsvolle Ehrfurcht. Der zwar Eurer ganzes aberweises Jahrhundert von Literatoren nicht fähig ist. ...
ALCESTE. ... Eure Alceste mag gut sein und Eure Weibchen und Männchen amüsiert, auch wohl gekitzelt haben, was Ihr Rührung nennt. ...
WIELAND. Könnt Ihr mir absprechen, daß ich das Ganze delikater behandelt habe? ... (S.207//S.212) ... , Koloß.
HERKULES. Bin ich dir als Zwerg erschienen?
WIELAND. Als wohlgestalter Mann, mittlerer Größe tritt mein Herkules auf.
HERKULES. Mittlerer Größe! Ich!

1) „BUND“

94) Höltz, Ludwig Christoph Heinrich (1748-76) „Bundsgesang im Septemb. 1772“
1.-2.Str. V.1-8: Der Göttinger Hain(V(4)87). S.68.

Habt Gottes Segen! Vaterland, Vaterland
Tönt jede Lippe, Vaterland, Vaterland,
Brennt jeder Busen, Brüderherzen
Flammen entgegen den Brüderherzen.

Ihr knieet nieder, schwörer dem Laster Hohn,
Den Schändern eurer Fluren, die Galliens,
Und jedes Auslands Kette schleppen,
Schwöret ihr Hohn, und der Tugend Huldung.

95) Hölderlin „Der Tod des Empedokles“ (Erste Fassung. 1797-99) V.1449: StA.
Bd.4. S.62(V.1447-1452). (Zweiter Act. Vierter Auftritt)

BÜRGER. Du solltest König seyn. O sei es! seis!
Ich grüße dich zuerst, und alle wollens.
EMPEDEKLES. Diß ist die Zeit der Könige nicht mehr.
BÜRGER(erschrocken). Wer bist du, Mann?

PAUSANIAS. So lehnt man Kronen ab, 1450
Ihr Bürger.

BÜRGER. Unbegreiflich ist das Wort,
So du gesprochen, Empedokles.

Vgl. „La mort d'Empédocle“ (Première version) Deuxième acte. Scène quatrième:
Oeuvres de la Pléiade. S.519-520.

CITOYEN. Sois notre Numa! Depuis longtemps nous pensions
Que tu devrais être roi. Oh! sois-le! sois-le!
Je te salue le premier, et tous vont le faire.

EMPEDEKLES. Voici que le temps des rois est passé.

CITOYENS(effrayés). Homme, qui es-tu?

PAUSANIAS. Ainsi se refusent les couronnes,
Citoyens.

CITOYEN. Incompréhensible est la parole
Que tu as dite, Empédocle.

96) Hölderlin „Der Rhein“ 10.Str. V.135-149: StA. Bd.2. S.146.

Halbgötter denk'ich jetzt 135

Und kennen muß ich die Theuern,

Weil oft ihr Leben so

Die sehrende Brust mir bewegt.

Wem aber, wie, Rousseau, dir,

Unüberwindlich die Seele 140

Die starkausdauernde ward,

Und sicherer Sinn

Und süße Gaabe zu hören,

Zu reden so, daß aus heiliger Fülle

Wie der Weingott, thörig göttlich 145

Und gesezlos sie die Sprache der Reinsten giebt

Er dichtete. Was ward daraus?
Ein wohlgeschmücktes Hurenhaus

.....

Und ein andermal eiferte ich auf solche Art:

Der neue Amadis.

Dis Buch, das an das Licht zum geilen Zeitvertreibe
Für Stutzer und für Metzen trat,
Gleicht einem schönen Leibe (Weibe)
Der die galante Seuche hat.

Das betrübte Schicksal des Hn W--d.

Die Musen stießen ihn hinaus;
Von Geilheit voll im heißen Busen
Geriech er in ein Hurenhaus
Und sah die Metzen an für Musen.

Das heißt geschmäht. Ja, Freund, thue mit unserm Bruder das Deinige diesen neuen Ovid wegzutilgen.

- 91) Hölderlins Brief an Immanuel Nast vom 18.2.1787 (Br.6): StA. Bd.6. S.10.
Du fragst, wie mir Dein Amadis gefalle — ich sage — schlecht. Und warum?? — Nicht weil Wieland ohnehin nicht mein Stekkenpferd ist, auch nicht — weil ich gerner ein Märchen gelesen hätte, das nicht von der Satyre unterbrochen wird — sondern — ich sags mit aller Bescheidenheit — weil Dinge drinn vorkommen, die für reizbare Leute, wie ich bin, leider!!! — nicht zum lesen sind. O Bruder! meinst Du, ich hab' ihn über halb gelesen? da dank'ich Gott, daß meine Fantasie noch unbefleckt ist, daß mir vor dem Dichter, der gewiß eine Unschuld schaamroth machen würde, ekelt. Gesteh mirs nur, Lieber, ist Dirs nicht besser ums Herz wann Du den großen Messiassänger hörst? oder unsers Schubarts wütenden Ahasveros liesst? Oder den feurigen Schiller? — ...

Vgl. Lettre à I. Nast (Traduction par Naville, Denise): OEuvres de la Pléiade. S.21. (le 18 février 1787)

Mais soyons sérieux. Tu me demandes si ton Amadis me plaît — je réponds — fort peu. Et pourquoi? Non seulement parce que Wieland n'est pas mon cheval de bataille, et non seulement parce que j'aurais préféré lire un conte qui ne soit pas interrompu par la satire — mais surtout — je le dis en toute modestie — parce qu'il s'y passe des choses peu lisibles pour des gens malheureusement aussi irritables que moi. Ô frère, ne crois pas que je l'aie seulement feuilleté, pour lors je rends grâce à Dieu que mon imagination soit encore vierge, et qu'un poète qui ferait certainement rougir de honte une innocence me répugne. Avoue-le, mon cher, ne te sens-tu pas le coeur plus à l'aise en écoutant le chant grandiose du Messie? ou le furieux Ahasveros de notre Schubart? Ou en lisant l'impétueux Schiller? — ...

- 92) Goethe „Die Leiden des jungen Werther“ (V(4)16) Brief vom 16.6.1771: Werke (V(4)14). Bd.6. S.27.

Wir traten ans Fenster. Es donnerte abseitswärts, und der herrliche Regen säuselte auf das Land, und der erquickendste Wohlgeruch stieg in aller Fülle einer warmen Luft zu uns auf. Sie stand auf ihren Ellenbogen gestützt, ihr Blick durchdrang die Gegend; sie sah gen Himmel und auf mich, ich sah ihr Auge tränenvoll, sie legte ihre Hand auf die meinige und sagte: „Klopstock!“ — Ich erinnerte mich sogleich der herrlichen Ode, die ihr in Gedanken lag, und versank in dem Strome von Empfindungen, den sie in dieser Losung über mich ausgoß. Ich ertrug's nicht, neigte mich auf ihre Hand und küßte sie unter den wonnevollsten Tränen. Und sa nach ihrem Auge wieder — Edler! hättest du deine Vergötterung in diesem Blicke gesehen, und möcht'ich nun deinen so oft entweihten Namen nie wieder nennen hören!

iamque pedem referens casus evaserat omnis,
redditaque Eurydice superas veniebat ad auras
pone sequens (namque hanc dederat Proserpina legem),
cum subita incautum dementia cepit amantem,
ignoscenda quidem, scirent si ignoscere Manes:

.....

S.128
S.130

illa quidem Stygia nabat iam frigida cumba.
septem illum totos perhibent ex ordine mensis
rupe sub aëria deserti ad Strymonis undam
flesse sibi, et gelidis haec evolvisse sub antris
mulcentem tigris et agentem carmine quercus:

510

Vgl. Klopstock: Ausgewählte Werke(V(4)18). S.1195-97: Orpheus und Eurydike.
Elend ward Orpheus, ...

.....

... Er weint zu der Laute der Liebenden Wehmut;
Hat dich, süßes Weib, dich an dem öden Gestade,
Dich, wenn der Tag anbrach, dich, wenn er sich neigte, gesungen:
Trat an des Tánarus Schlund, des Abgrunds Tor, in des Haines
Schwarze Schreckennacht; kam dann zu den Manen, zum grausen
Könige, Herzen, die eisern sind den flehenden Menschen.

.....

S.1195
S.1196

Jetzo kehrt er zurück, den Gefahren entronnen; schon atmet,
Nun nicht länger getrennt, Eurydike Lüfte der Erde,
Nahe folgend: (Dies war Deois Gesetz) da der Liebe
Unbedacht auf einmal den Törichten fasset; verzeihbar,
Wenn die Manen verziehn. Er stand, und sah sich, vom Tage
Schon erreicht, uneingedenk, ach erliegend dem Herzen,
Nach Eurydike um! Nun war mißlungen sein Mühsal,
War gebrochen der Bund mit dem eisernen Herrscher. ... (=foedera: V.
493: S.128)

.....

(=foedera: V.
493: S.128)

... Auch schwamm sie schon kalt in dem Nachen des Orkus.
Sieben Monde lang hat er unter bedurfteten Felsen,
Meldet die Sag', an der Woge geweint des verlassenen Strymons
Allen seinen Gram in schauernden Höhlen gesungen;

S.1196
S.1197

Tiger besänftigt' er da, und Hörerin wurd' ihm die Eiche.

89)Voß „Briefe"(V(4)87) Bd.I. S.93-94: Der Göttinger Hain(V(4)87). S.350.
Voß an Brückner 26. Oktober 1772

Gesundheiten wurden auch getrunken. Erstlich Klopstocks! Boie nahm das
Glas, stand auf, und rief: Klopstock. Jeder folgte ihm, nannte den gro-
ßen Namen, und nach einem heiligen Stillschweigen trank er. Nun Ramlers!
Nicht voll so freilich; Lessings, Gleims, Geßners, Gerstenbergs, Uzens,
Weissens usw. und nun mein allerliebster bester Brückner mit seiner Dor-
ris. Ein heiliger Schauer muß Sie den Augenblick ergriffen haben, wie
der ganze Chor, Hahn, die Miller mit ihrer männlichen deutschen Kehle,
Boie und Bürger mit Silberstimmen, und Hölty und ich mit den übrigen
(meine Stimme kennen Sie) das feurige: Lebe! ausriefen. Jemand nannte
Wieland, mich deucht Bürger wars. Man stand mit vollen Gläsern auf, und
— Es sterbe der Sittenverderber Wieland, es sterbe Voltair(e)! usw. ...

90)Brückner, Ernst Theodor Johann(1746-1805) „Brief an J.H. Voß vom 7. Mai
1773": Euphorion. 33. 1932. S.341-420. Metelmann, Ernst(Hrsg.). J. Brück-
ner und der Göttinger Dichterbund. Ungedruckte Briefe und Handschriften.
S.390: Neue Quellen zur deutschen Geistesgeschichte des 18. u. 19. Jahrh.

Der neue Amadis.

Genie und Wollust kömt zusammen

Und setzt des Dichters Herz in Flammen,

Mannigfaltigkeit zur größten harmonischen Einheit durch keine Kleidung und Stubenluft verdorben, immer in gehöriger Munterkeit und Bewegung erhalten, von hohem und heiligem und wollüstigem Geist beseelt, ein wenig Überfülle, wo sie sein müsse, üppige sanfte Wölbung und wieder straffer Umriß sei äußerst selten und ein Wunder in der Natur, und man kann es immer, wenn man es fände, als das Allergöttlichste auf diesem Erdenrund betrachten. ...

Vgl. Reclam-Ardinghello. Anmerkungen zum Text. S.464.

50, 16f. die griechische Venus zu Florenz: berühmte Statue der ehemaligen Sammlung Medici, Florenz (heute Florenz, Uffizien), römische Kopie nach einem griechischen Werk des späten 4. Jh.s.

k) „HAINBUND“

86) Paul/Betz: Deutsches Wörterbuch. Tübingen. Niemeyer. 5.Aufl. 1966: 6. Aufl. 1968. S.283.

Hain, ... als poetisches Wort durch Kl. sehr üblich geworden für einen anmutigen Wald oder für einen heiligen, den Göttern geweihten. Kl. hat den H. zum Sitz und Symbol der germanischen Dichtkunst gemacht im Gegensatz zur griechischen (vgl. die Ode Der Hügel und der Hain 1767) daher Hain 1772 als Bezeichnung für den Göttinger Dichterbund, der erst 1804 von Voß Hainbund genannt wurde.

87) Voß, Johann Heinrich (1751-1826) „Briefe“. Hrsg. v. Voß, Abraham. I/II/III(1-2). 1829-33. Bd.I. S.91-92: Der Göttinger Hain. Hrsg. v. Kellertat, Alfred. Stuttgart. Reclam-Universal-Bibliothek. 1967. S.349.

Voß an Brückner Den 20. September (1772). Von meinen Freunden hab ich vielmal zu grüßen; sie sind alle auch Ihre Freunde. Ach, den 12. September, mein liebster Freund, da hätten Sie hiersein sollen. Die beiden Müllers, Hahn, Hölty, Wehrs und ich gingen noch des Abends nach einem nahgelegenen Dorfe. Der Abend war außerordentlich heiter, und der Mond voll. Wir überließen uns ganz den Empfindungen der schönen Natur. Wir aßen in einer Bauerrhütte eine Milch, und begaben uns darauf ins freie Feld. Hier fanden wir einen kleinen Eichengrund, und sogleich fiel uns allen ein, den Bund der Freundschaft unter diesen heiligen Bäumen zu schwören. Wir umkränzten die Hüte mit Eichenlaub, legten sie unter den Baum, faßten uns alle bei den Händen, tanzten so um den eingeschlossenen Stamm herum, — riefen den Mond und die Sterne zu Zeugen unseres Bundes an, und versprachen uns eine ewige Freundschaft. Dann verbündeten wir uns, ...

88) „Brod und Wein“ 1.Str. V.14-18(V(4)1).

Vgl. Tacitus „Germania“(V(4)22) Kap.11: Reclam(V(4)22). S.20.

nec dierum numerum, ut nos, sed noctium computant. sic constituunt, sic condicunt: nox ducere diem videtur. (S.20)

die Germanen ... Sie rechnen übrigens nicht nach Tagen wie wir, sondern nach Nächten; demgemäß setzen sie Termine fest und treffen Verabredungen. Nach ihrer Auffassung geht die Nacht dem Tage voran. ...

(Reclam. S.21: Deutsch nach Woyte)

Vgl. Vergilius „Georgica“ Liber IV. V.454/V.464-470/V.485-489/V.506-510: Georgicon Libri IV / Georgiche. Testo, traduzione e note a cura di Alessandro Barchiesi. Milano. Arnaldo Mondadori Editore. 1980. S.126/S.128/S.130.

... miserabilis Orpheus 454

...
ipse cava solans aegrum testudine amorem
te, dulcis coniunx, te solo in litore secum,
te veniente die, te decedente canebat.
Taenarias etiam fauces, alta ostia Ditis,
et caligantem nigra formidine lucum
ingressus, Manisque adiit regemque tremendum
nesciaque humanis precibus mansuescere corda.

S.126
S.128 465

470

.....

- Saß gülden beim Altar und nahm den Weihrauch an. 150
 Man füllte nun die Welt mit Tempeln und mit Hainen
 Und die mit Göttern an. Bedeckt mit Edelsteinen,
 Nahm bald der Priester auch des Pöbels Augen ein
 Und wollte, wie sein Gott, von ihm verehret sein.
 Drauf herrschte der Betrug, bewehrt mit falschen Zeichen, 155
 Und mußte von der Welt die scheue Freiheit weichen,
 Die Wahrheit deckte sich mit tiefer Finsternis,
 Vernunft ward eine Magd und Weisheit Ärgernis;
 So ließ die Vorwelt sich die Macht zum Denken rauben,
 Und alles bog das Knie vor schlauem Aberglauben.
- Vgl. Haller „Versuch Schweizerischer Gedichte“ 1.Aufl. 1732 / 2.Aufl. 1734
 / 3.Aufl. 1742 / 4.Aufl. 1748 / 5.Aufl. 1749 / 6.Aufl. 1751 / 7.Aufl. 1751
 / 8.Aufl. 1753 / 9.Aufl. 1762 / 10.Aufl. 1768 / 11.Aufl. 1777.
- 85) Wieland, Christoph Martin (1733-1813) „Comische Erzählungen“ (1765) / „Griechische Erzählungen“ (1784): Werke. 5 Bände. Hrsg. v. Seiffert, Hans Werner / Martini, Fritz. München. Carl Hanser. 1965-68. Bd.4. 1965. S.75-169.
- Kaum ist er weg, so steht schon Cypria,
 Voll Zuversicht in diesem Streit zu siegen,
 In jenem schönen Aufzug da,
 Worin sie sich (das lächelnde Vergnügen 380
 Der lüsternen Natur) dem leichten Schaum entwand,
 Sich selbst zum erstmal voll süßen Wunders fand,
 Und im Triumph auf einem Muschel-Wagen,
 An Paphos reizendes Gestad
 Von frohen Zephyrn hingetragen, 385
 In erstem Jugendglanz die neue Welt betrat:
 So steht sie da, halb abgewandt
 Wie zu Florenz, und deckt mit einer Hand,
 Errötend, in sich selbst geschmieget,
 Die holde Brust, die kaum zu decken ist, S:86 390
 Und mit der andern — was ihr wißt. S:87
 Die Zauberin! Wie ungezwungen lüget
 Ihr schamhaft Aug! Und wie behutsam wird
 Dafür gesorgt, daß Paris nichts verliert!
 („Das Urteil des Paris“ V.377-394: Hanser Ausgabe. Bd.4. S.86-87)
- Saturnia lag, abgeredter Maßen,
 In tiefem Schlaf, als er erschien,
 Vom Bade matt, auf einem Ruhebette, 750
 Ein Liebes-Gott, doch nur von Marmor, schien
 Mit kühner Hand den Vorhang wegzuziehn.
 Sie lag in leichten Silber-Flor
 Mit vieler Kunst gehüllt, und eine Blumen-Kette
 Versteckte halb, was ihr Gewand 755
 Den Augen noch gegönnet hätte;
 Doch steigt halb unverhüllt die schöne Brust empor,
 Dort reizt ein weißer Arm, und eine kleine Hand,
 Hier ragt ein Knie wie Wachs hervor,
 Und noch was mehr, das wenn er's itzt erblickte 760
 Selbst Jupitern so sehr entzückte
 Als seinen Freund, dem, fast von Lust entseelt,
 Die Auge schwimmt, der Atem fehlt.
- („Juno und Ganymed“ V.748-763: Hanser Ausgabe. Bd.4. S.139)
- Vgl. Heinse, Wilhelm (1749-1803) „Ardinghello“ (1787) Erster Band. I. Teil:
 „Ardinghello“ Stuttgart. Reclam-Universal-Bibliothek. 1975. S.50.
 die griechische Venus zu Florenz ... die zarten häufigen und doch festen
 Schwingungen des Lebens in den reinsten Formen mit aller reizenden

j) „DIE FLÜCHTIGEN DICHTER“

83) Uz, Johann Peter (1720-96) „Das bedrängte Deutschland“ (am 29. März 1746 an Gleim geschickt, erst in „Lyrische und andere Gedichte“ 1755 gedruckt) 1.Str./7.Str.-11.Str. V.1-4/V.25-44: Deutsche National-Litteratur. Historisch kritische Ausgabe. Bd.45. hrsg. v. Muncker, Franz. Stuttgart. Union Deutsche Verlagsgesellschaft. um 1894. Sansyusya. Faksimile-Nachdruck. 1974. 2. Teil: Uz/Kleist/Hamler/Karschin. S.30-31.

Wie lang zerfleischt mit eigner Hand
Germanien sein Eingeweide?
Besiegt ein unbesiegtes Land 3
Sich selbst und seinen Ruhm, zu schlauer Feinde Freude?

.....

S.30
S.31 25

O Schand! Sind wir euch verwandt,
Ihr Deutschen jener bessern Zeiten,
Die feiger Knechtschaft eisern Band
Mehr als den härtesten Tod im Arm der Freiheit scheuten?

Wir, die uns kranker Wollust weihn,
Geschwächt vom Gifte weicher Sitten, 30
Wir wollen derer Enkel sein,
Die, rauh, doch furchtbarfrei, für ihre Wälder stritten?

Die Wälder, wo ihr Ruhm noch itzt
Um die bemoosten Eichen schwebet,
Wo, als ihr Stahl vereint geblitzt, 35
Ihr ehrner Arm gesiegt und Latium gebebet?

Wir schlafen, da die Zwietracht wacht
Und ihre bleiche Fackel schwinget
Und, seit sie uns den Krieg gebracht,
Ihm stets zur Seite schleicht, von Furien umringet. 40

Ihr Natternheer zischt uns ums Ohr,
Die deutschen Herzen zu vergiften,
Und wird, kömmt ihr kein Hermann vor,
In Hermanns Vaterland ein schmähdlich Denkmal stiften.

84) Haller „Brief an Eberhard Gemmingen. März 1772“: Deutsche National-Litteratur. Bd.41. 2.Abt.(V(4)82). S.163.

Ist es also das Murren eines Sauerpotfes, wenn ich gewünscht habe, wenn ich wünsche, daß so vieler Witz, daß eine so rosichte Einbildung, daß die glühenden Farben der hellsten Malerei nicht zum allgemeinen Schaden angewendet würden; und sind die lustigen, die schalkhaften, die flüchtigen Dichter, sind ihre Bewunderer gerecht, wenn sie nicht nur frei sein wollen, zum Schaden der Sitten, zur Unterdrückung nötigerer Pflichten reizend und verführerisch zu dichten; wenn sie sogar diejenigen verfolgen, die noch einigen Ernst bei der Poesie beibehalten und dieselbe zu ihrer großen Bestimmung, zur Aufmunterung zurückführen wollen, am Glücke der Welt durch die Tugend zu arbeiten?

Vgl. Léonard, Émile-G.: Histoire du Protestantisme. Collection QUE SAIS-JE?. N°427. Paris. Presses Universitaires de France. 1950. S.128.

Haller qui, d'après Philippe Godet, «inspirait à Voltaire une sorte de frayeur respectueuse», ...

Vgl. Haller „Gedanken über Vernunft, Aberglauben und Unglauben“ V.146-160: Deutsche National-Litteratur. Bd.41. 2.Abt(V(4)82). S.39.

Selbst Laster durften sich den Göttern zugesellen,
Und Menschen ihre Schmach der Welt zum Beispiel stellen,
Geiz, Lügen, Üppigkeit, und was man tadeln kann,

et où elles reviennent après leur immense révolution. Grisé de nectar et d'amitié socratique, j'écoutais au banquet les discours doux et enflammés des jeunes gens enthousiastes, célébrant l'amour sacré, tandis qu'Aristophane, le farceur, y mêle ses facéties et à la fin le maître lui-même, le divin Socrate, merveille de sagesse, leur enseigne à tous ce qu'est l'amour — alors, ami de mon cœur, je ne me sens pas tellement découragé, et il me semble parfois que je parviendrai tout de même à communiquer une étincelle de cette douce flamme, qui dans ces moments me réchauffe et m'éclaire, à mon opusculé, mon Hypérion, qui reflète ma véritable vie, et à créer peut-être autre chose encore qui fasse la joie des hommes.

Vgl. OEuvres de la Pléiade. Avant-propos par Jaccottet, Philippe. S.XII.

Il suffit de relire la lettre que le poète de vingt-trois ans écrit à son ami Neuffer en juillet 1793, pour sentir à quelle profondeur étaient descendues en lui les images de la Grèce qu'il découvrait alors dans le Phédre et le Banquet (comme il n'allait pas cesser d'en puiser chez Homère, Pindare ou Sophocle). La prose musicale de cette lettre, comme celle d'Hypérion même, est éclairée par la lumière d'un monde où les dieux (Hölderlin n'en doute pas) sont présents d'une si juste présence que chaque journée peut être cette «fête de la vie» qu'il rêve de «fêter mythiquement» à son tour.

i) „HINGEHEFTETEN BLICKES LANGE WAHL“

81) Klopstock „Der Hügel und der Hain“ V.45-56: Oden 1771 (V(4)18). S.255.

Laß fliegen, o Schatten, die goldene Leyer 45
Den mächtigsten Flug,
Und rufe mir einen der Barden
Meines Vaterlands herauf!

Einen Herminoon,
Der unter den tausendjährigen 50
Eichen wandelte,
Unter deren alternden Sproß ich wandle.

Ich beschwöre dich, o Norne, Vertilgerin,
Bey dem Haingesange, vor dem in Winfeld die Adler sanken!
Bey dem liedergeführten Brautlenzreihn: O sende mir herauf 55
Einen der Barden Teutoniens, einen Herminoon!

82) „Der Hügel und der Hain“ (V(4)81) V.93-96: Oden 1771. S.258.

Die zwillingsbrüder Alzes graben
In Felsen euch das Gesez der heiligen Freundschaft:
Erst des hingehfteten Blickes lange Wahl, 95
Dann Bund auf ewig!

Vgl. Haller, Albrecht (1708-77) „Über den Ursprung des Übels“ (1734) III. Buch.

V.161-170: Deutsche National-Litteratur. Historisch kritische Ausgabe. Bd.

41. 2. Abt. Haller/Salis=Seewis. hrsg. v. Frey, Adolf. Stuttgart/Berlin. W.

Spemann. um 1885. Sansyusya. Faksimile-Nachdruck. 1974. S.103.

O selig jene Schär, die, von der Welt verachtet,
Der Dinge wahren Wert und nicht den Wahn betrachtet,
Und, treu dem innren Ruf, der sie zum Heile schreckt,
Sich ihre Pflicht zum Ziel von allen Thaten steckt!
Gesetzt, daß Welt und Hohn und Armut sie mißhandeln, 165
Wie angenehm wird einst ihr Schicksal sich verwandeln,
Wann dort, beim reinen Licht, ihr Geist sich selbst gefällt,
Das überwundne Leid zu seiner Wollust hält
Und innig hold mit Gott, dem Urbild ihrer Gaben,
Sie Gott, das höchste Gut, in steter Nähe haben! 170

Vgl. „Le Pain et le vin" v.40-48: OEuvres de la Pléiade. S.809-810.

Le feu divin lui-même, nuit et jour, s'efforce vers un brusque 40
Embrassement. Viens donc! et nous tourneront nos yeux vers l'étendue

Pour y chercher, si loin soit-il, un bien qui sera nôtre!

Une chose demeure ferme. Que midi sonne ou que le temps s'allonge

Dans le coeur de la nuit, une mesure est là toujours, commune

À tous, et chacun cependant reçoit en propre son destin. 45

Chacun s'en va, chacun s'en vient aux lieux qu'il peut atteindre.

Viens donc! Et qui pourrait mépriser le mépris, sinon ce triomphant S.809

Délire qui saisit les chanteurs soudain dans la nuit sainte? S.810

79) Platon „Phaidros"(V(4)62) 245A/249C: Werke(V(4)24). Bd.5. S.66/S.84.

Deutsch nach Schleiermacher: S.67/S.85.

“Ὅς δ' ἄν, ἀνευ μανίας Μουσῶν, ἐκὶ κοιτητικᾶς θύρας ἀφίκηται ,
ἀτελῆς αὐτός (S.66)

Wer aber ohne diesen Wahnsinn der Musen in den Vorhallen der Dichtkunst
sich einfindet, meinend, er könne durch Kunst allein genug ein Dichter
werden, ein solcher ist selbst ungeweiht, und auch seine, des Verständi-
gen Dichtung, wird von der des Wahnsinnigen verdunkelt. (S.67)

Τοῦτο δ' ἔστιν ἀνάμνησις ἐκείνων ἃ ποτ' εἶδεν ἡμῶν ἢ ψυχῆ, συμπορευθεῖσα
θεῶ καὶ ὑπεριδοῦσα ἃ νῦν εἶναι φαμεν καὶ ἀνακύψασα εἰς τὸ ὄν ὄντως. (S.84)

Und dieses ist Erinnerung an jenes, was einst unsere Seele gesehen, Gott
nachwandelnd und das übersehend, was wir jetzt für das Wirkliche halten,
und zu dem wahrhaft Seienden das Haupt emporgerichtet. (S.85)

80) Hölderlins Brief 60 an Neuffer. Zwischen 21. und 23. Juli 1793.

Zwar schrieb ich an Stäudlin: Neuffers stille Flamme wird immer herrli-
cher leuchten, wenn vielleicht mein Strohfeuer längst verrauchet ist; aber
dieses vielleicht schreckt mich eben nicht immer, am wenigsten in den Göt-
terstunden, wo ich aus dem Schoose der beseeligenden Natur, oder aus dem
Platanenhaine am Ilissus zurückkehre, wo ich unter Schülern Platons hin-
gelagert, dem Fluge des Herrlichen nachsah, wie er die dunkeln Fernen
der Urwelt durchstreift, oder schwindelnd ihm folgte in die Tiefe der
Tiefen, in die entlegensten Enden des Geisterlands, wo die Seele der
Welt ihr Leben versendet in die tausend Pulse der Natur, wohin die aus-
geströmten Kräfte zurückkehren nach ihrem unermeßlichen Kreislauf, oder
wenn ich trunken vom Sokratischen Becher, und sokratischer Geselliger
Freundschaft am Gastmahle den begeistertsten Jünglingen lauschte, wie sie
der heiligen Liebe huldigen mit süßer feuriger Rede, und der Schächer
Aristophanes drunter hineinwizelt, und endlich der Meister, der göttli-
che Sokrates selbst mit seiner himmlischen Weisheit sie alle lehrt, was
Liebe sei — da, Freund meines Herzens, bin ich dann freilich nicht so
verzagt, und meine manchmal, ich müßte doch einen Funken der süßen Flam-
me, die in solchen Augenblicken mich wärmt, u. erleuchtet, meinem Werk-
chen, in dem ich wirklich lebe u. webe, meinem Hyperion mitteilen kön-
nen, und sonst auch noch zur Freude der Menschen zuweilen etwas an's
Licht bringen. (StA. Bd.6. S.86)

Vgl. Lettre à Neuffer. Entre le 21 et le 23 juillet 1793. Traduction par
Naville, Denise: OEuvres de la Pléiade. S.90-91.

Il est vrai que j'ai écrit à Stäudlin: la flamme tranquille de Neuffer
brillera d'un éclat de plus en plus beau lorsque (S.90/S.91) mon feu de
paille se sera peut-être depuis longtemps dissipé en fumée; mais ce
n'est pas cela qui me fait peur, surtout pas aux heures divines où je
reviens du sein de la glorieuse nature ou du bois de platanes au bord de
l'Ilissos; allongé parmi les disciples de Platon, j'ai suivi l'envolée
du Magnifique parcourant ces confins obscurs que sont les origines du
monde, tout étourdi je l'ai suivi au plus profond des profondeurs, aux
sources les plus lointaines de l'esprit, d'où l'âme du monde projette sa
vie dans les mille pulsations de la nature, d'où les forces s'écoulent

Darum steigt in höhern Bogen,
 Darum strömt in vollern Wogen
 Deutscher Barden Hochgesang,
 Und in eig'ner Fülle schwellend,
 Und aus Herzens Tiefen quellend
 Spottet er der Regeln Zwang.

15

h) „DER LEERE VERSTAND“

75) Herder, Johann Gottfried (1744-1803) „Auch eine Philosophie der Geschichte zur Bildung der Menschheit“ (1774): Sämtliche Werke in 33 Bänden (V(4)17). 1877-1913. Bd.5. 1891. S.496-498: Werke. 5 Bde (V(4)17). Bd.3. S.57-59.

Die Liebe musste den Schleier des Harems durch manche Stufen verdünnen, ehe sie das schöne Spiel der Griechischen Venus, Amors und der Grazien ward. So Mythologie, Poesie, Philosophie, schöne Künste: ... Griechenland ward die Wiege der Menschlichkeit, der Völkerliebe, der schönen Gesetzgebung, des Angenehmsten, in Religion, Sitten, Schreibart, Dichtung, Gebräuchen und Künsten — Alles Jugendfreude, Grazie, Spiel und Liebe! ... (S.496/S.497) ... der Grieche behielt nichts als schönes Bild, Spielwerk, Augenweide — nennt's gegen jenes Schwerere wie ihr wollt; gnug er wollte nur dies! Der Religion des Morgenlandes ward ihr heiliger Schleier genommen; und natürlich, da alles auf Theater und Markt, und Tanzplatz Schau getragen wurde, wards in kurzem „Fabel, schön ausgedehnt, beschwätzet, gedichtet und neugedichtet — Jünglingstraum und Mädchensage!“ die Morgenländische Weisheit, dem Vorhange der Mysterien entnommen, ein schön Geschwätz, Lehrgebäude und Zänkerei der Griechischen Schulen und (S.497/S.498) Märkte. ... Griechenland! Urbild und Vorbild aller Schöne, Grazie und Einfalt! Jugendblüthe des Menschlichen Geschlechts — o hätte sie ewig dauren können! ...

76) Nietzsche „Die Geburt der Tragödie, / Oder: / Griechenthum und Pessimismus“ (V(4)38) Kap.13: op.cit. (V(4)25). Bd.1. S.84.

In dieser Tonart, halb mit Entrüstung, halb mit Verachtung, pflegt die aristophanische Komödie von jenen Männern zu reden, zum Schrecken der Neueren, welche zwar Euripides gerne preisgeben, aber sich nicht genug darüber wundern können, dass Sokrates als der erste und oberste Sophist, als der Spiegel und Inbegriff aller sophistischen Bestrebungen bei Aristophanes erscheine: ...

77) Hamann, Johann Georg (1730-88) „Sokratische Denkwürdigkeiten“ Zweyter Abschnitt: Sämtliche Werke. Historisch-kritische Ausgabe. Hrsg.: Nadler, Josef. 6 Bände. Wien. Herder. 1949-57. Bd.2. S.75: „Sokratische Denkwürdigkeiten/Aesthetica in nuce“ mit einem Kommentar hrsg. v. Jørgensen, Sven-Aage. Stuttgart. Reclam-Universal-Bibliothek. 1968. S.55.

Das Genie ist die einmüthige Antwort. Sokrates hatte also freylich gut unwissend seyn; er hatte einen Genius, auf dessen Wissenschaft er sich verlassen konnte, den er liebte und fürchtete als seinen Gott, an dessen Frieden ihm mehr gelegen war, als an aller Vernunft der Egypter und Griechen, dessen Stimme er glaubte, und durch dessen Wind, (wie der erfahrene Wurmdoctor Hill uns bewiesen) der leere Verstand eines Sokrates so gut als der Schoos einer reinen Jungfrau, fruchtbar werden kann. ...

78) „Brod und Wein“ 3.Str. V.40-48: StA. Bd.2. S.91.

Göttliches Feuer auch treibet, bei Tag und bei Nacht, 40
 Aufzubrechen. So komm! daß wir das Offene schauen,
 Daß ein Eigenes wir suchen, so weit es auch ist.
 Fest bleibt Eins; es sei um Mittag oder es gehe
 Bis in die Mitternacht, immer bestehet ein Maas,
 Allen gemein, doch jeglichem auch ist eignes beschieden, 45
 Dahin gehet und kommt jeder, wohin er es kann.
 Drum! und spotten des Spotts mag gern frohlickender Wahnsinn,
 Wenn er in heiliger Nacht plözlich die Sänger ergreift.

Vgl. Brentano „Rheinmärchen“. „Das Märchen von dem Hause Starenberg“: Werke. Bd.3. S.187.

Ich saß auf einer hohen Felswand hinter Wachholdersträuchen und übersah den heimlichen schönen Waldgrund, ohne von dort aus bemerkt werden zu können. Jetzt aber erhob sich ein Lüftlein und regte die Gipfel des Hains auf, und eine Menge Vögel aller Art flogen hin und her, und trugen allerlei Kräuter und Reiser in Klauen und Schnäbeln auf den Gipfel der Eiche und schienen beschäftigt, ein großes Nest von den mannigfaltigsten wohlriechenden Hölzern und Kräutern zu erbauen. Der Mond lief noch nackt am Himmel herum, und der junge Tag, der aufstehen sollte, schämte sich vor ihm und errötete; nun aber zog der Mond ein weißes Hemd an und trat mit den Sternen hinter den himmblauen Vorhang.

Vgl. Takahashi, Katsumi: Über die erste Strophe von Hölderlins „Brod und Wein“. „Heilige Nacht“. Dritter Teil. „Abgeschiedenheit“ und „Brunnen“. (Forschungsberichte der Universität Kōchi fürs Jahr 1987. Vol.36)/ Über die erste Strophe von Hölderlins „Brod und Wein“. „Heilige Nacht“. Vierter Teil. „Glocken“ und „Stunden“. (Forschungsberichte der Universität Kōchi fürs Jahr 1988. Vol.37. Geisteswissenschaften).

74) Schiller „Deutsche Größe“ (1797): Werke. Nationalausgabe. Weimar. Hermann Böhlaus Nachfolger. Bd.2. Teil I. 1983. S.431-432.

Die Majestät des Deutschen ruhte nie auf dem Haupt s. Fürsten. Abgesondert von dem politischen hat der Deutsche sich einen eigenen Werth gegründet und wenn auch das Imperium unterginge, so bliebe die deutsche Würde unangefochten. ... Sie ist eine sittliche Größe, sie wohnt in der Kultur u: im Character der Nation, der von ihren politischen Schicksalen unabhängig ist. — Dieses Reich blüht in Deutschland, es ist in vollem Wachsen und mitten unter den gothischen Ruinen einer alten barbarischen Verfaßung bildet sich das Lebendige aus. (Der Deutsche wohnt in einem alten sturzdrohenden Hauß aber er selbst ist ein edler Bewohner, und indem das politische Reich wankt hat sich das Geistige immer fester und vollkommener gebildet.) (S.431/S.432) ... endlich muß die Sitte und die Vernunft siegen, die rohe Gewalt der Form erliegen — und das langsamste Volk wird alle die schnellen flüchtigen einholen. Die andern Völker waren dann die Blume, die abfällt Wenn die Blumen abgefallen bleibt die goldne Frucht übrig, bildet sich, schwillt die Frucht der Aernte zu. Das köstliche Gut der deutschen Sprache die alles ausdrückt, das tiefste und das flüchtigste, den Geist, die Seele, die voll Sinn ist. Unsre Sprache wird die Welt beherrschen. Die Sprache ist der Spiegel einer Nation, wenn wir in diesen Spiegel schauen, so kommt uns ein großes trefliches Bild von uns selbst daraus entgegen. Wir kennen das jugendlich griechische und das modern ideelle ausdrücken. ...

Vgl. Schiller „Die deutsche Muse“ („Gedichte“ Zweyter Theil. 1803): Weimarer Nationalausgabe. Bd.2. Teil I. S.408.

Kein Augustisch Alter blühte,
Keines Medizäers Güte
Lächeltē der deutschen Kunst,
Sie ward nicht gepflegt von Ruhme,
Sie entfaltetē die Blume
Nicht am Strahl der Fürstengunst.

5

Von dem größten deutschen Sohne,
Von des großen Friedrichs Throne
Gieng sie schutzlos, ungeehrt.
Rühmend darfs der Deutsche sagen,
Höher darf das Herz ihm schlagen,
Selbst erschuf er sich den Werth.

10

ihm vielleicht die hirtin lacht. HAGEDORN

64) Nietzsche „Die Geburt der Tragödie“ 19.Kap.(V(4)28:V(4)51).

65) „Die Geburt der Tragödie“ 19.Kap.: op.cit.(V(4)25). Bd.1. S.116.

Man kann den innersten Gehalt dieser sokratischen Cultur nicht schärfer bezeichnen, als wenn man sie die Cultur der Oper nennt: ...

66) Goethe „Faust“ V.6903-05: Werke(V(4)14). Bd.3. S.212.

Schön umgeben! — Klar Gewässer

Im dichten Haine! Frau, die sich entkleiden,

Die allerliebsten! — Das wird immer besser.

67) „Die Geburt der Tragödie“ 20.Kap.: op.cit.(V(4)25). Bd.1. S.127.

Wenn es solchen Helden, wie Schiller und Goethe, nicht gelingen durfte, jene verzauberte Pforte zu erbrechen, die in den hellenischen Zauberberg führt, wenn es bei ihrem muthigsten Ringen nicht weiter gekommen ist als bis zu jenem sehnsüchtigen Blick, den die Goethische Iphigenie vom barbarischen Tauris aus nach der Heimat über das Meer hin sendet, was bliebe den Epigonen solcher Helden zu hoffen, ...

68) Klinger, Friedrich Maximilian(1752-1831) „Sturm und Drang“(1776)

69) Takahashi, Katsumi: VERINNERLICHUNG UND ERLEUCHTUNG — Über die erste Strophe von Hölderlins „Brod und Wein“. „Heilige Nacht“. Erster Teil(Forschungsberichte der Universität Kōchi fürs Jahr 1985. Vol.34. Geisteswissenschaften. S.155-201. 1986). (III) Erleuchtung und Beleuchtung. (3) „Gährung und Auflösung“(S.176-182).

70) „Brod und Wein“ 1.Str. V.2(V(4)1).

71) Hölderlins Brief 222 an den Bruder um Neujahr 1801: StA. Bd.6. S.407.

Aber daß der Egoismus in allen seinen Gestalten sich beugen wird unter die heilige Herrschaft der Liebe und Güte, daß Gemeingeist über alles in allem gehen, und daß das deutsche Herz in solchem Klima, unter dem Segen dieses neuen Friedens erst recht aufgehen, und geräuschlos, wie die wachsende Natur, seine geheimen weitreichenden Kräfte entfalten wird, diß mein'ich, diß seh' und glaub'ich, und diß ists, was vorzüglich mit Heiterkeit mich in die zweite Hälfte meines Lebens hinausseh'n läßt.

Vgl. Lettre à son frère probablement vers Nouvel-An 1801(Traduction par Naville, Denise): OEuvres de la Pléiade. S.986.

L'essentiel, c'est que l'égoïsme sous toutes ses formes s'inclinera devant le pouvoir sacré de l'amour et de la bonté, qu'en toute chose l'esprit de communauté prévaudra, et que sous le climat et la bénédiction de cette paix nouvelle le coeur allemand s'épanouira et déploiera en silence, comme la nature en croissance, ses forces lointaines et secrètes; voilà ce que je pense, voilà ce que je vois et ce que je crois; et voilà essentiellement pourquoi j'envisage avec sérénité la seconde moitié de ma vie.

72) „Brod und Wein“ 1.Str. V.9-10(V(4)1).

73) „Brod und Wein“ 1.Str. V.11-13(V(4)1).

Vgl. Brentano, Clemens(1778-1842) „Gockel, Hinkel und Gackeleia. Märchen, wieder erzählt von Clemens Brentano“(1838): Werke in 4 Bänden. München. Hanser. 1968/1963/1965/1966. Bd.3. S.768.

Ach, da wuchs mir das Herz; die Welt ward zu enge, weit ward es um die Seele, meine Locken schienen mir Gefühle und Wünsche, die sich sehnten, im Winde zu spielen, und ich gab sie ihm hin; denn, horch, jetzt kam auch ein Wehen und regte die Wipfel des Hains auf; sieh, und das Ebenbild unsrer Erde, der Mond, kam da geheim nun auch; die schwärmerische, die Nacht kam, trunken von Sternen und wohl wenig bekümmert um uns glänzte die Erstaunende dort, die Fremdlingin unter den Menschen, über Gebirgsanhöhen traurig und prächtig herauf! — Ach! da dachte ich nichts mehr als: Wäre nur Vater und Mutter hier, und wenn selbst nur Kronovus hier wäre, daß ich mitteilen könnte, was ich fühle! — ...

Vgl. „La Tek" v.29. Traduction par Jaccottet, Philippe: OEuvres de la Pléiade. S.8.

Miens ces rocs insolents? ces chênes millénaires?

54) „Die Tek" V.39: StA. Bd.1. S.56(V(4)53).

55) Campe, Joachim: Wörterbuch der Deutschen Sprache. Braunschweig. 1807-13. Faksimile-Neudruck. Hildesheim. Olms/Sansyusya. 1969-70. Bd.1(1807). S.826.

Die Eiche, ... , oder der Eichbaum. 1) Ein bekannter sehr nutzbarer Baum, der eine große Höhe und Dicke, und ein hohes mehr als tausendjähriges Alter erreicht, ein gelbliches oder bräunliches festes und schweres Holz hat und in den kältern Ländern wächst(Quercus L.). ...

56) Encyclopaedia Britannica auf japanisch. Bd.4. 1972. S.267.

57) Herder-Lexikon. Pflanzen. Freiburg. Herder. 1975. S.54.

Eiche: 1 Stiel- oder Sommer-E.(Quercus robur), in ganz Europa verbreitet (die sog. alten E.n); 2 Trauben-, Winter- oder Stein-E.(Quercus petraea) mit kleinerem Verbreitungsgebiet; 3 Flaum-E.(Quercus pubescens) mit flaumfilzigen Blättern; 4 Rot-E.(Quercus borealis), raschwüchsig mit herbstl. Rotfärbung; 5 Kork-E.(Quercus suber), eine immergrüne, waldbildende E.

58) Langenscheidts Handwörterbuch. Lateinisch-Deutsch. Hrg.: Menge, Güthling, Pertsch u.a.m. Zürich/Wien/München/Berlin. 1971/1983. S.553.

robur, ... 1. a) Kernholz, bsd. Eichenholz ... 2. / Stärke, Kraft, Festigkeit ...

59) Beitzl / Klaus: Wörterbuch der deutschen Volkskunde. 3.Aufl. Stuttgart. Kröner. 1974. S.160.

Eiche (Quercus robur). In vorchristl. Zeit gehört die E. bei den Germ. und anderen indogerm. Völkern zu den am meisten verehrten Bäumen des Waldes. Berühmt ist z.B. die Donar-E. bei Geismar, die kultische Verehrung genöß und im Jahre 725 von Bonifatius gefällt wurde.

Vgl. Meyers Enzyklopädisches Lexikon in 25 Bänden. Mannheim. Bibliographisches Institut. Bd.7. 1973. S.467: Über „Eiche".

Religions- und kulturgeschichtlich ist die E. von hervorragender Bedeutung. Sie galt v.a. bei indogerm. Völkern, aber auch bei den Japanern als heilig. Dem griech. Gott Zeus war in Dodona eine E. geweiht. Der Name der Dryaden (weibliche Baumgeister der Griechen) geht auf „dryäs"(=Eiche) zurück. ... Der jap. Schintoismus kennt einen speziellen E.gott (Kaschima no kami). E.nhaine waren als Kultstätten bei den indogerm. Völkern Europas weit verbreitet. Am bekanntesten jedoch ist die E. als hl. Baum des german. Gottes Donar (die Donar-E., vermutl. in Geismar bei Fritzlar, ließ Bonifatius 724 fällen). ... Außerhalb der religiösen Sphäre gilt die E. als Sinnbild der Stärke, heldenhafter Standhaftigkeit sowie als Sinnbild des Sieges.

60) Der neue Brockhaus. Bd.1. 1936. Leipzig. Brockhaus. S.646: Über „Eiche". In der Volkskunde ist die E. das Sinnbild der Freiheit und Kraft. Bei vielen indogerman. Völkern und bes. bei den Germanen ist sie der am meisten verehrte Baum; ...

61) Vgl. V(4)59.

62) Vgl. V(4)59.

Vgl. Platon „Phaidros" 275B: Werke(V(4)24). Bd.5. S.178/S.179(Deutsch).

Οὐ δὲ γ', ὃ φίλε, ἐν τῇ τοῦ Διὸς τοῦ Δωδωναίου ἱερῇ δρυὸς λόγους ἔφησαν μαντικῶς πρώτους γενέσθαι. ... (S.178)

Sollen doch, o Freund, in des Zeus dodonäischem Tempel einer Eiche Reden die ersten prophetischen gewesen sein. ... (S.179)

g) „IDYLLISCHE WIRKLICHKEIT" UND „SITTICHE GRÖSSE"

63) Grimm: Deutsches Wörterbuch. Bd.4. 2.Abt. 1877. Faksimile-Neudruck. München. Deutscher Taschenbuch-Verlag. 1984. Bd.10. Sp.173.

in den lustgewohnten hain,
wo in jener schatten nacht

- S.804
S.805
- Qu'un autre soin ici te presse: fêter de l'autômne
L'ancien rite, avec nous noblement refleuri! 28
- ...
-
- C'est ce que signifie la table auguste où, sous le chêne,
Pareils à des abeilles, nous chantons ensemble,
Et aussi bien le bruit des coupes: ainsi l'âme effrénée 35
Des adversaires, le choeur la force à l'unisson.
- S.805
S.806
- Déjà sous sa couronne de feuillage au loin, la ville 75
Vantée lève sa face claire de prêtresse.
Souveraine, elle tend le cep de vigne et le sapin
Jusqu'en la pourpre bienheureuse des nuages.
- 46)Septuaginta(V(4)2). Vol.I. S.23: Genesis. 18. 1. „δρῦς“
ὁ θεὸς κρῶς τῆ δρῦς τῆ Μαμβρη ... (V(4)9).
- 47)Menge-Güthling: Langenscheidts Großwörterbuch. Griechisch-Deutsch. 22.
Aufl. 1973. S.191.
δρῦς, ὕος, ἡ Waldbaum, Baum, insb. Eiche, auch Fichte; meton. Holz.
- 48)Gesenius, Buhl u.a.m.: Hebräisches und Aramäisches Handwörterbuch über
das Alte Testament. Unveränderter Neudruck der 1915 erschienenen 17.Aufgabe.
Heidelberg/Göttingen/Berlin. Springer. 1962. S.41.
אלון ... — Identisch damit sind wahrsch.
die Formen, die d. Mass. אלון
תְּרִזָּה וְאֵלֶן: Genesis. 12. 6: „Hain More“. „Buchen und Eichen“: תְּרִזָּה וְאֵלֶן
(Isaia. 44. 14)
- 49) אלון בקוֹת (Klageeiche: Eiche des Weinens): Biblia Hebraica Stuttgartensia(V(4)2). S.56. Genesis. 35. 8.
Vgl. Biblia Germanica 1545(V(4)2). I.Teil. S.22: Die heilige Schrift(V(4)2).
S.42: „die Klageeiche“(Genesis. 35. 8).
DA starb Debora der Rebeca amme / vnd ward begraben vnter BethEl / vnter
der Eichen / vnd ward genennet die Klageeiche. (I.Teil. S.22)
Da starb Debora, der Rebekka Amme, und ward begraben unterhalb Beth=El
unter der Eiche; und die ward genannt die Klageeiche. (S.42)
- 50)Hölderlin „Stuttgart“ 2.Str. V.34: „Eichbaum“(StA. Bd.2. S.87: V(4)45)
(OEvres de la Pléiade. S.805: „chêne“(Jaccottet, Philippe))
Vgl. „Mnemosyne“ 2.Fassung. 1.Str. V.11: StA. Bd.2. S.195.
Und es tönet das Blatt und Eichbäume wehn dann ...
Et la feuille bruit alors et, près des glaciers, les chênes
Agitent leurs rameaux. („Mnemosyne“ Deuxième version. Traduction par
Roud, Gustave: OEvres de la Pléiade. S.879)
- Vgl. „Die Eichbäume“(StA. Bd.1. S.201).
- 51)Goethe „Faust“ V.7822: Werke(V(4)14). Bd.3. S.237.
Von hoher Eichenkraft umlaubt!
Vgl. „die bequeme Lust an einer idyllischen Wirklichkeit“(V(4)28:V(4)64)
Dort hinter der Wiese hebt sich der strauchichte Hügel sanft empor, wo
unter schlanken Eichen das Mondlicht und dunkle Schatten durch einander
hüpfen, dort eilt der riesende Bach, ich hör, ich höre sein Rauschen, ...
(Geßner, Salomon „Die Nacht“ 1753: Idyllen. Reclam-Universal-Bibliothek.
Stuttgart. 1973. S.8)
- f) „TAUSENDJÄHRIGE EICHEN“
- 52)Hölderlin „Auf einer Haide geschrieben“ V.12-13: StA. Bd.1. S.29.
Jedesmal wandelt an meinen tausendjährigen Eichen
Mit entblößtem Haupt der Jäger vorüber, ...
- 53)Hölderlin „Die Tek“ V.29/V.39: StA. Bd.1. S.55/S.56.
Mein die trozende Felsen? die tausendjährige Eichen? (S.55: V.29)
Ewiger, als mein Nahme, die tausendjährige Eichen! (S.56: V.39)

Den aber führt die Luft was edlers zu beginnen

S.100

Zu einer muntern Schaar von jungen Schäferinnen.

100

Vgl. Reclam-Haller: Die Alpen und andere Gedichte. Stuttgart. Reclam-Universal-Bibliothek. 1965. S.7: „Die Alpen“ 11.Str. V.101-110.

Wann durch die schwüle Luft gedämpfte Winde streichen

Und ein begeistert Blut in jungen Adern glüht,

So sammet sich ein Dorf im Schatten breiter Eichen,

Wo Kunst und Anmut sich um Lieb und Lob bemüht.

Hier ringt ein kühnes Paar, vermählt den Ernst dem Spiele,

105

Umwindet Leib um Leib und schlinget Huft um Huft.

Dort fliegt ein schwerer Stein nach dem gesteckten Ziele,

Von starker Hand besellt, durch die zertrennte Luft.

Den aber führt die Lust, was Edlers zu beginnen,

Zu einer muntern Schar von jungen Schäferinnen.

110

Vgl. Novalis „Von der Begeisterung“ um 1788-90: Schriften(V(4)109). Bd.2. S.90-91.

Der erste Wind, das erste Lüftchen, das dem Ohre des Wilden hörbar durch den Gipfel der Eiche sauste, brachte gewiß demselben in seinem jungen, unausgebildeten, allen äußerlichen Eindrücken noch offenen Busen eine Bewegung, einen Gedanken von dem Dasein eines mächtigen Wesens hervor, der sehr nahe an die Begeisterung grenzte und wo ihm nichts als Worte fehlten, um sein volles, überfließendes Gefühl durch sie ausströmen und es gleichsam den leblosen Gegenständen um ihn mitempfinden zu lassen, da er jetzt ohne Sprache gewiß unwillkürlich auf die Kniee sank und durch seine stumme Bewegung verriet, daß Gefühle an Gefühle in seinem Herzen sich drängten. Wie sich allmählich die Sprache aus- (S.90/S.91) zubilden anfang und nicht mehr bloß in Naturtönen stammelte, sondern mit vollem Strome der Jugendfülle des menschlichen Geschlechts dahinbrauste und jeder Ton, jede Stimme derselben fast Empfindung und durch abstrakte Begriffe und Erfahrung noch nicht ausgebildet und verfeinert war, da entstand zuerst die Dichtkunst, die Tochter des edelsten Ungestüms der erhabensten und stärksten Empfindungen und Leidenschaften, die sich zwar nachher wie ein Chamäleon nach den Organisationen der verschiedenen Erdstiche, Zeiten und Charaktere umgebildet, aber in ihrer Urbedeutung, zu ihrer größten Stärke, Zauberei und Wirkung auf die Gemüter, der hohen Begeisterung, immer nötig hat. Alles dies aber, was ich hier gesagt habe, gilt nur hauptsächlich von dem Morgenlande, dem eigentlichen Vaterlande der Menschheit, Sprache, Dichtkunst und daher auch der Begeisterung, von woher eigentlich wie vom Urstamme sich alles in die übrigen Erdgegenden und Zonen nur fortgepflanzt hat und eingepropft worden ist.

... die Menschen und Künste erhielten hier die Kraft, die sie in den kältesten Wüsten und Regionen noch immer nach vielen Jahrhunderten erhält und ihnen feste Wurzeln fassen läßt: die schönen Gegenden, die Wärme und Heiterkeit des selten bewölkten Himmels bildeten sie, nährten sie,

... Hier entstand dann jenes göttliche Feuer - - - -

Vgl. „Stuttgart“ v.7-8/v.13-18//v.27-28/v.33-36//v.75-78: OEuvres de la Pléiade. Traduction par Jaccottet, Philippe. S.804/S.805/S.806.

L'air maintenant s'emplit d'heureux, la ville et les bosquets

Autour accueillent les joyeux enfants du ciel.

8

...

.....

Mais eux aussi, les voyageurs, sont bien guidés, ils ont

Des couronnes en suffisance, le chant, le bourdon

Tout orné de corymbes et de feuillages, avec les ombres

15

Des pins: de bourg en bourg c'est fête, d'heure en heure.

Et tels des chars qu'entraîneraient des fauves, les montagnes

Procèdent, et le chemin même tarde et se hâte.

- 44) „Brod und Wein“ 9.Str. V.143-150: StA. Bd.2. S.94-95.
 Ja, sie sagen mit Recht, er söhne den Tag mit der Nacht aus,
 Führe des Himmels Gestirn ewig hinunter, hinauf,
 Allzeit froh, wie das Laub der immergründenden Fichte, 145
 Das er liebt, und der Kranz, den er von Epheu gewählt,
 Weil er bleibet und selbst die Spur der entflohenen Götter
 Götterlosen hinab unter das Finstere bringt. S.94
 Was der Alten Gesang von Kindern Gottes geweissagt, S.95
 Siehe! wir sind es, wir; Frucht von Hesperien ist's! 150
- Vgl. „Le Pain et le vin“ v.143-150: OEuvres de la Pléiade. S.814.
 Oui, leur parole est vraie: il est celui qui réconcilie
 Le jour avec la nuit, guide éternel du chœur des astres alternés;
 Sa joie est de tout temps, pareille à la verdure impérissable 145
 Des pins qu'il aime, à ce lierre aussi qu'il a choisi pour sa couronne,
 Car il demeure, apportant lui-même à ceux qui se lamentent
 Sans dieux dans la ténèbre un vestige des dieux enfuis.
 Ce qu'ont prédit des enfants de Dieu les chants antiques,
 Vois! nous le sommes, nous! Ce sont là les fruits de l'Hespérie! 150
- 45) Hölderlin „Stuttgart“ 1.Str. V.7-8/V.13-18 // 2.Str. V.27-28/V.33-36 //
 5.Str. V.75-78: StA. Bd.2. S.86/S.87/S.88.
 Voll ist die Luft von Fröhlichen jetzt und die Stadt und der Hain ist
 Rings von zufriedenen Kindern des Himmels erfüllt. 8
 ...
 Aber die Wanderer auch sind wohlgeleitet und haben
 Kränze genug und Gesang, haben den heiligen Stab
 Vollgeschmückt mit Trauben und Laub bei sich und der Fichte 15
 Schatten; von Dorfe zu Dorf jauchzt es, von Tage zu Tag,
 Und wie Wagen, bespannt mit freiem Wilde, so ziehn die
 Berge voran und so trägt und eilet der Pfad.
 S.86
 Jezt ist Anderes Noth, jezt komm' und feire des Herbstes S.87
 Alte Sitte, noch jezt blühet die Edle mit uns. 28
 ...
 Diß bedeutet der Tisch, der geehrte, wenn, wie die Bienen,
 Rund um den Eichbaum, wir sitzen und singen um ihn,
 Diß der Pokale Klang, und darum zwinget die wilden 35
 Seelen der streitenden Männer zusammen der Chor.
 S.87
 Denn mit heiligem Laub umkränzt erhebet die Stadt schon S.88
 Die gepriesene, dort leuchtend ihr priesterlich Haupt. 75
 Herrlich steht sie und hält den Rebenstab und die Tanne
 Hoch in die seeligen purpurnen Wolken empor.
- Vgl. Haller „Versuch Schweizerischer Gedichte“ 1.Aufl. 1732. „Die Alpen“
 (1729) 10.Str. V. 91-100: Deutsche National-Litteratur. Bd.41. 2.Abt.(V
 (4)82). S.19-20.
 Wann durch die schwüle Luft, gedämpfte Winde streichen
 Und Titans reiner Strahl der Jugend Adern schwellt;
 So sammlet sich ein Dorff im Schatten breiter Eichen,
 Wo Kunst und Anmuth sich dem Volck zur Schau stellt.
 Hier ringt ein kühnes Paar, vermählt den Ernst dem Spiele, 95
 Umwindet Leib um Leib, und schlinget Hufft um Hufft.
 Dort fliegt ein schwerer Stein nach dem gesteckten Ziele
 Von starker Hand beseelt durch die zertrennte Luft;
S.19

Wein' Apollo and Zeus continue to provide Hölderlin with the imagery with which he writes of 'seeliges Griechenland'. In the fourth strophe he conjures up a vision of Greece in a series of questions. The first third of strophe, itself embedded in the triadic structure of the elegy as a whole, ends with a quite general picture of Greek religion: Aber die Thronen, wo? ... (S.104/S.105) ... Hölderlin, however, asserts his belief in the divinity of nature with the imagery of Horace, who professed to revise his sceptical attitude when he heard how 'Diespiter ... per purum tonantes / egit equos volucremque currum' („Carmina" I.34. 5ff.). ...

Vgl. Takahashi, Katsumi: Hellas und Hesperien bei Hölderlin — „Seeliges Griechenland"(Forschungsberichte der Universität Kōchi fürs Jahr 1984/1985 /1986, Vol.33/Vol.34/Vol.35. Geisteswissenschaften. S.13-72/S.1-72/S.1-66). (II) Das klassische Griechentum und das abendländische Christentum. (2)Der Tod der Tragödie und ihre Wiedergeburt(Vol.33. S.44-47)/(3)„Das große Geschick"(Vol.33. S.48-51)/(4)„Die schröcklichfeierlichen Formen"(Vol.33. S.51-58).

35)„Hellas und Hesperien bei Hölderlin"(V(4)36). (III)„Gott der Mythe". (1) „Innigerer Flug"(Vol.34. S.22-24).

36)Hölderlin „Über Religion": StA. Bd.4. S.281.

Gott der Mythe. ... So wäre alle Religion ihrem Wesen nach poetisch.

37)Hölderlins Christusbild in „Brod und Wein": „Hellas und Hesperien bei Hölderlin"(V(4)36). (II) Das klassische Griechentum und das abendländische Christentum. (7)Die Antike als Idee(Vol.34. S.7-20) / (III)„Gott der Mythe". (10)„Die tiefste Innigkeit"(Vol.35. S.2-14).

38)Nietzsche „Die Geburt der Tragödie, / Oder: / Griechentum und Pessimismus"(1886): op.cit. Bd.1. S.3.

39)„Brod und Wein" 1.Str. V.9-10(V(4)1).

40)Takahashi, Katsumi: Über die erste Strophe von Hölderlins „Brod und Wein": ‚Heilige Nacht' Dritter Teil: „Abgeschiedenheit" und „Brunnen"(Forschungsberichte der Universität Kōchi fürs Jahr 1987. Vol.36. Geisteswissenschaften. S.15-42. 1987.

41)„Brod und Wein" 1.Str. V.8(V(4)1).

e)„DIE EICHE WEHT"

42)Tacitus „Germania"(V(4)22) Kap.9: Reclam(V(4)22). S.16: Tacite „La Germanie". Texte établi et traduit par Jaques Perret. Collection des Université de France. Paris. Les Belles Lettres. Troisième Tirage. 1967. S.76.

lucos ac nemora consecrant(S.16/S.76)

Sie weihen ihnen vielmehr Lichtungen und Haine,(Reclam. S.17: Woyte) ils leur consacrent des bois et des bocages(S.76: Perret)

43)„Brod und Wein" 3.Str. V.49-54: StA. Bd.2. S.91.

Drum an den Isthmos komm! dorthin, wo das offene Meer rauscht

Am Parnas und der Schnee delphische Felsen umglänzt,

50

Dort ins Land des Olymps, dort auf die Höhe Cithärons,

Unter die Fichten dort, unter die Trauben, von wo

Thebe drunten und Ismenos rauscht im Lande des Kadmos,

Dorther kommt und zurück deutet der kommende Gott.

Vgl. „Le Pain et le vin" v.49-54: OEuvres de la Pléiade. S.810.

Viens aux rives de l'Isthme, oh viens! Là-bas où la rumeur immense de la mer

Monte vers le Parnasse, où la neige scintille en diadème aux rocs delphiques,

Là-bas dans le pays de l'Olympe, à la cime du Cithéron là-bas,

Là-bas parmi les pins, parmi les pampres d'où voici Thèbes

Et le fleuve Isménos bruire, et la fontaine de Dircé,

C'est là d'où vient, c'est là ce que désigne à son tour le dieu proche!

31) „Die Geburt der Tragödie“ Kap.20: op.cit. Bd.1. S.126.

Wenn demnach ... , wenn der „Journalist“, der papierne Slave des Tages, in jeder Rücksicht auf Bildung den Sieg über den höheren Lehrer davontragen hat, ... — in welcher peinlichen Verwirrung müssen die derartig Gebildeten einer solchen Gegenwart jenes Phänomen anstarren, das nur etwa aus dem tiefsten Grunde des bisher unbegriffenen hellenischen Genius analigisch zu begreifen wäre, das Wiedererwachen des dionysischen Geistes und die Wiedergeburt der Tragödie? ...

32) „Die Geburt der Tragödie“ Kap.23: op.cit. Bd.1. S.142-143.

Alle unsere Hoffnungen strecken sich vielmehr sehnsuchtsvoll nach jener Wahrnehmung aus, dass unter diesem unruhig auf und nieder zuckenden Culturleben und Bildungskrampe eine herrliche, innerlich gesunde, uralte Kraft verborgen (S.142/S.143) liegt, die freilich nur in ungeheuren Momenten sich gewaltig einmal bewegt und dann wieder einem zukünftigen Erwachen entgegenträumt. Aus diesem Abgrunde ist die deutsche Reformation hervorgewachsen: in deren Choral die Zukunftsweise der deutschen Musik zuerst erklang. So tief, muthig und seelenvoll, so überschwänglich gut und zart tönte dieser Choral Luther's, als der erste dionysische Lockruf, der aus dichtverwachsenem Gebüsch, im Nahen des Frühlings, hervordringt. Ihm antwortete in wetteifendem Wiederhall jener weihevoll übermüthige Festzug dionysischer Schwärmer, denen wir die deutsche Musik danken — und denen wir die Wiedergeburt des deutschen Mythos danken werden!

33) „Die Geburt der Tragödie“ Kap.23: op.cit. Bd.1. S.143(V(4)32).

Vgl. Luther, Martin „Dictata super Psalterium. 1513-16“: Werke. Kritische Gesamtausgabe (Weimarer Ausgabe). Weimar. Hermann Böhlau. Bd.3/Bd.4. 1885/1886. Unveränderter Abdruck. Weimar. Hermann Böhlau Nachfolger. 1966/1966.

Psalmus XVIII. 11: op.cit. Bd.3. S.124.

Quia sic est deus absconditus et incomprehensibilis. Tercio potest intelligi mysterium Incarnationis. Quia in humanitate absconditus latet, que est tenebre eius, in quibus videri non potuit sed tantum audiri.

Psalmus LXXXV. 8: op.cit. Bd.4. S.9.

Audiam: quia auditui nostro ostensa est misericordia ista et donatum salutare istud dei, nondum autem visui. ...

Quid loquatur: quia verbum dei non nisi auditu percipitur. Natura enim verbi est audiri. ...

In me. In hoc tangitur differentia euangelii et legis. Quia lex est verbum Mosi ad nos, Euangelium autem verbum dei in nos. ...

Psalmus CXIX. 105: op.cit. Bd.4. S.356.

Nam oculos oportet captivari in obsequium Christi et solo verbo duci, quod auribus percipitur, oculis non videtur. ... Et tamen est lucerna, quia pedes dirigit et affectum, non intellectum requirit fides.

34) „Brod und Wein“ 4.Str. V.61-64(V(4)13).

Vgl. Takahashi, Katsumi: Eine Betrachtung über das „seelige Griechenland“ in Hölderlins „Brod und Wein“ — „das große Geschik“ als Höhepunkt(Forschungsberichte der Universität Köchi fürs Jahr 1978. Vol.27. Geisteswissenschaften. 1979. S.7-42). S.23-28: (3)„das große Geschik“. (b) in bezug auf Harrisons Erklärung. S.23.

Die Mitte der vierten Strophe(V.61-64) von „Brod und Wein“ hat wohl Bezug auf die beiden Götter: „Zeus“ und „Apollon“. Aber es geht dabei ... um „jenes Naturhafte, das die Griechen der großen Zeit das δεινόν und δεινότατον, das Furchtbare nannten“(Heidegger „Nietzsche“ 1961. Bd.1. S. 151). ... In „Hölderlin and Greek Literature“(Oxford. 1975) scheint mir R.B.Harrison dieses Wesentliche und das wesentliche Symbol zu vernachlässigen. Er hätte „the Spirit of Greece“(S.84) gerade im wesentlichen Symbol: „das große Geschik“ sehen sollen. Jedenfalls erklärt er die V.59-64 folgendermaßen(S.104f.): In the following strophes of 'Brod und

Das Auge des Geistes fängt erst an, scharf zu sehen, wenn das leibliche von seiner Schärfe schon verlieren will, und davon bist du noch weit entfernt. — ...

Vgl. Augustinus „Confessiones“ Liber XI. III. 5: Bibliotheca Teubneriana. edidit M. Skutella(1934)/ H. Juergens/ W. Schaub. Stuttgart. Teubner. 1969. S.266: Confessiones/Bekennnisse (Lateinisch/Deutsch) übers. v. Bernhart, Josef. München. Kösel. 1955. S.608/S.609(Deutsch).

Audiam et intellegam, ...

Laß mich vernehmen und verstehen, wie Du »im Anfang Himmel und Erde erschaffen hast«.

Vgl. „Confessiones“ Liber VII. X. 16: Bibliotheca Teubneriana. S.140: Confessiones/Bekennnisse. S.334/S.335(Deutsch).

intravi et vidi qualicumque oculo animae meae supra eundem oculum animae meae, supra mentem meam lucem incommutabilem, ...

Ich trat ein und schaute mit dem Auge meiner Seele, so schwach es war, hoch über diesem selben Auge meiner Seele, hoch über meinem Geist das unwandelbare Licht, ...

25)Nietzsche „Die Geburt der Tragödie aus dem Geiste der Musik“(1.Aufl. 18-72/2.Aufl. 1874): Werke. Kritische Gesamtausgabe. Berlin. Gruyter. 1972. III.Abteilung. Bd.1. S.17.

26)„Die Geburt der Tragödie“(V(4)25) Kap.11: op.cit. Bd.1. S.71.

Mit dem Tode der griechischen Tragödie dagegen entstand eine ungeheure, überall tief empfundene Leere; wie einmal griechische Schiffer zu Zeiten des Tiberius an einem einsamen Eiland den erschütternden Schrei hörten „der grosse Pan ist todt“: so klang es jetzt wie ein schmerzlicher Klage-ton durch die hellenische Welt: „die Tragödie ist todt! Die Poesie selbst ist mit ihr verloren gegangen! ...

27)„Die Geburt der Tragödie“(V(4)25) Kap.17: op.cit. Bd.1. S.111.

diese Heiterkeit ist ein Gegenstück zu der herrlichen „Naivetät“ der älteren Griechen, wie sie, nach der gegebenen Charakteristik, zu fassen ist als die aus einem düsteren Abgrunde hervorwachsende Blüthe der apollinischen Cultur, als der Sieg, den der hellenische Wille durch seine Schönheitsspiegelung über das Leiden und die Weisheit des Leidens davonträgt. Die edelste Form jener anderen Form der „griechischen Heiterkeit“, der alexandrinischen, ist die Heiterkeit des theoretischen Menschen: ...

28)„Die Geburt der Tragödie“(V(4)25) Kap.19: op.cit. Bd.1. S.121.

Es liegt also auf den Zügen der Oper keinesfalls jener elegische Schmerz eines ewigen Verlustes, vielmehr die Heiterkeit des ewigen Wiederfindens, die bequeme Lust an einer idyllischen Wirklichkeit, ... Wer die Oper vernichten will, muss den Kampf gegen jene alexandrinische Heiterkeit aufnehmen, ...

29)„Die Geburt der Tragödie“(V(4)25) Kap.19: op.cit. Bd.1. S.123-124.

Vor der deutsche Musik aber mag (S.123/S.124) sich der Lügner und Heuchler in Acht nehmen: denn gerade sie ist, inmitten aller unserer Cultur, der einzig reine, latere und läuternde Feuergeist, von dem aus und zu dem hin, wie in der Lehre des grossen Heraklit von Ephesus, sich alle Dinge in doppelter Kreisbahn bewegen: alles, was wir jetzt Cultur, Bildung, Civilisation nennen, wird einmal vor dem untrüglichen Richter Dionysus erscheinen müssen. Erinnern wir uns sodann, wie dem aus gleichen Quellen strömenden Geiste der deutschen Philosophie, durch Kant und ...

30)„Die Geburt der Tragödie“(V(4)25) Kap.19: op.cit. Bd.1. S.123.

Aus dem dionysischen Grunde des deutschen Geistes ist eine Macht emporgestiegen, die ... , die deutsche Musik, wie wir sie vornehmlich in ihrem mächtigen Sonnenlaufe von Bach zu Beethoven, von Beethoven zu Wagner zu verstehen haben. Was vermag die erkenntnisslüsterne Sokratik unserer Tage günstigsten Falls mit diesem aus unerschöpflichen Tiefen emporsteigenden Dämon zu beginnen? ...

- ... Die Philosophie will den Inhalt, die Wirklichkeit der göttlichen Idee erkennen und die verschmähte Wirklichkeit rechtfertigen. Denn die Vernunft ist das Vernehmen des göttlichen Werkes.
- 22) Nordal, Sigurdur: *Völuspá*. Reykjavik. 1923 (Völvens Spådom, udgivet og tolket af S. Nordal, fra islandsk ved Hans Albrechtsen. København. 1926).
1. Hljóðs bið ek allar helgar kindir, meiri ok minni mögu Heimdallar; ... (Ozaki, Kazuhiko: Grundlaget af den Nordiske Verdensanskuelse i VÖLUSPÁ; Bulletin der geistesgeschichtlichen Institut der Universität Meyiji. Bd.20. 1981/Bd.21. 1982 // Forschungsberichte der Kyōyō-Fakultät der Universität Meyiji. Bd.170. Bulletin. Bd.20. S.5)
- Vgl. Tacitus, Publius Cornelius (um 55-um 120) „Germania“ (Lateinisch/Deutsch) Leipzig. Reclam-Universal-Bibliothek. Bd.726. 7. (2.zweisprachige) Auflage. 1976. S.20.
- silentium per sacerdotes (Kap.11)
Die Priester, ... , gebieten Ruhe (S.21)
(Übers. v. Curt Woyte)
- 23) Hölderlin „Deutscher Gesang“ V.15-20: StA. Bd.2. S.202. 15
dann sitzt im tiefen Schatten,
Wenn über dem Haupt die Ulme säuselt,
Am kühlathmenden Bache der deutsche Dichter
Und singt, wenn er des heiligen nüchternen Wassers
Genug getrunken, fernhin lauschend in die Stille,
Den Seelengesang. 20
- Vgl. „Chant allemand“ (Traduction par Fédier, François) v.15-20: OEuvres de la Pléiade. S.883.
- alors est assis dans l'ombre profonde,
Quand par-dessus la tête l'orme murmure, 15
Au ruisseau qui exhale la fraîcheur, le poète allemand
Et chante, quand il a de l'eau saintement sobre
Assez bu, écoutant au loin dans le calme,
Le chant de l'âme. 20
- d) „AUGE DER SEELE“ UND „SEELENGESANG“
- 24) Boman, Thorleif „Das hebräische Denken im Vergleich mit dem Griechischen“ Göttingen. Vandenhoeck & Ruprecht. 5.Aufl. 1968. S.228.
Das griechische Element in Philons Denken kommt nicht zuletzt darin zum Ausdruck, daß, wo er in seinem Bibeltext auf ein ausdrückliches Reden Gottes zu den Ohren der Menschen stößt, er sofort bemüht ist, das Reden Gottes zu eliminieren und an die Stelle des Hörens der Menschen ein Schauen, und zwar ein Schauen durch das Auge der Seele treten zu lassen. Die Verwandlung der Ohren in Augen und weiter in Augen der Seele ist ein bei Philon öfters auftretendes Motiv; ...
- Vgl. Platon „Politeia“ 533C-D: Werke auf der Textgrundlage der „OEuvres complètes (Collection des Universités de France)“ (Paris. Les Belles Lettres. 1955-74) Darmstadt. Wissenschaftliche Buchgesellschaft. 1971-81. Bd.4. S. 612/S.613 (Deutsch: Schleiermacher, Friedrich Daniel Ernst).
ἡ διαλεκτικὴ μέθοδος μόνη ... τὸ τῆς ψυχῆς ὄμμα ... ἀνάγει ἄνω, ...
Nun aber, sprach ich, geht die dialektische Methode allein auf diese Art, alle Voraussetzungen aufhebend, gerade zum Anfange selbst, damit dieser fest werde, und das in Wahrheit in barbarischem Schlamm vergrabene Auge der Seele zieht sie gelinde hervor und führt es aufwärts, ...
- Vgl. Platon „Sophistes“ 254A: Werke. Bd.6. S.350/S.351 (Deutsch).
τὰ γὰρ τῆς τῶν πολλῶν ψυχῆς ὄμματα ...
Denn die Geistesaugen der meisten sind in das Göttliche ausdauernd hineinzuschauen unvermögend.
- Vgl. Platon „Symposion“ 219A: Werke. Bd.3. S.374/S.375 (Deutsch).
Ἡ τοῦ τῆς διανοίας ὄψις ...

sannen lang, ohne zu schreiben: sprachen sie aber, so wards und stand.
 ... Haller, dessen Gedichten mans gnug ansieht, wie ausgedacht und zu-
 sammendrängend sie sind: Leßing ist, glaub'ich, in seinen spätern Stücken
 der Dichtkunst auch in dieser Zahl — ... Von der (S.184/S.185) zwei-
 ten Art muß z.E. Klopstock in den ausströmendsten Stellen seiner Gedichte
 seyn: ... Ramler, glaube ich, sucht diese Arten zu verbinden, ...
 Wieland sucht sie zu verbinden, ...

Vgl. Herder „Gefundene Blätter aus den neuesten Deutschen Litteraturannalen
 von 1773" I.: Sämtliche Werke. Bd.5. 1891. S.258-259.

— und so erschien endlich in dem Jahre der Meßias ganz. Allerdings ein
 Monument der Deutschen Poesie und Sprache. Voll der unmittelbarsten Emp-
 findung und einer Einbildung, die sich oft der Inspiration nähert. Male-
 rei und Äußrung der Seele, wie sie sich in den geheimsten, verwickeltsten
 Gefühlen nur ausreden, in Worte (S.258/S.259) ausgießen läßt, und was dem
 Werk gewiß nicht zur letzten Ehre gereicht, voll Religion und Gesang. Wo
 sich immer nur die menschliche Seele aufschwingen ließ, wird Gesang; Ge-
 sang wie Nachhall seliger Geister aus einem Thale der Unschuld und Liebe.
 Fast hört die Sprache auf, was sie ist, Sprache, und was sie nach einigen
 seyn soll, harte Deutsche Sprache zu seyn, wird Ton! und Anklang goldner
 Saite. Da es Religion ist, was sie tönet: und von hier aus der Gesang Al-
 les umfaßet, was nur der leiseste Lispel des Gefühls auf Erd und Himmel,
 Vergangenheit und fernster Zukunft faßen konnte — ...

Vgl. Herder „Recensionen. Aus der Allgemeinen Deutschen Bibliothek. 1770-
 1774" 13.(Kretschmann) Der Gesang Rhingulphs des Barden. 1769. Der Barde
 bei Kleists Grabe. 1770. ... Die Jägerinn. 1772: Sämtliche Werke. Bd.5.
 S.337.

... Klopstock, der, die nordische Einbildung mit dem wärmsten Herzen und
 großer Kraft der Deutschen Sprache vereint, dieser Dichtart am meisten
 Welt zu geben, den Deutschen Hain dem Griechischen Parnassus entgegen zu
 setzen! Orpheus und Osian, wo möglich, zu uns hinüber zu ziehen gewagt
 hat.

Vgl. Herder „Recensionen cit." 16. Oden (von Klopstock). 1771: Sämtliche
 Werke. Bd.5. S.350.

Und da dieser Naturgeist, die ganze Fülle des Herzens und der Seele alle
 Stücke des Verf. durchgeht und jedwedes so eigentümlich bezeichnet: welch
 ein Geschenk hat unsre Sprache, unsre Dichtkunst, ja wir möchten sagen,
 die Menschheit unsres Vaterlandes an dieser einzigen Sammlung Oden. Ein
 Mann vor 200 Jahren, der großer Geist, und wirkliches Genie war, hatte
 ein Lieblingsbuch, das er allen in der Welt vorzog. Es war eine Sammlung
 Oden: wir nennen sie die Psalmen Davids und der Mann hieß Luther — ...
 21) Kant, Immanuel „Kritik der reinen Vernunft" 1.Aufl. 1781. S.800: 2.Aufl.
 1787. S.828: Werke. Unveränderter photomechanischer Abdruck von „Kants ge-
 sammelte Schriften"(Preußische Akademie der Wissenschaften. Bd.3. Berlin.
 1904/11) Berlin. Gruyter. 1968. Bd.3. S.520.

Dagegen würden reine praktische Gesetze, deren Zweck durch die Vernunft
 völlig a priori gegeben ist, und die nicht empirisch bedingt, sondern
 schlechthin gebieten, Produkte der reinen Vernunft sein. Dergleichen aber
 sind die moralischen Gesetze; mithin gehören diese allein zum praktischen
 Gebrauche der reinen Vernunft und erlauben einen Kanon.

Vgl. Hegel, G.W.F. „Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte"(1.Aufl.
 1837). Einleitung: Werke in 20 Bänden. Auf der Grundlage der „Werke" von
 1832-45 neu edierte Ausgabe. Hrsg. v. Eva Moldenhauer und Karl Markus Mi-
 chel. Frankfurt am Main. Suhrkamp. 1969-71 (Register 1979). Bd.12. 1970. S.
 53.

Gott regiert die Welt, der Inhalt seiner Regierung, die Vollführung sei-
 nes Plans ist die Weltgeschichte. Diesen will die Philosophie erfassen;

und also wiederum Sinn zur Sprache. ... Wiederum das Gesicht ist so helle und überglänzend, ... Das Gehör ist in der Mitte. Alle in einander fallende dunkle Merkmale des Ge- (S.65/S.66) fühls laßt's liegen! ... Das Gehör greift also von beiden Seiten um sich: macht klar, was zu dunkel; macht angenehmer, was zu helle war: bringt in das dunkel Mannichfaltige des Gefühls mehr Einheit, und in das zu hell Mannichfaltige des Gesichts auch: und da diese Anerkennung des Mannichfaltigen durch Eins, durch ein Merkmal, Sprache wird, ist's Organ der Sprache. 3. Das Gehör ist der mittlere Sinn in Ansehung der Lebhaftigkeit und also Sinn der Sprache.

Vgl. Werke. Bd.5. S.127: Sämtliche Werke. Bd.5. S.49.

Der Mensch ist also als ein horchendes, merkendes Geschöpf zur Sprache natürlich gebildet, ...

18) Klopstock, Friedrich Gottlieb (1724-1803): Oden. Hamburg. Bode. 1771. Faksimile-Nachdruck. Bern. Herbert Lang. 1971. S.196(V.1-12)/S.197(V.13-16): „Thuisikon“ (1764). 4 Strophen. 16 Verse.

Wenn die Strahlen vor der Dämmerung nun entfliehn, und der Abendstern
Die sanfteren, entwölkten, die erfrischenden Schimmer nun
Nieder zu dem Haine der Barden senkt,
Und melodisch in dem Hain die Quell' ihm ertönt;
So entsenket die Erscheinung des Thuisikon, wie Silber stäubt 5
Von fallendem Gewässer, sich dem Himmel, und kommt zu euch,
Dichter, und zur Quelle. Die Eiche weht
Ihm Gelispel. So erklang der Schwan Venusin
Da verwandelt er dahin flog. Und Thuisikon vernimmt, und schwebt
In wehendem Geräusche des begrüßenden Hains, und horcht; 10
Aber nun empfangen, mit lauterm Gruß,
Mit der Sait' ihm und Gesang, die Enkel um ihn.
Melodien, wie der Leyer in Walhalla, ertönen ihm
Des wechselnden, des kühneren, des deutscheren Odénflugs,
Welcher, wie der Adler zur Wolk' itzt steigt, 15
Dann herunter zu der Eiche Wipfel sich senkt.

Vgl. Goethe „Die Kränze“ V.1-4: Sämtliche Gedichte. I. Teil: Die Gedichte der Ausgabe letzter Hand: Artemis-Gedenkausgabe. Zürich. Bd.1. 1950. S.355:

Klopstock. Ausgewählte Werke. München. Hanser. 1962. Anmerkungen von Karl Schleiden. S.1266. Vgl. Herders Rezensionen 1770-74(V(4)20): Bd.5. S.337.

Klopstock will uns vom Pindus entfernen; wir sollen nach Lorbeer
Nicht mehr geizen, uns soll inländische Eiche genügen;
Und doch führet er selbst den überepischen Kreuzzug
Hin auf Golgathas Gipfel, ausländische Götter zu ehren!

19) Klopstock „Thuisikon“ 1.Str. V.3: Oden(V(4)18). S.196.

Vgl. Blake, William „Songs of Experience/Lieder der Erfahrung“ Introduction /Einleitung. V.1-5: Gedichte der englischen Romantik. Englisch/Deutsch:

Borgmeier, Raimund. Reclam-Universal-Bibliothek. Stuttgart. 1980. S.50/S.

51: Complete Writings. London. Oxford University Press. 1966(1.Aufl.)/1969.

Hear the voice of the Bard! Hört die Stimme des Barden! / welcher
Who Present, Past, & Future, sees; cher Gegenwart, Vergangenheit und
Whose ears have heard Zukunft sieht; / dessen Ohren ge-
The Holy Word hört haben / das Heilige Wort, /
That walk'd among the ancient trees, das unter den alten Bäumen wandelte,

20) Klopstock „Thuisikon“ 3.Str. V.9-10: Oden. S.196.

Vgl. Herder „Über den Ursprung der Sprache“(V(4)17) Bd.5. S.49.

Der Mensch ist also als ein horchendes ... Geschöpf ... gebildet, ...

Vgl. Herder „Von Deutscher Art und Kunst“(1773) I. Auszug aus einem Briefwechsel über Oßian und die Lieder alter Völker: Werke. Bd.2. S.254: Sämtliche Werke. Bd.5. S.184-185.

Im ersten Falle haben Milton, Haller, Kleist und andre gedichtet: sie

mains le grand rival d'Homère. Il faut que tu le lises, mon ami — alors tes vallées deviendront toutes des vallées de Kona — ton Engelsberg un mont de Morven — tu te sentiras envahi par une douce mélancolie — il faut le lire — je ne sais pas déclamer. Il m'accompagnera en vacances à Nürtingen, et là je le lirai tant que je finirai par le connaître à moitié par coeur. ... Le bon Ossian aveugle ne cesse de bourdonner dans ma tête. ...

Vgl. Goethe „Die Leiden des jungen Werther“: Werke. Bd.6. S.82/S.108-114. Am 12.Oktober. (1772) Ossian hat in meinem Herzen den Homer verdrängt. Welch eine Welt, in die der Herrliche mich führt! Zu wandern über die Heide, umsaust vom Sturmwinde, der in dampfenden Nebeln die Geister der Väter im dämmernden Lichte des Mondes hinführt. Zu hören vom Gebirge her, im Gebrülle des Waldstroms, halb verwehtes Ächzen der Geister aus ihren Höhlen, und die Wehklagen des zu Tode sich jammernden Mädchens, um die vier moosbedeckten, grasbewachsenen Steine des Edelgefallnen, ihres Geliebten. Wenn ich ihn dann finde, den wandelnden grauen Barden, ... (S.82//S.108) „Stern der dämmernden Nacht, ... Die stürmenden Winde ... Lebe wohl, ruhiger Strahl. Erscheine, du herrliches Licht von Ossians Seele! ... Colma ... (S.108/S.109) Tritt, o Mond, aus deinen Wolken, erscheinet, Sterne der Nacht! Leite mich irgend ein Strahl zu dem Orte, wo meine Liebe ruht ... (S.109/S.110) Wenn's Nacht wird auf dem Hügel, und Wind kommt über die Heide, soll mein Geist im Winde stehn ... Ryno ... (S.110/S.111) Alpin ... (S.111/S.112) Auf, ihr Winde des Herbstes! auf, stürmt über die finstere Heide! Waldströme, braust! Heult, Stürme, im Gipfel der Eichen! ... (S.112/S.113) Er sah den kühnen Erath am Ufer, faßt' und band ihn an die Eiche, fest umflocht er seine Hüften, der Gefesselte füllte mit Ächzen die Winde. ... (S.113/S.114) Die ganze Nacht stand ich am Ufer, ich sah sie im schwachen Strahle des Mondes, die ganze Nacht hört'ich ihr Schreien, laut war der Wind, ... " Ein Strom von Tränen, der aus Lottens Augen brach und ihrem gepreßten Herzen Luft machte, hemmte Werthers Gesang. ... Die Lippen und Augen Werthers glühten an Lottens Arme; ein Schauer überfiel sie; sie wollte sich entfernen, 17)„Die Leiden des jungen Werther“: Werke. Bd.6. S.112(V(4)15).

Vgl. Herder, Johann Gottfried „Abhandlung über den Ursprung der Sprache“ (Berlin. Christian Friedrich Voß. 1772) 2.Aufl. 1789. I.Teil. 3.Abschnitt. S.94-100: Sämtliche Werke. Bd.5. Nachdruckaufgabe. Reprografischer Nachdruck der Ausgabe Berlin 1891. Berlin/Hildesheim. Weidmann/Olms. S.61-64.

Wir sind Ein denkendes sensorium commune, nur von verschiedenen Seiten berührt — ... Allen Sinnen liegt Gefühl zum Grunde, ... (S.61/S.62) Alle Zergliederungen der Sensation nei Buffons, Condillacs und Bonnets empfindendem Menschen sind Abstraktionen: der Philosoph muß Einen Faden der Empfindung liegen lassen, indem er den andern verfolgt — in der Natur aber sind alle die Fäden Ein Gewebe! ... Anfangs nur Gefühl. (S.62/S.63) ... Das Gefühl liegt dem Gehör so nahe: seine Beziehungen z.B. hart, rau, weich, wolligt, sammet, haarigt, starr, glatt, schlicht, borstig u.s.w. die doch alle nur Oberflächen betreffen, und nicht einmal tief einwirken, tönen alle, als ob mans fühlte: ... Das Wort: Duft, Ton, süß, bitter, sauer u.s.w. tönen alle, als ob man fühlte: denn was sind ursprünglich alle Sinne anders, als Gefühl? — ... (S.63/S.64) ... Hier ist die Hauptbemerkung: „Da der Mensch blos durch das Gehör die Sprache der lehrenden Natur empfängt, und ohne das die Sprache nicht erfinden kann: so ist Gehör auf gewisse Weise der Mittlere seiner Sinne, die eigentliche Thür zur Seele, und das Verbindungsband der übrigen Sinne geworden.“ ...

Vgl. Herders Werke in 5 Bänden. Berlin/Weimar. Aufbau. 1978. Bd.2. S.136ff: Sämtliche Werke. Bd.5. S.65-66(=Werke. Bd.2. S.140).

Das Gehör ist der Mittlere unter den Sinnen an Deutlichkeit und Klarheit;

- Car c'est ainsi que les Divins prennent demeure et qu'ébranlant
 Les profondeurs, trouant l'ombre, leur Jour descend parmi les hommes.
- 14) „Brod und Wein" 6.Str. V.99-108: StA. Bd.2. S.93.
 Aber wo sind sie? wo blühen die Bekannten, die Kronen des Festes?
 Thebe welkt und Athen; rauschen die Waffen nicht mehr
 In Olympia, nicht die goldnen Wagen des Kampfspiels,
 Und bekränzen sich denn nimmer die Schiffe Korinths?
 Warum schweigen auch sie, die alten heiligen Theater?
 Warum freuet sich denn nicht der geweihte Tanz?
 Warum zeichnet, wie sonst, die Stirne des Mannes ein Gott nicht,
 Drückt den Stempel, wie sonst, nicht dem Getroffenen auf?
 Oder er kam auch selbst und nahm des Menschen Gestalt an
 Und vollendet' und schloß tröstend das himmlische Fest.
- Vgl. „Le Pain et le vin" v.99-108: OEuvres de la Pléiade. S.812.
 Mais où sont-ils? Où fleurissent-elles, les très-illustres, les couronnées
 De la fête? Athènes s'est fanée, et Thèbes. La rumeur des armes, des
 Rivaux, s'est-elle à jamais tue aux échos d'Olympie? chars d'or
 Et les nefs de Corinthe ont perdu leurs couronnes pour toujours?
 Et pourquoi ce silence encore aux antiques et saints théâtres?
 Pourquoi la danse morte, et sa rituelle allégresse?
 Et pourquoi donc un dieu ne grave-t-il plus le front de l'homme
 Comme jadis, et scellant de son sceau celui qu'il a saisi?
 Lui-même il descendait parfois et prenant forme humaine
 À la divine fête il donnait fin, consolateur.
- Vgl. Goethe „Iphigenie auf Tauris"(1787) V.1-6: Werke. Hamburger Ausgabe.
 München. Beck/dtv. 1981/1982. Bd.5. S.7.
 Heraus in eure Schatten, rege Wipfel
 Des alten, heiligen, dichtbelaubten Haines,
 Wie in der Göttin stilles Heiligtum,
 Tret ich noch jetzt mit schauerndem Gefühl,
 Als wenn ich sie zum erstmal beträte 5
 Und es gewöhnt sich nicht mein Geist hierher.
- Vgl. Hölderlins Brief 121 an den Bruder vom 2.6.1796: StA. Bd.6. S.208.
 Goethe sagt irgendwo: »Lust und Liebe sind die Fittige zu großen Thaten.«
 Goethe dit quelque part: «Le plaisir et l'amour sont les ailes qui portent
 aux grandes actions.»(Traduction par Naville, Denise: OEuvres de la
 Pléiade. S.385)
- Vgl. „Iphigenie auf Tauris" V.664-666: Werke. Bd.5. S.25.
 Bin ich nicht immer noch voll Mut und Lust,
 Und Lust und Liebe sind die Fittiche
 Zu großen Taten.
- c)VOM URGRUND ZUM URSPRUNG
- 15)Vgl. V(4)9.
- 16)Hölderlins Brief 12 an Immanuel Nast, Anfang September 1787: StA. Bd.6.
 S.16.
 Eine Neuigkeit! eine schöne, schöne herzerquickende Neuigkeit! Ich habe
 den Ossian, den Barden ohne seines gleichen, Homers großen Nebenbuhler
 hab'ich wirklich unter den Händen. Den must Du lesen, Freund — da werden
 Dir Deine Thäler lauter Konathäler — Dein Engelsberg ein Gebirge
 Morvens — Dich wird ein so süßes, wehmütiges Gefühl anwandeln — Du
 must ihn lesen — ich kan nicht deklamiren. Er muß mit nach Nürtingen in
 die Vakanz, da laß'ich ihn so lang, biß ich ihn halb auswendig kan. ...
 — der gute, blinde Ossian da schwadronirt mir immer im Kopf. ...
- Vgl. OEuvres de la Pléiade. S.27. Traduction par Naville.
 Une nouvelle, une bonne, bonne nouvelle qui rafraîchit le coeur. J'ai reçu
 le volume d'Ossian, le barde sans pareil, j'ai en ce moment entre les

12) Biblia Germanica 1545. I. Teil. S. 53: „Exodos“ 34. 27-29.

UND der HERR sprach zu Mose / Schreib diese wort / Denn nach diesen worten / hab ich mit dir vnd mit Israel einen Bund gemacht. Vnd er war alda bey dem HERRN vierzig tage vnd vierzig nacht / vnd ass kein brot / vnd tranck kein wasser. Vnd er schreib auff die Tafeln solchen Bund / die zehen wort. Da nu Mose vom bergē Sinai gieng / hatte er die zwo Tafeln des Zeugnis in seiner hand / ...

Vgl. Die heilige Schrift. S.98-99.

XXXIV. 27. Und der Herr sprach zu Mose: Schreib diese Worte; denn nach diesen Worten habe ich mit dir und mit Israel einen Bund gemacht. 28. Und er war allda bei dem Herrn vierzig Tage und vierzig Nächte und aß kein Brot und trank kein Wasser. (S.98/S.99) Und Er schrieb auf die Tafeln die Worte des Bundes, die Zehn Worte. 29. Da nun Mose vom Berge Sinai ging, hatte er die zwei Tafeln des Zeugnisses in seiner Hand ...

Vgl. Vulgata. Tomus I. S.126: Liber Exodi. 34. 28.

et scripsit in tabulis verba foederis decem

Vgl. Septuaginta. Vol.I. S.147: Exodos. 34. 28.

καὶ ἔγραψεν τὰ ῥήματα ταῦτα ἐπὶ τῶν πλακῶν τῆς διαθήκης, τοὺς δέκα λόγους. —

Vgl. Biblia Hebraica Stuttgartensia. S.145: : אֶת דְּבַר הַבְּרִית עָשָׂרַת הַדְּבָרִים:

13) „Brod und Wein“ 4.Str. V.55-56(S.91)/V.57-72(S.92): StA. Bd.2. S.91-92.

Seeliges Griechenland! du Haus der Himmlischen alle, 55

Also ist wahr, was einst wir in der Jugend gehört?

Festlicher Saal! der Boden ist Meer! und Tische die Berge,

Wahrlich zu einzigem Brauche vor Alters gebaut!

Aber die Thronen, wo? die Tempel, und wo die Gefäße,

Wo mit Nectar gefüllt, Göttern zu Lust der Gesang? 60

Wo, wo leuchten sie denn, die fernhintreffenden Sprüche?

Delphi schlummert und wo tönet das große Geschick?

Wo ist das schnelle? wo brichts, allgegenwärtigen Glücks voll

Donnernd aus heiterer Luft über die Augen herein?

Vater Aether! so riefs und flog von Zunge zu Zunge 65

Tausendfach, es ertrug keiner das Leben allein;

Ausgetheilet erfreut solch Gut und getauschet, mit Fremden,

Wirds ein Jubel, es wächst schlafend des Wortes Gewalt

Vater! heiter! und hallt, so weit es gehet, das uralt

Zeichen, von Eltern geerbt, treffend und schaffend hinab. 70

Denn so kehren die Himmlischen ein, tiefschütternd gelangt so

Aus den Schatten herab unter die Menschen ihr Tag.

Vgl. „Le Pain et le vin“ v.55-69(S.810)/v.70-72(S.811): OEuvres de la Pléiade. S.810-811.

Ô Grèce bienheureuse! Ô toi, demeure à tous les dieux donnée,

Quoi! c'est donc vrai, ce qu'en notre jeunesse un jour nous entendîmes?

Ô salle des festins! Ton sol? Mais c'est la mer! Tes tables? Les mon-

Jadis à cette seule fin bâties, en vérité. tagnes

Mais les trônes, où sont-ils donc? Les temples? Où, les urnes

De nectar, et le chant qui doit réjouir le coeur des dieux?

Où brillent-ils, où donc, les oracles frappant au loin comme l'éclair?

Delphes dort, et la voix du grand Destin, où sonne-t-elle?

Où le dieu prompt? Lourd d'un universel bonheur, où, de quels cieux en

Jailli, frappe-t-il les regards de sa splendeur tonnante? fête

Éther, ô Père! Ainsi montait le cri par mille et mille lèvres

Multiplié; nul n'était seul à supporter la vie. Car un tel bien,

C'est par l'échange et le partage avec les inconnus qu'il donne joie.

Une allégresse éclate; il s'acctoît en dormant, le pur pouvoir

Du mot Père! et voici le legs de nos parents, le très antique

Signe qui retentit au loin, frappe et féconde!

b) „HAIN“ UND „EIN EIUERIGER GOTT“

- 9) Biblia Germanica 1545(V(4)2). I. Teil. S.7/S.8./S.9/S.10: „Genesis“ 12ff. Also nam Abram sein weib ... vnd Seelen ... zogen aus zu reisen in das land Canaan. Vnd als sie kommen waren in dasselbige Land / zog Abram durch / bis an die stet Sichern / vnd an den hayn More / ... (12. 5-6). Also erhub Abram seine Hütten / kam vnd wonet im Hayn Mamre / der zu Hebron ist / Vnd bawet daselbs dem HERRN einen Altar. (13. 18). AN dem tage machte der HERR einen Bund mit Abram / ... (15. 18). Vnd ich wil meinen Bund zwischen mir vnd dir machen / ... (17. 2). Sihe / Ich bins / vnd hab meinen Bund mit dir / Vnd du solt ein Vater vieler Völcker werden / Darumb soltu nicht mehr Abram heissen / sondern Abraham sol dein name sein / ... (17. 4-5). VND der HERR erschein jm im Hayn Mamre / ... (18. 1)
- Vgl. Die heilige Schrift(V(4)2). S.15-20: „1.Mose“ 12-18.
- XII. 5. Also nahm Abram sein Weib ... und die Seelen, ... zogen aus, zu reisen in das Land Kanaan. Und als sie gekommen waren in dasselbe Land, 6. zog Abram durch bis an die Stätte Sichern und an den Hain More; ... XIII. 18. Also erhob Abram seine Hütte, kam und wohnte im Hain Mamre, der zu Hebron ist, und baute daselbst dem Herrn einen Altar. ... XV. 18. An dem Tage machte der Herr einen Bund mit Abram ... XVII. 2. Und ich will meinen Bund zwischen mir und dir machen ... 4. Siehe, ich bin's und habe meinen Bund mit dir, und du sollst ein Vater vieler Völker werden. 5. Darum sollst du nicht mehr Abram heißen, sondern Abraham soll dein Name sein; ... XVIII. 1. Und der Herr erschien ihm im Hain Mamre,
- Vgl. Vulgata(V(4)2). Tomus I. S.23: „Genesis“ 18. 1.
apparuit autem ei Dominus in convalle Mambre ...
- Vgl. Septuaginta(V(4)2). Vol.I. S.23.
ὁ θεὸς πρὸς τῆ δροῦ τῆ Μαμβρη ...
- Vgl. Biblia Hebraica Stuttgartensia(V(4)2). S.24: יְהוָה אֵלָיו יְהוָה בְּאֵלֵי קַמְרָא 18
- 10) Biblia Germanica 1545. I. Teil. S.42: „Exodos“ 19. 6.
Vnd jr solt mir ein priesterlich Königreich, vnd ein heiliges Volck sein.
- Vgl. Vulgata. Tomus I. S.103: regnum sacerdotale et gens sancta
- Vgl. Septuaginta. Volumen I : βασίλειον ἱερατεύμα καὶ ἔθνος ἅγιον (S.118)
- 11) Biblia Germanica 1545. I. Teil. S.52: „Exodos“ 34. 10-14.
VND er sprach / Sihe / Ich wil einen Bund machen fur alle deinem Volck / ... Hüt dich / das du nicht einen Bund machest mit den Einwonern des Lands / da du ein kompst / das sie dir nicht ein Ergernis vnter dir werden. Sondern jre Altar soltu vmbstürzten / vnd jre Götzen zubrechen / vnd jre Haine ausrotten. Denn du solt kein andern Gott anbeten / Denn der HERR heisst ein Eiuerer / Darumb das er ein eiueriger Gott ist /
- Vgl. Die heilige Schrift. S.98: „2.Mose“ 34. 10-14.
XXXIV. 10. Und er sprach: Siehe, ich will einen Bund machen vor allem deinem Volk ... 12. Hüte dich, daß du nicht einen Bund machest mit den Einwohnern des Landes, da du hineinkommst, daß sie dir nicht ein Fallstrick unter dir werden; 13. sondern ihre Altäre sollst du umstürzen und ihre Götzen zerbrechen und ihre Haine ausrotten; 14. denn du sollst keinen andern Gott anbeten. Denn der Herr heißt ein Eiferer; ein eifriger Gott ist er.
- Vgl. Vulgata. Tomus I. S.125.
respondit Dominus ego inibo pactum ... cave ne umquam cum habitatoribus terrae illius iungas amicitias quae tibi sint in ruinam/sed aras eorum destrue/confringe statuas lucosque succide/noli adorare deum alienum/ Dominus Zelotes nomen eius Deus est aemulator/
- Vgl. Septuaginta. Vol.I. S.146.
ἐγὼ τίθημι σοι διαθήκην ... (34. 10). ... καὶ τὰ ἄλση αὐτῶν ἐκκόψετε ... (34. 13). ... ὁ γὰρ κύριος ὁ θεὸς ζηλωτὸν ὄνομα, θεὸς ζηλωτῆς ἐστίν. (34. 14).
- Vgl. Biblia Hebraica Stuttgartensia. S.144: כִּי יְהוָה קָנָא אֶל קַנְיָהּ וְשָׂמוּ אֶל קַנְיָהּ קַנְיָהּ

- 六三
「パンとぶどう酒」第一節「聖なる夜」その四
(高橋)
- 3) Schmidt, Jochen: Hölderlins Elegie „Brod und Wein“. Berlin. Gruyter. 1968. S.37.
Das „Wehn“ der Luft hat hier wie auch sonst oft in Hölderlins Dichtung den Sinn von $\nu\epsilon\upsilon\mu\alpha$ „Lufthauch“, „Windeswehen“, „Atem“, „Seele“, „Geist“. Im „Hyperion“ ... Ein Distichon aus dem Schlußabschnitt der „Elegie“
... ein Vers der Rheinhymne, ...
- 4) Dilthey, Wilhelm: Das Erlebnis und die Dichtung. 1905. 8.Aufl. Leipzig/Berlin. Teubner. 1922. S.396.
Hyperion ist nicht ‚ein Seitentrieb der romantischen Poesie‘, wie Haym ihn auffaßte; ... Eben darin, daß der Dichter den finsternen Zug, der dem Antlitz des Lebens so tief eingegraben ist, zuerst in diesem Roman sichtbar machte, ... Und in der Darstellung dieser Lebensdeutung erwuchs ihm eine neue Form des philosophischen Romans; sie hat dann in dem Zarathustra Nietzsches ihre höchste Wirkung gewonnen.
Vgl. Haym, Rudolf „Die Romantische Schule. Ein Beitrag zur Geschichte des deutschen Geistes“ (Berlin. Rudolph Gaertner. 1870). III. Buch. I. Kap: ‚Ein Seitentrieb der romantischen Poesie‘ (S.289). IV. Aufl. Berlin. Weidmann. 1920. S.341.
- 5) „Hyperion“ Bd.1. 1797. II. Buch. 13. Brief. S.88: StA. Bd.3. S.50(V(4)182).
Und die Menschen giengen aus ihren Thüren heraus, und fühlten wunderbar das geistige Wehen, wie es leise die zarten Haare über der Stirne bewegte, wie es den Lichtstral kühlte, ...
Vgl. „Hypérion“ (Traduction par Jaccottet, Philippe) Volume premier. Second livre. Hypérion à Bellarmin: Oeuvres de la Pléiade. S.174.
Les hommes sortaient sur leur seuil, sentaient le merveilleux souffle immatériel soulever leurs fines chevelures, rafraichir les rayons de la lumière; ...
- 6) „Elegie“ (1799) V.97-100: StA. Bd.2. S.74.
Darum möcht‘, ihr Himmlischen! euch ich danken und endlich
Töntet aus leichter Brust wieder des Sängers Gebet.
Und, wie wenn ich mit ihr auf Bergeshöhen mit ihr stand,
Wehet belebend auch mich, göttlicher Othem mich an. 100
- 7) „Der Rhein“ 13. Str. V.186-8(S.147)/V.189-190(S.148): StA. Bd.2. S.147f.
Die Liebenden aber
Sind, was sie waren, sie sind
Zu Hauße, wo die Blume sich freuet
Unschädlicher Gluth und die finsternen Bäume
Der Geist umsäuselt, ...
- Vgl. „Le Rhin“ (Traduction par Roud, Gustave): Oeuvres de la Pléiade. S.854.
Mais les amants
Demeurent tels qu’ils furent; ils se retrouvent
Chez eux aux lieux où l’innocente caresse
D’un rayon réjouit la fleur, où frémissent
Au souffle de l’esprit les arbres sombres;
- 8) Schmidt: op.cit. S.38. Vgl. Beißner: StA. Bd.2. S.629.
Für die eigentümliche Wendung „regt die Gipfel des Hains auf“ gilt die Erläuterung Friedrich Beißners zu Vers 74 der Elegie „Heimkunft“ („... du regst Langgelerntes mir auf!“): „Hölderlin und seine Zeitgenossen (besonders Goethe) wenden das Wort anders als der heutige Sprachgebrauch noch in der buchstäblicheren Bedeutung an (‚etwas nach oben bewegen‘), und zwar nicht nur psychologisch wie hier (und z.B.: Palinodie V.4f.: ‚Was regt ihr mir Vergangenes auf‘), sondern auch im Bereich des Greifbaren: vgl. ‚Brod und Wein‘ V.13: ‚und regt die Gipfel des Hains auf‘; ...

QUELENNACHWEIS

(V) VON DER ABENDDÄMMERUNG ZUR HEILIGEN NACHT

(4) „Hain“ und „Bund“

a) „WEHN“

1) Hölderlin, Fr. „Brod und Wein“ 1.Str. V.1-18: Sämtliche Werke. Stuttgar-
ter Ausgabe (=StA). Kohlhammer. 1946-77 (Register 1985). Bd.2. S.90.

Rings um ruhet die Stadt; still wird die erleuchtete Gasse,
Und, mit Fakeln geschmückt, rauschen die Wagen hinweg.
Satt gehn heim von Freuden des Tags zu ruhen die Menschen,
Und Gewinn und Verlust wäget ein sinniges Haupt
Wohlzufrieden zu Haus; leer steht von Trauben und Blumen, 5
Und von Werken der Hand ruht der geschäftige Markt.
Aber das Saitenspiel tönt fern aus Gärten; vielleicht, daß
Dort ein Liebendes spielt oder ein einsamer Mann
Ferner Freunde gedenkt und der Jugendzeit; und die Brunnen
Immerquillend und frisch rauschen an duftendem Beet. 10
Still in dämmriger Luft ertönen geläutete Glocken,
Und der Stunden gedenk rufet ein Wächter die Zahl.
Jetzt auch kommet ein Wehn und regt die Gipfel des Hains auf,
Sieh! und das Schattenbild unserer Erde, der Mond
Kommet geheim nun auch; die Schwärmerische, die Nacht kommt, 15
Voll mit Sternen und wohl wenig bekümmert um uns,
Glänzt die Erstaunende dort, die Fremdlingin unter den Menschen
Über Gebirgshöhn traurig und prächtig herauf.

Vgl. „Le Pain et le vin“ (Traduction par Roud, Gustave) vers 1-18: OEuvres
de la Pléiade. Paris. Gallimard. 1967. S.807(v.1-2)/S.808(v.3-18).

La ville autour de nous s'endort. La rue illuminée accueille le silence,
Et le bruit des voitures avec l'éclat des torches s'éloigne et meurt.
Rassasiés des plaisirs du jour, vers le repos s'en vont les hommes,
Et satisfait, songeur, un front penché soupèse
Pertes et gains. Dépouillé de ses fleurs, dépouillé de ses grappes,
Las du labeur de mille mains, désert, le marché dort.
Mais au coeur des jardins s'éveille et tremble une musique lointaine,
Là-bas joue un amant, qui sait? ou peut-être un homme saisi de solitude
Qui se souvient de ses amis perdus, de sa jeunesse, et dans l'arôme
Des parterres fleuris chantent les fraîches fontaines infatigables.
La voix des cloches vibre au calme crépuscule
Et le veilleur, gardien des heures, crie un nombre à pleine voix
Oh! voici naître et frémir la brise aux feuilles extrêmes du bocage,
Regarde! et le fantôme de notre univers, la lune,
Mystérieusement paraître; et la fervente, la Nuit vient,
Peuplée d'étoiles, et tout indifférente à notre vie;
La Donneuse d'émerveillements, l'Étrangère parmi les hommes
Aux cimes des monts là-bas s'éploie et brille dans sa mélancolique
magnificence.

2) „Genesis“ 1. 2: Biblia Hebraica Stuttgartensia. Deutsche Bibelgesell-
schaft. 1984. S.1: Septuaginta. Stuttgart. Deutsche Bibelgesellschaft. 1979.
Vol.1. S.1: Biblia iuxta Vulgatam Versionem. 3.Aufl. Stuttgart. Deutsche
Bibelgesellschaft. 1983. Tomus I. S.4: Biblia Germanica 1545 (Deutsch: Lu-
ther). Faksimile-Ausgabe. Stuttgart. Deutsche Bibelgesellschaft. 1983. I.
Teil. S.1: Die heilige Schrift nach der deutschen Übersetzung Martin Lu-
thers. Stuttgart. Württembergische Bibelanstalt. 1961. Das Alte Testament,
nach dem 1912 vom Deutschen Evangelischen Kirchenausschuß genehmigten Text.
S.5.

der Geist Gottes: spiritus Dei: πνεῦμα θεοῦ: רִּחַן אֱלֹהִים

- 35) „Brod und Wein“ 5.Str. V.81-86: StA. Bd.2. S.92.
 Möglichst dulden die Himmlischen diß; dann aber in Wahrheit
 Kommen sie selbst und gewohnt werden die Menschen des Glücks
 Und des Tags und zu schau'n die Offenbaren, das Antlitz
 Derer, welche, schon längst Eines und Alles genannt,
 Tief die verschwiegene Brust mit freier Genüge gefüllet, 85
 Und zuerst und allein alles Verlangen beglückt;
 Vgl. „Le Pain et le vin“ (Traduction par Gustave Roud) v.81-86: OEuvres de
 la Pléiade. S.811.
 C'est chose que les dieux souffrent jusqu'à l'extrême, alors
 Dans la réalité de leur présence ils apparaissent et les hommes
 S'accoutument au Jour, au bonheur, à contempler les Révélés, la face
 De ceux-là qui jadis ont nommé le Tout et l'Un,
 Comblé le coeur secret de libre et vaste plénitude, 85
 Et les premiers, les seuls, exaucé tout désir.
- 36) „Brod und Wein“ 9.Str. V.149-152: StA. Bd.2. S.95.
 Was der Alten Gesang von Kindern Gottes geweissagt,
 Siehe! wir sind es, wir; Frucht von Hesperien ists! 150
 Wunderbar und genau ists als an Menschen erfüllet,
 Glaube, wer es geprüft! ...
 Vgl. „Le Pain et le vin“ v.149-152: OEuvres de la Pléiade. S.814.
 Ce qu'ont prédit des enfants de Dieu les chants antiques,
 Vois! nous le sommes, nous! Ce sont là les fruits de l'Hespérie! 150
 Ô miracle! en des hommes s'est accompli le dire avec rigueur:
 Crois-en qui l'éprouva! ...
- 37) Hölderlin „Deutscher Gesang“ V.15-22: StA. Bd.2. S.202.
 dann sitzt im tiefen Schatten, 15
 Wenn über dem Haupt die Ulme säuselt,
 Am kühlathmenden Bache der deutsche Dichter
 Und singt, wenn er des heiligen nüchternen Wassers
 Genug getrunken, fernhin lauschend in die Stille, 20
 Den Seelengesang.
 Und noch, noch ist er des Geistes zu voll,
 Und die reine Seele
 Vgl. „Chant allemand“ (Traduction par François Fédier) v.15-22: OEuvres de
 la Pléiade. S.884.
 alors est assis dans l'ombre profonde, 15
 Quand par-dessus la tête l'orme murmure,
 Au ruisseau qui exhale la fraîcheur, le poète allemand
 Et chante, quand il a de l'eau saintement sobre
 Assez bu, écoutant au loin dans le calme,
 Le chant de l'âme.
 Et encore, encore est-il de l'esprit trop empli,
 Et l'âme pure
- 38) Hölderlins Brief 222 an den Bruder um Neujahr 1801: StA. Bd.6. S.407.
 Aber ... daß das deutsche Herz in solchem Klima, unter dem Seegen die-
 ses neuen Friedens erst recht aufgehn, und geräuschlos, wie die wachsen-
 de Natur, seine geheimen weitreichenden Kräfte entfalten wird, diß
 mein' ich, diß seh' und glaub' ich, ...
 Vgl. OEuvres de la Pléiade. S.986: Traduction par Denise Naville.
 L'essentiel, c'est ... que sous le climat et la bénédiction de cette
 paix nouvelle le coeur allemand s'épanouira et déploiera en silence,
 comme la nature en croissance, ses forces lointaines et secrètes; voilà
 ce que je pense, voilà ce que je vois et ce que je crois; et voilà es-
 sentielllement pourquoi j'envisage avec sérénité la seconde moitié de ma
 vie. ... (und diß ists, was vorzüglich mit Heiterkeit mich in die
 zweite Hälfte meines Lebens hinausseh'n läßt. : StA. Bd.6. S.407)

33) „Das älteste Systemprogramm des deutschen Idealismus“: StA. Bd.4. S.298: Hegels Werke auf der Grundlage der „Werke“ (1832-45). Frankfurt am Main. Suhrkamp. 1969-71 (Register 1979). Bd.1. S.235.

Zuletzt die Idee, die alle vereinigt, die Idee der Schönheit, das Wort in höherem platonischem Sinne genommen. Ich bin nun überzeugt, daß der höchste Akt der Vernunft, der, indem sie alle Ideen umfaßt, ein ästhetischer Akt ist, und daß Wahrheit und Güte, nur in der Schönheit verschwistert sind. Der Philosoph muß eben so viel ästhetische Kraft besitzen, als der Dichter. Die Menschen ohne ästhetischen Sinn sind unsre Buchstaben Philosophen. Die Philosophie des Geistes ist eine ästhetische Philosophie. Man kan in nichts geistreich seyn, selbst über Geschichte kan man nicht geistreich raisonniren – ohne ästhetischen Sinn.

34) Hölderlins Brief 183 an Neuffer. 3. Jul. 1799: StA. Bd.6. S.339.

Man will aber auch nur rührende erschütternde Stellen und Situationen, um die Bedeutung und den Eindruck des Ganzen bekümmern sich die Verfasser und das Publikum selten. Und so ist die strengste aller poetischen Formen, die ganz dahin eingerichtet ist, um, ohne irgend einen Schmuck fast in lauter großen Tönen, wo jeder ein eignes Ganze ist, harmonisch wechselnd fortzuschreiten, und in dieser stolzen Verläugnung alles Accidentellen das Ideal eines lebendigen Ganzen, so kurz und zugleich so vollständig und gehaltreich wie möglich, deswegen deutlicher aber auch ernster als alle andre bekannte poetische Formen darstellt – die ehrwürdige tragische Form ist zum Mittel herabgewürdigt worden, um gelegentlich etwas glänzendes oder zärtliches zu sagen.

Vgl. OEuvres de la Pléiade. S.721: Traduction par Denise Naville.

Aussi ne veut-on voir que des situations et des passages émouvants, bouleversants; la signification et l'impression d'ensemble, elles, ne pré-occupent que rarement l'auteur et le public. La plus rigoureuse de toutes les formes poétiques, entièrement faite pour qu'en l'absence de toute ornementation, au moyen de tons presque uniquement graves, dont chacun constitue une unité à lui seul, elle progresse par alternances harmoniques et que dans ce fier refus de tout ce qui est accidentel elle expose l'idéal d'un Tout vivant d'une manière à la fois concise et aussi complète et substantielle que possible, donc de façon plus explicite, mais aussi plus sérieuse que toute autre forme poétique connue, cette vénérable forme tragique a été dégradée au point de n'être plus qu'un moyen de dire occasionnellement une chose brillante ou tendre.

Vgl. Hölderlins Brief 171 an Sinclair. 24. Dez. 1798: StA. Bd.6. S.301.

Resultat des Subjectiven und Objectiven, des Einzelnen und Ganzen, ist jedes Erzeugniß und Product, und eben weil im Product der Antheil, den das Einzelne am Producte hat, niemals völlig unterschieden werden kann, vom Antheil, den das Ganze daran hat, so ist auch daraus klar, wie innig jedes Einzelne mit dem Ganzen zusammenhängt und wie sie beide nur Ein lebendiges Ganze ausmachen, das zwar durch und durch individualisirt ist und aus lauter selbstständigen, aber eben so innig und ewig verbundenen Theilen besteht.

Vgl. OEuvres de la Pléiade. S.687: Traduction par Denise Naville.

Tout produit et toute conséquence est le résultat du subjectif et de l'objectif, du particulier et du tout, et c'est justement parce que dans un produit la part du particulier ne peut jamais être complètement distinguée de la part qu'y tient le tout, que chaque objet particulier est intimement lié à un tout et qu'ils ne font tous deux qu'un seul ensemble vivant, intégralement individualisé, et constitué de parties à la fois autonomes et intimement, éternellement unies.

vollbringen zu müssen glaubten, hatte die Tendenz, alle jene fortschrittlichen und revolutionären Fermente zu beseitigen, die von ihrem Sturm und Drang aus an die jungen Vertreter der Frühromantischen Schule weitergegeben wurden. ... Der bedeutendste dichterische Ausdruck der von der Weimarer Klassik bewirkten ästhetischen Restauration ist wohl der Roman „Wilhelm Meisters Lehrjahre“, den Goethe, das Fragment der „Theatralischen Sendung“ überarbeitend, von Mai 1794 bis August 1796 schrieb.

Vgl. Hölderlins Brief an Wilmans (Dezember 1803): StA. Bd.6. S.436.

Übrigens sind Liebeslieder immer müder Flug, denn so weit sind wir noch immer, trotz der Verschiedenheit der Stoffe; ein anders ist das hohe und reine Frohloken vaterländischer Gesänge.

30) Schiller „Deutsche Größe“: Sämtliche Werke(V(3)15). Bd.1. S.474.

(Der Deutsche wohnt in einem alten sturzdrohenden Haus, aber ein strebendes Geschlecht wohnt in dem alten Gebäude, und der Deutsche selbst ist ein edler Bewohner, und indem das politische Reich wankt, hat sich das geistige immer fester und vollkommener gebildet.) Dem, der den Geist bildet, beherrscht, muß zuletzt die Herrschaft werden, denn endlich an dem Ziel der Zeit, wenn anders die Welt einen Plan, wenn des Menschen Leben irgend nur Bedeutung hat, endlich muß die Sitte und die Vernunft siegen, die rohe Gewalt der Form erliegen – und das langsamste Volk wird alle die schnellen flüchtigen einholen. Die andern Völker waren dann die Blume, die abfällt. Wenn die Blume abgefallen, bleibt sich, schwillt die Frucht der Ernte zu.

31) Fichte „Reden an die deutsche Nation“(1807-08) 13.Red: Werke. Fotomechanischer Nachdruck der „sämtlichen Werke“(Hrsg: Fichte, Immanuel Hermann. Berlin. Veit & Comp. 1845/46) Berlin. Gruyter. 1971. Bd.7. S.466-7.

Möchten wir endlich einsehen, dass alle jene schwindelnden Lehrgebäude über Welthandel und Fabrication für die Welt zwar für den Ausländer passen, und gerade unter die (S.466/S.467) Waffen desselben gehören, womit er von jeher uns bekriegt hat, dass sie aber bei den Deutschen keine Anwendung haben, und dass, nächst der Einigkeit dieser unter sich selber, ihre innere Selbstständigkeit und Handelsunabhängigkeit das zweite Mittel ist ihres Heils, und durch sie des Heils von Europa. Wage man es endlich auch noch das Traumbild einer Universalmonarchie, das an die Stelle des seit einiger Zeit immer unglaublicher werdenden Gleichgewichtes der öffentlichen Verehrung dargeboten zu werden anfängt, in seiner Hassenswürdigkeit und Vernunftlosigkeit zu erblicken! Die geistige Natur vermochte das Wesen der Menschheit nur in höchst mannigfaltigen Abstufungen an Einzelnen, und an der Einzelheit im Grossen und Ganzen, an Völkern, darzustellen. Nur wie jedes dieser letzten, sich selbst überlassen, seiner Eigenheit gemäss, und in jedem derselben jeder Einzelne jener gemeinsamen, so wie seiner besonderen Eigenheit gemäss, sich entwickelt und gestaltet, tritt die Erscheinung der Gottheit in ihrem eigentlichen Spiegel heraus, so wie sie soll; und nur der, der entweder ohne alle Ahnung für Gesetzmässigkeit und göttliche Ordnung, oder ein verstockter Feind derselben wäre, könnte einen Eingriff in jenes höchste Gesetz der Geisterwelt wagen wollen.

32) Schiller „Kallias / Brief an Körner vom 23. Februar 1793“: Sämtliche Werke(V(3)15). Bd.5. 1975. S.422 / Werke(V(3)15). Bd.2. S.373.

Eine Landschaft ist schön komponiert, wenn alle einzelne Partien, aus denen sie besteht, so ineinanderspielen, daß jene sich selbst ihre Grenze setzt und das Ganze also das Resultat von der Freiheit des Einzelnen ist. Alles in einer Landschaft soll auf das Ganze bezogen sein, und alles Einzelne soll doch nur unter seiner eigenen Regel zu stehen, seinem eigenen Willen zu folgen scheinen.

Von dem größten deutschen Sohne,
 Von des großen Friedrichs Throne
 Ging sie schutzlos, ungeehrt.
 Rühmend darfs der Deutsche sagen, 10
 Höher darf das Herz ihm schlagen:
 Selbst erschuf er sich den Wert.

Darum steigt in höhern Bogen,
 Darum strömt in vollern Wogen
 Deutscher Barden Hochgesang, 15
 Und in eigner Fülle schwellend
 Und aus Herzens Tiefen quellend,
 Spottet er der Regeln Zwang.

Vgl. Herder „Briefe zu Beförderung der Humanität“ 8.Sammlung. 1796. Brief 107: Sämtliche Werke. 33 Bände. Berlin. Weidmann. 1877-1913. Bd.18. 1883. S.137 / Werke. 5 Bände. Berlin/Weimar. Aufbau. 1978. S.168-169.

So ists mit der Poesie der Völker und Zeiten auf unserm Erdrunde; in jeder Zeit und Sprache war sie der Inbegriff der Fehler und Vollkommenheiten einer Nation, ein Spiegel ihrer Gesinnungen, der Ausdruck des Höchsten, nach welchem sie strebte (oratio sensitiva animi perfecta.) Diese Gemähle, (minder und mehr vollkommene, wahre und falsche Ideale) gegen einander zu stellen, giebt ein lehrreiches Vergnügen. In dieser Galerie verschiedner Denkart, Anstrengungen und Wünsche lernen wir Zeiten und Nationen gewiß tiefer kennen als auf dem täuschenden Trostlosen Wege ihrer politischen und Kriegsgeschichte. In dieser sehen wir selten mehr von einem Volke, als wie es sich regieren und tödten ließ; in jener lernen wir, wie es dachte, was es wünschte und wollte, wie es sich erfreute, und von seinen Lehrern oder von seinen Neigungen geführt ward.

Vgl. Schlegel, August Wilhelm(1767-1845) „Allgemeine Literatur-Zeitung“ (Jena/Leipzig. Dezember 1797“: Hamburger Ausgabe(V(3)18). Bd.2. Äußerungen über „Hermann und Dorothea“. S.742(13. Dezember 1797).

„Hermann und Dorothea“ ist ein vollendetes Kunstwerk im großen Stil und zugleich faßlich, herzlich, vaterländisch, volksmäßig; ein Buch voll goldener Lehren der Weisheit und Tugend.

Vgl. Heine, Heinrich(1797-1856) „Die romantische Schule“(1835-36) I.Buch: Säkularausgabe. Berlin/Paris. Aufbau/Centre National de la Recherche Scientifique. Bd.8. 1972. S.35-36 über Goethe.

der Geist wurde Materie unter seinen Händen, und er gab ihm die schöne gefällige Form. So wurde er der größte Künstler in unserer Literatur, und alles was er schrieb wurde ein abgerundetes Kunstwerk. (S.35/S.36) Keineswegs jedoch leugnete ich bei dieser Gelegenheit den selbständigen Werth der goetheschen Meisterwerke. Sie zieren unser theueres Vaterland, wie schöne Statuen einen Garten zieren, aber es sind Statuen. Man kann sich darin verlieben, aber sie sind unfruchtbar: die goetheschen Dichtungen bringen nicht die That hervor, wie die Schillerschen. Die That ist das Kind des Wortes, und die goetheschen schönen Worte sind kinderlos.

Vgl. Baioni, Giuliano „Classicismo e Rivoluzione. Goethe e la Rivoluzione francese“(Napoli. Guida Editori. 1969) V.Kap.: Goethe-Jahrbuch(Weimar. Hermann Böhlau Nachfolger) Bd.92. 1975. S.73-127: „Märchen“ - „Wilhelm Meisters Lehrjahre“ - „Hermann und Dorothea“. Zur Gesellschaftsidee der deutschen Klassik. Übersetzt von Monika Köster. S.83.

Goethe und Schiller — es ist kaum erforderlich, das zu sagen — werden dadurch nicht plötzlich zu Reaktionären, denn sie vermitteln dem bürgerlichen 19. Jahrhundert die hohe humanistische Tradition der europäischen Aufklärung. Aber diese ausschließlich ästhetische Mission, die sie angesichts der politischen Realität der Revolution ihrer Klasse gegenüber

ökonomische Reflexion – die Überlegungen des „sinnigen Haupts“, des bourgeois – affirmativ. „Gewinn und Verlust“ werden „wohlzufrieden“ bedacht, denn die Praxis des Markts hat sich gelohnt.

Vgl. Unger, Richard: Hölderlin's Major Poetry. The Dialectics of Unity. Bloomington. Indiana University Press. 1975. S.70.

The first three distichs of the evocative first strophe depict the ending of day as a time of cheerful busyness and mundane concern with the practical details of living: Satt gehn heim von Freuden des Tags ... However, the quietude of evening may also be an occasion for desire or nostalgic longing, as when a "lover" or "lonely man", making music, attempts to express and assuage a certain pang of absence. For such men the pleasant inactivity of nightfall is not especially restful, but fosters consciousness of deprivation. They find the incessant flowing of nocturnal fountains analogous to the persistence of time, while bells and cries of watchmen enforce their awareness of time's divisions and its transiency. These sounds thus induce authentic consciousness of temporality.

Vgl. Takahashi, Katsumi: Das Stadtbild im Anfang von „Brod und Wein“ (Forschungsberichte der Universität Kōchi fürs Jahr 1983. Vol.32. Geisteswissenschaften. S.21-70. März 1984). Schluß. S.62.

28) Brentano „Fortsetzung von Hölderlins Nacht“ V.1-4: StA. Bd.7. 3. S.539.

Ach und sie tröstet mich nicht, ich kenn' sie, ich laure sie nahet

Wie zum Gefangenen sich schleicht der Wächter heran

Hier ist ein Becher so spricht sie füll ihn dir mit Tränen

Hier diesen Stein nimm aufs Herz das er dir werde zu Brod

.....

Vgl. Wackwitz: Trauer und Utopie um 1800(V(3)27). S.47.

29) Schiller „Deutsche Größe“(1797): Sämtliche Werke(V(3)15). Bd.1. S.473f.

Die Majestät des Deutschen ruhte nie auf dem Haupt s. Fürsten. Abgesondert von dem politischen hat der Deutsche sich einen eignen Wert gegründet, und wenn auch das Imperium unterginge, so bliebe die deutsche Würde unangefochten. Sie ist eine sittliche Größe, sie wohnt in der Kultur und im Charakter der Nation, die von ihren politischen Schicksalen unab- (S. 473/S.474) hängig ist. – Dieses Reich blüht in Deutschland, es ist in vollem Wachsen, und mitten unter den gotischen Ruinen einer alten barbarischen Verfassung bildet sich das Lebendige aus. (Der Deutsche wohnt in einem alten sturzdrohenden Haus, ...) ... (V(3)30).

Vgl. Schiller „Bürgerlied“(Erstdruck: Musenalmanach 1799. Später „Das Eleusische Fest“) 26.Str. V.201-208: Weimarer Nationalausgabe(V(3)21). Bd.1. S. 432. (Vgl. „Die Macht des Gesanges“(Musenalmanach 1796) Bd.1. S.225)

Freiheit liebt das Thier der Wüste,

Frei im Aether herrscht der Gott,

Ihrer Brust gewaltge Lüste

Zähmet das Naturgebot,

Doch der Mensch, in ihrer Mitte,

205

Soll sich an den Menschen reihn,

Und allein durch seine Sitte

Kann er frei und mächtig seyn.

Vgl. Schiller „Die deutsche Muse“(1803) 3 Strophen (18 Verse): Sämtliche Werke(V(3)15) Bd.1. S.214: Werke(V(3)15) Bd.2. S.705(1.Str.)/S.706(2.Str.-3.Str.).

Kein Augustisch Alter blühte,

Keines Mediceers Güte

Lächelte der deutschen Kunst,

Sie ward nicht gepflegt vom Ruhme,

Sie entfaltetete die Blume

5

Nicht am Strahl der Fürstengunst.

es ist das Einzige dieses Dichters, das eine magische Gewalt über mich hat; es gibt mir Frieden und spannt einen Himmel über mich aus, unter dem ich liege, wie ein Kind im Schooße der Mutter unter ihrem Herzen, mit keinem Schmerz, als dem des Lebens überhaupt. Dies Gedicht könnte mich trösten, wenn sie mir sagte: Rede nicht mehr mit mir! Schau in dich, sieh mich nicht mehr, ich will für dich beten! Gewiß, gewiß, und von ganzem Herzen!

25) Brentanos Tagebuchbrief(V(3)24): StA. Bd.7. 2. S.434-435.

Es ist so einfach, daß es Alles sagt: das ganze Leben, der Mensch, seine Sehnsucht nach einer verlorenen Vollkommenheit und die bewußtlose Herrlichkeit der Natur ist darin. Ist das Alles? Wo ist denn die Erbarmung und die Erlösung? fragt sie vielleicht, und ich sage: sie lese es als ein Ebenbild aller Geschichte, und sie wird auch Erbarmung und Erlösung darin finden. Sind die ersten sechs Verse nicht das weltliche Treiben ins Reale bis zur Ermüdung, die folgenden sechs nicht die Sehnsucht der Zeit und das Gefühl der Verlorenheit. Tritt im siebenten Vers nicht der Rückblick zur verlorenen Unschuld ein, und sprechen die immer quillenden Brunnen nicht von dem ewigen Quell der Verheißung, an dem die Gerechten sich laben? Mahnt diese die Glocke nicht durch die den Klang verhüllende Welt zu harren und zu beten, und ruft der Wächter nicht die Erfüllung der Zeit aus? Ist der dreizehnte Vers nicht der Vorläufer des Heils, die Stimme des (S.434/S.435) Predigers in der Wüste, der dem Herrn seinen Weg bereitet und seine Stege richtig macht? Und tritt mit dem vierzehnten Vers nicht der Herr auf: »Sieh' er kommt mit den Wolken und es werden ihn sehen alle Augen.« Im sechzehnten Vers aber steht: »Und das Licht scheint in die Finsterniß, und die Finsternisse haben's nicht begriffen.« Es wäre wohl eine schöne Aufgabe, dieses Lied nochmals zu dichten, und es ganz auf die Christnacht zu beziehen, es wäre sehr leicht. Ich wünsche, sie versuchte es, oder vielmehr sie fände sich dazu gerührt.

26) Takahashi, Katsumi: Über die erste Strophe von Hölderlins „Brod und Wein“: „Heilige Nacht“. Zweiter Teil: (IV) „Ein sinniges Haupt“ (Forschungsberichte der Universität Kōchi fürs Jahr 1986. Vol.35. Geisteswissenschaften. S.67-102. November 1986).

27) Schmidt: op.cit.(V(3)6) S.34-35.

Der Dichter wertet den ausklingenden Tag mit warmer Herzlichkeit, ganz positiv; aber bei aller Freundlichkeit der Verse, die das Bild schöner Erfüllung geben, ... (S.34/S.35) ... , bleibt der Wertbereich des geschäftigen Lebens doch abgegrenzt gegen den des hohen, geistesinnigen Lebens, ist beschränkt, noch nicht von tiefstem Daseinssinn erfüllt. Später wird im Gedicht nicht mehr von den „Freuden des Tags“, sondern von der ganz anders gearteten dionysischen Freude in nächtlicher Zeit die Rede sein. ... Während die Geräusche des Tages langsam verstummen, erwachen die zauberischen Töne des innigeren Daseins in der stille gewordenen Welt: „Aber das Saitenspiel tönt fern ... Still in dämmriger Luft ertönen geläutete Glocken, / Und der Stunden gedenk ruft ein Wächter die Zahl.“ ... Das in dieser Stunde vom Dasein der Welt selbst Vernehmbare(V(3)19)

Vgl. Wackwitz, Stephan: Trauer und Utopie um 1800. Studien zu Hölderlins Elegienwerk. Stuttgart. Heinz. 1982. S.47//S.30.

Die hinwegrauschenden fackelgeschmückten Wagen, so meine Deutung, sind eine esoterische Anspielung auf den Persephone-Mythos. Diese Anspielung, gleich am Eingang in die Elegie, weist auf das versteckte Thema des gesamten Elegienwerks, die Wechselbeziehung von Oberwelt, der gegenwärtigen Praxis, und der Unterwelt, dem von dieser Praxis Verdrängten. (S.47//S.30) Im Gegensatz zur menschlichen Erinnerung, die allein Verluste — die vergangene Jugend und die fernen Freunde — bilanzieren kann, ist die

- Zu jenen Sphären wag'ich nicht zu streben,
 Woher die holde Nachricht tönt;
 Und doch, an diesen Klang von Jugend auf gewöhnt,
 Ruft er auch jetzt zurück mich in das Leben. 770
 Sonst stürzte sich der Himmelsliebe Kuß
 Auf mich herab, in ernster Sabbatstille;
 Da klang so ahnungsvoll des Glockentones Fülle,
 Und ein Gebet war brünstiger Genuß;
 Ein unbegreiflich holdes Sehnen 775
 Trieb mich, durch Wald und Wiesen hinzugehn,
 Und unter tausend heißen Tränen
 Fühlt'ich mir eine Welt entstehn.
 Dies Lied verkündete der Jugend muntre Spiele,
 Der Frühlingsfeier freies Glück; 780
 Erinnerung hält mich nun mit kindlichem Gefühle
 Vom letzten, ersten Schritt zurück.
 O tönet fort, ihr süßen Himmelslieder!
 Die Träne quillt, die Erde hat mich wieder!
- 19) Haym, Rudolf: Die Romantische Schule. Ein Beitrag zur Geschichte des deutschen Geistes. Berlin. Rudolf Gaertner. 1870. III. Buch. I. Kap. S. 289. 4. Aufl. Berlin. Weidmann. 1920. S. 341.
 Ein Seitentrieb der romantischen Poesie
 Vgl. Dilthey, Wilhelm: Das Erlebnis und die Dichtung. 1865-77. Leipzig. Teubner. 8. Aufl. 1922. S. 396.
 Hyperion ist nicht 'ein Seitentrieb der romantischen Poesie', wie Haym ihn auffaßte;
- Vgl. Schmidt: op. cit. (V(3)6) S. 35.
 Das in dieser Stunde vom Dasein der Welt selbst Vernehmbare ist aber gerade das, was im Treiben des Tages wegen seiner Unaufdringlichkeit und gesetzlichen Gleichmäßigkeit unbeachtet bleibt und doch viel tieferes Symbol unseres Daseins ist als die Gegenstände, denen unsere Aufmerksamkeit während der hellen Stunden gilt: das Abbild des Lebens selbst, der „immerquillende“ Brunnen, welcher vom steten Werden und vom steten Vergehen spricht; die Glocken, deren Tönen den großen Puls der Zeit erfüllen läßt. — Zwei Hauptmotive der romantischen Poesie, das der Ferne und das des Verfließens der Zeit, sind in der zweiten Distichentrias in seltener Reinheit verkörpert.
- 20) Hellas und Hesperien bei Hölderlin (V(3)13). (III) „Gott der Mythe“. (10) „Die tiefste Innigkeit“ (Vol. 35. S. 2-14).
- 21) Schiller „Die Freundschaft“ 10. Str. V. 55-60: Werke. Weimarer Nationalausgabe. Hermann Böhlau Nachfolger. Bd. 1. 1943. S. 111.
 Freundlos war der grose Weltenmeister, 55
 Fühlte Mangel — darum schuf er Geister,
 Sel'ge Spiegel seiner Seligkeit! —
 Fand das höchste Wesen schon kein Gleiches,
 Aus dem Kelch des ganzen Seelenreiches
 Schäumt ihm — die Unendlichkeit. 60
- 22) Takahashi, Katsumi: Über die erste Strophe von Hölderlins „Brod und Wein“: „Heilige Nacht“ Dritter Teil — „Abgeschiedenheit“ und „Brunnen“ (V(3)4). (V). (1) „Abgeschiedenheit“ Anmerkungen (V(1)13).
- 23) Vgl. V(3)1.
- 24) Brentano. Aus einem Tagebuchbrief für Luise Hensel. Berlin. Dezember 1816: StA. Bd. 7. 2. S. 433.
 Ich habe schon viel geopfert, aber mehr verloren! Ich wollte sie scheiden lassen aus meiner Seele, wie eine Sonne, von der ich geträumt; denn es ist Nacht in mir, und ich harre des Engels, der die Geburt des Heilands in mir verkündige. Hier fällt mir das liebste Gedicht ein, das ich kenne;

Mais le jour luit! Je l'ai vu poindre à la cime de mon attente.
 Ah! que ce que je vis, le sacré, soit mon dire! 20
 Car celle qui est plus vieille que le Temps, celle-là même
 Qui domine les dieux de l'Orient et ceux du Soir,
 La Nature! aujourd'hui dans un fracas d'armes s'estéveillée,
 Et du haut de l'Éther au tréfonds de l'abîme, selon
 L'impérissable loi, comme jadis du Chaos sacré jaillie, 25
 L'inspiration se sent vierge refleurir,
 Créatrice de toutes choses.

17)StA. Bd.8. S.283: Chronologie der Gedichte nach Erstveröffentlichungsdaten. 1807 / Musenalmanach für das Jahr 1807 / Leopold Seckendorf / Stuttgart(Die Herbstfeier) / Die Nacht V.1-18 von Brod und Wein

18)Clemens Brentano an Philipp Otto Runge. Berlin. 21.Januar 1810: StA. Bd.7. 2. S.407.

so sage ich Ihnen: das alte Rittergedicht Tristan und Isalde, die Fiammetta des Boccacaz, der standhafte Prinz Calderon's und einige Oden des wahnsinnig gewordenen Würtemberger Dichters Hölderlin, z.B. seine Elegie an die Nacht, seine Herbstfeyer, sein Rhein, Pathmos, und andere, welche in den zwey Musenalmanachen Seckendorf's von 1807 und 1808 vergessen und unerkant stehen. Niemals ist vielleicht hohe betrachtende Trauer so herrlich ausgesprochen worden. Manchmal wird dieser Genius dunkel und versinkt in den bittern Brunnen seines Herzens; meistens aber glänzet sein apokalyptischer Stern Wermuth wunderbar rührend über das weite Meer seiner Empfindung. Wenn Sie diese Bücher finden können, so lesen Sie diese Lieder doch. Besonders ist die Nacht klar und sternenhell und einsam und eine rück- und vorwärts tönende Glocke aller Erinnerung; ich halte sie für eines der gelungensten Gedichte überhaupt. Während ich Solches erlebte, entstand in mir unbewußt die Begierde, ein Gedicht zu erfinden,

Vgl. Goethe „Faust“ I. Teil. ‚Nacht‘ V.732-784: Werke. Hamburger Ausgabe. München. Beck/dtv. 1981/1982. Bd.3. S.30.

Hier ist ein Saft, der eilig trinken macht;
 Mit brauner Flut erfüllt er deine Höhle.
 Den ich bereitet, den ich wähle,
 Der letzte Trunk sei nun, mit ganzer Seele, 735
 Als festlich hoher Gruß, dem Morgen zugebracht!
 Er setzt die Schale an den Mund.

Glockenklang und Chorgesang.

CHOR DER ENGEL. Christ ist erstanden!
 Freude dem Sterblichen,
 Den die verderblichen,
 Schleichenden, erblichen 740
 Mängel umwandten.

FAUST. Welch tiefes Summen, Welch ein heller Ton
 Zieht mit Gewalt das Glas von meinem Munde?
 Verkündigt ihr dumpfen Glocken schon
 Des Osterfestes erste Feierstunde? 745
 Ihr Chöre, singt ihr schon den tröstlichen Gesang,
 Der einst, um Grabes Nacht, von Engelslippen klang,
 Gewißheit einem neuen Bunde?

.....

Was sucht ihr, mächtig und gelind,
 Ihr Himmelstöne, mich am Staube?
 Klingt dort umher, wo weiche Menschen sind.
 Die Botschaft hör'ich wohl, allein mir fehlt der Glaube; 765
 Das Wunder ist des Glaubens liebstes Kind.

C'est par l'échange et le partage avec les inconnus qu'il donne joie.

Une allégresse éclate; il s'accroît en dormant, le pur pouvoir

Du mot Père! et voici le legs de nos parents, le très antique

Signe qui retentit au loin, frappe et féconde!

Car c'est ainsi que les Divins prennent demeure et qu'ébranlant

Les profondeurs, trouant l'ombre, leur Jour descend parmi les hommes.

13) „Anmerkungen zum Oedipus" 3.Kap.: StA. Bd.5. S.201-202.

So in den Chören des Oedipus das Jammernde und Friedliche und Religiöse, die fromme Lüge (wenn ich Wahrsager bin, etc.) und das Mitleid bis zur gänzlichen Erschöpfung gegen einen Dialog, der die Seele eben dieser Hörer zerreißen will, in seiner zornigen Empfindlichkeit; in den Auftritten die schröcklichfeierlichen Formen, das Drama (S.201)/(S.202) wie eines Kezengerichtes, als Sprache für eine Welt, wo unter Pest und Sinnesverwirrung und allgemein entzündetem Wahrsagergeist, in müßiger Zeit, der Gott und der Mensch, damit der Weltlauf keine Lücke hat und das Gedächtniß der Himmlischen nicht ausgeht, in der allvergessenden Form der Untreue sich mittheilt, denn göttliche Untreue ist am besten zu behalten.

Vgl. „Remarques sur OEdipe"(Traduction par François Fédier) Chapitre trois: OEuvres de la Pléiade. S.957-958.

Ainsi, dans les chœurs d'OEdipe, la lamentation, le (S.957/S.958) ton paisible et religieux, le pieux mensonge («si je suis devin» etc.) et la compassion jusqu'à l'épuisement total face au dialogue qui vise à déchirer l'âme précisément des auditeurs que sont les choreutes, à déchirer leur âme, en sa réceptivité irritée; dans les scènes, les formes épouvantablement solennelles, le drame, comme celui d'un procès d'hérésie — tout cela en tant que langue pour un monde, où parmi la peste et le dérèglement du sens, et un esprit de divination partout exacerbé, en un temps de désœuvrement, le Dieu et l'homme, afin que le cours du monde n'ait pas de lacune, et que la mémoire de ceux du ciel n'échappe pas, se parlent dans la figure tout oublieuse de l'infidélité, car l'infidélité divine, c'est elle qui est le mieux à retenir.

Vgl. Takahashi, Katsumi: Hellas und Hesperien bei Hölderlin — „Seeliges Griechenland"(Forschungsberichte der Universität Kōchi fürs Jahr 1984/1985 /1986. Geisteswissenschaften. Vol.33. S.13-72 / Vol.34. S.1-72 / Vol.35. S.1-66. März 1985 / März 1986 / Dezember 1986). (II) Das klassische Griechenland und das abendländische Christentum. (4)„Die schröcklichfeierlichen Formen"(Vol.33. S.51-58).

14)Hellas und Hesperien bei Hölderlin(V(3)13). (III)„Gott der Mythe". (1) „Innigerer Flug"(Vol.34. S.22-24).

15)Schiller „Das Lied von der Glocke"(Erstdruck: Musenalmanach 1800) Motto: Sämtliche Werke in 5 Bänden / Werke in 3 Bänden. München. Hanser. 1965-76/ 1966. Bd.1. 1965. S.429 / Bd.2. S.810.

Vivos voco / Mortuos plango / Fulgura frango

Vgl. Anmerkungen dazu (Bd.1. S.905/Bd.2. S.868)

Ich rufe die Lebenden, ich beklage die Toten, ich breche die Blitze.

16)„Wie wenn am Feiertage ..." 3.Str. V.19-27: StA. Bd.2. S.118.

Jetzt aber tagts! Ich harrt und sah es kommen,
Und was ich sah, das Heilige sei mein Wort. 20

Denn sie, sie selbst, die älter denn die Zeiten
Und über die Götter des Abends und Orients ist,

Die Natur ist jetzt mit Waffenklang erwacht,
Und hoch vom Aether bis zum Abgrund nieder

Nach vestem Geseze, wie einst, aus heiligem Chaos gezeugt, 25

Fühlt neu die Begeisterung sich,
Die Allerschaffende wieder.

Vgl. „Comme au jour du repos"(Traduction par Gustave Roud) v.19-27: OEuvres de la Pléiade. S.834.

5)Vgl. V(3)1.

6)Schmidt, Jochen: Hölderlins Elegie „Brod und Wein“. Berlin. Gruyter. 1968. S.36.

in dem Wort „still“ liegt für Hölderlin mehr beschlossen als im gewöhnlichen Gebrauch, der nur besagt, daß kein Geräusch mehr ist. Ganz ähnlich wird im „Archipelagus“ gesprochen vom Fest, bei dem die Seele des Volks sich „Stillvereint im freieren Lied“ und am Beginn der „Friedensfeier“ von den himmlischen „still wiederklingenden“ ruhigwandelnden Tönen. Stille bezeichnet in sich schon, was durch sie erst möglich wird: Innigkeit, heilige Ahnung, geheimnisvolles Sich-ausströmen tieferer Regungen: so ertönen die Glocken „still“ in dämmeriger Luft.

7)Vgl. V(3)1.

8)Schmidt: op.cit. S.35.

Die dichterische Vorstellung hat sich unmittelbar in die Sprache übertragen, die durch die vielen Umlaute und Diphthonge von ungewöhnlichem Klangreichtum ist: „das Saitenspiel tönt fern aus Gärten ... Still in dämmeriger Luft ertönen geläutete Glocken“.

9)Rilke, Rainer Maria(1875-1926) „Das Stunden-Buch“(1905): Sämtliche Werke. Hrsg.: Rilke-Archiv. Frankfurt am Main. Insel. 1955-66. Bd.1. 1955. S.249.

10)Vgl. V(3)1.

11)„Brod und Wein“ 4.Str. V.55-56: StA. Bd.2. S.91.

Seeliges Griechenland! du Haus der Himmlischen alle,
Also ist wahr, was einst wir in der Jugend gehört?

55

Vgl. „Le Pain et le vin“ v.55-56. Traduction par Gustave Roud: OEuvres de la Pléiade. S.810.

Ô Grèce bienheureuse! Ô toi, demeure à tous les dieux donnée,
Quoi! c'est donc vrai, ce qu'en notre jeunesse un jour nous entendîmes?

12)„Brod und Wein“ 4.Str. V.57-72: StA. Bd.2. S.92.

Festlicher Saal! der Boden ist Meer! und Tische die Berge,
Wahrlich zu einzigem Brauche vor Alters gebaut!

Aber die Thronen, wo? die Tempel, und wo die Gefäße,
Wo mit Nectar gefüllt, Göttern zu Lust der Gesang?

60

Wo, wo leuchten sie denn, die fernhintreffenden Sprüche?
Delphi schlummert und wo tönet das große Geschick?

Wo ist das schnelle? wo brichts, allgegenwärtigen Glücks voll
Donnernd aus heiterer Luft über die Augen herein?

Vater Aether! so riefs und flog von Zunge zu Zunge
Tausendfach, es ertrug keiner das Leben allein;

65

Ausgetheilet erfreut solch Gut und getauschet, mit Fremden,
Wirds ein Jubel, es wächst schlafend des Wortes Gewalt

Vater! heiter! und halt, so weit es geht, das uralte
Zeichen, von Eltern geerbt, treffend und schaffend hinab.

70

Denn so kehren die Himmlischen ein, tiefschütternd gelangt so
Aus den Schatten herab unter die Menschen ihr Tag.

Vgl. „Le Pain et le vin“ v.57-69(S.810)/v.70-72(S.811). Traduction par Gustave Roud: OEuvres de la Pléiade. S.810-811.

Ô salle des festins! Ton sol? Mais c'est la mer! Tes tables? Les montagnes
Jadis à cette seule fin bâties, en vérité.

Mais les trônes, où sont-ils donc? Les temples? Où, les urnes
De nectar, et le chant qui doit réjouir le coeur des dieux?

Où brillent-ils, où donc, les oracles frappant au loin comme l'éclair?
Delphes dort, et la voix du grand Destin, où sonne-t-elle?

Où le dieu prompt? Lourd d'un universel bonheur, où, de quels cieux en
Jailli, frappe-t-il les regards de sa splendeur tonnante? fête

Éther, ô Père! Ainsi montait le cri par mille et mille lèvres
Multiplié; nul n'était seul à supporter la vie. Car un tel bien,

QUELLENNACHWEIS

(V) VON DER ABENDDÄMMERUNG ZUR HEILIGEN NACHT

(3) „Glocken“ und „Stunden“

1) Hölderlin „Brod und Wein“ 1.Str. V.1-18: Sämtliche Werke. Stuttgarter Ausgabe (=StA). Kohlhammer. 1946-77 (Register 1985). Bd.2. S.90.

Rings um ruhet die Stadt; still wird die erleuchtete Gasse,
Und, mit Fakeln geschmückt, rauschen die Wagen hinweg.

Satt gehn heim von Freuden des Tags zu ruhen die Menschen,
Und Gewinn und Verlust wäget ein sinniges Haupt

Wohlfrieden zu Haus; leer steht von Trauben und Blumen,
Und von Werken der Hand ruht der geschäftige Markt. 5

Aber das Saitenspiel tönt fern aus Gärten; vielleicht, daß
Dort ein Liebendes spielt oder ein einsamer Mann

Ferner Freunde gedenkt und der Jugendzeit; und die Brunnen
Immerquillend und frisch rauschen an duftendem Beet. 10

Still in dämmriger Luft ertönen geläutete Glocken,
Und der Stunden gedenk rufet ein Wächter die Zahl.

Jetzt auch kommet ein Wehn und regt die Gipfel des Hains auf,
Sieh! und das Schattenbild unserer Erde, der Mond

Kommet geheim nun auch; die Schwärmerische, die Nacht kommt, 15
Voll mit Sternen und wohl wenig bekümmert um uns,

Glänzt die Erstaunende dort, die Fremdlingin unter den Menschen
Über Gebirgshöhn traurig und prächtig herauf.

Vgl. „Le Pain et le vin“ vers 1-18: OEuvres sous la direction de Philippe Jaccottet. Le cent quatre-vingt onzième de la „Bibliothèque de la Pléiade“ Paris. Gallimard. 1967. S.807(v.1-2)/S.808(v.3-18). Traduction par Gustave Roud.

La ville autour de nous s'endort. La rue illuminée accueille le silence,
Et le bruit des voitures avec l'éclat des torches s'éloigne et meurt.

Rassasiés des plaisirs du jour, vers le repos s'en vont les hommes,
Et satisfait, songeur, un front penché soupèse

Pertes et gains. Dépouillé de ses fleurs, dépouillé de ses grappes,
Las du labeur de mille mains, désert, le marché dort.

Mais au coeur des jardins s'éveille et tremble une musique lointaine,
Là-bas joue un amant, qui sait? ou peut-être un homme saisi de solitude

Qui se souvient de ses amis perdus, de sa jeunesse, et dans l'arôme
Des parterres fleuris chantent les fraîches fontaines infatigables.

La voix des cloches vibre au calme crépuscule

Et le veilleur, gardien des heures, crie un nombre à pleine voix.
Oh! voici naître et frémir la brise aux feuilles extrêmes du bocage,

Regarde! et le fantôme de notre univers, la lune,
Mystérieusement paraître; et la fervente, la Nuit vient,

Peuplée d'étoiles, et tout indifférente à notre vie;

La Donneuse d'émerveillements, l'Étrangère parmi les hommes

Aux cimes des monts là-bas s'éploie et brille dans sa mélancolique
magnificence.

2) Millet, Jean François (1814-75) „Les Glaneuses“ (1857) / „L'Angélu“ (1858-1859): Musée du Louvre.

3) Takahashi, Katsumi: VERINNERLICHUNG UND ERLEUCHTUNG — Über die erste Strophe von Hölderlins „Brod und Wein“. „Heilige Nacht“ Erster Teil (Forschungsberichte der Universität Kōchi fürs Jahr 1985. Vol.34. Geisteswissenschaften. S.155-201) (III) Erleuchtung und Beleuchtung (S.170-182).

4) Takahashi, Katsumi: Über die erste Strophe von Hölderlins „Brod und Wein“: „Heilige Nacht“ Dritter Teil — „Abgeschiedenheit“ und „Brunnen“ (Forschungsberichte der Universität Kōchi fürs Jahr 1987. Vol.36. Geisteswissenschaften. S.15-42) [V] Von der Abenddämmerung zur heiligen Nacht.

(2) „Brunnen“ (S.21-27).

付録 (一九八七年十月十六日、日本独文学会昭和六十二年度秋季研究発表会・
京都会館・口頭発表原稿および欧文資料)

晩鐘と時禱——『パンとぶどう酒』第十一句と第十二句の理解のために

- (1) 詩想と現実
 (2) プレンタノの「晩鐘」
 (3) プレンタノの「夜警」
 欧文資料(当日配布)
- 一三一(76)頁―一三二(77)頁
 一三二(77)頁―一三三(78)頁
 一三三(78)頁―一三五(80)頁
 一三六(81)頁―一三八(83)頁

研究発表要旨(当日刊行「研究発表要旨」八頁―九頁所収)

啓蒙と革命の世紀の転換点で成立した『パンとぶどう酒』全九節は約百年後(一九九四年)に漸く公刊されるのであるが、既にその第一節のみは「夜」の表題の下に独立して一八〇七年、即ち所謂ヘルダーリンの塔へと狂気の詩人が隔離され通世した年に、ゼッケンドルフ編『詩神年鑑』に掲載された。故に当該詩節が本来一八〇〇年頃に有した現実の諸相への広がりやを捨象され、専ら内面世界を飛翔する夜想として、厭世家の魂に働きかけたのも不思議ではない。

例えば既に十九世紀当初プレントナーが通世の方向で、「過去また未来へとあらゆる想い出の響く晩鐘」とか「捕われた者に忍び寄る夜警」を念頭に解して以来、今なお「夜」中央部の「晩鐘」(第十一句)や「夜警」(第十二句)は、当所なき空虚とした無限への憧憬に駆られ行方なくさ迷う浪漫情緒に適合詩想と看做される傾向にある。そこで今回は在来のこの様な解釈に異議を唱え、当該の詩節を言わばミレーの名画「晩鐘」に見られるごとき、慎ましくも謹厳な「人倫の偉容」を映す時禱の現実と掴み、無限とは言えども、憧憬の心情に浸るべき漠然とした観念のみならず、『パンとぶどう酒』の詩想の核心「至福なるギリシア」に敢てキリスト像を理念追求せんと「泡立ちのぼる——無限」の側面でも捉え、しかも市民生活の日常性の只中に静かに力強く当の「無限」が生成すると読む。かくして詩想は一旦に「喪失の感情」に呑み込まれず、当時の現実へと開かれることになるのである。

(1) 詩想と現実

此所に御来席下さいました皆様の中には、本日取り上げます詩歌「パンとぶどう酒」を折節につけ何度かお読みになり、既に相当親しんでおられる先生も幾多おられることと推察申し上げます。その様な方々には御確認になるうかと思われませんが、いきなり前後関係抜きで第十一句と第十二句と取り組みます前に、予めそこに至ります『パンとぶどう酒』冒頭の詩節に触れておきたいと思ひます。

- 資料(1)を御覧下さい。訳しておきます。
- 一 静かに安らう都市。ひそやかに街路に燈火がともし
 - 二 して松明に飾られて騒然と馬車は疾駆し過ぎ去る。
 - 三 満ち足りて家路へと、昼間の飲びに別れを告げ、安らぎを求め歩みゆく人々。
 - 四 して収支得失を慮る思慮深い家長は
 - 五 悠然と和やかにわが家にくつろぐ。(黄昏の今は) 葡萄も花束もなく。
 - 六 して手仕事の品々もなく安らう、(昼間は) 忙しき広場の市場。
 - 七 だが他方、堅琴の音が彼方の庭園から響いて来る。恐らくは
 - 八 そこで恋人が奏で、或いは孤独な者が
 - 九 彼方の友を想いつつ、また若き日を偲びつつ。して噴泉が
 - 一〇 滔々と湧き、清冽な水しぶきをあげ送り、芳香に匂う花壇を落している。
 - 十一 ひそやかに黄昏の夜気に響き渡る晩鐘の音、
 - 十二 して時刻を想い、その数を夜警は声高に呼ばわる。

以上これ迄の詩節十二句におきまして、転調は第七句の冒頭「だが(Aber)」にあり、此所より詩想は内観へと沈みゆきます。ですが果してこの前の冒頭六句が本質上、引き続く第七句以下とは異質な部分なのかどうか? 此所で解釈は二手に分かれようかと思われまます。

例えば資料(2)に示しましたシュミット氏の研究書、ヘルダーリンのエレギー「パンとぶどう酒」三五頁の論述によりますと、第六句までは「忙しい生活の価値領域」と解され、これは「崇高な精神的瞑想の生活の価値領域に踏みこめないものとして限定づけられており」ます。更に資料(3)に掲げましたヴァックヴィッツ氏の研究書「一八〇〇年頃の悲哀と理想——ヘルダーリンの悲歌作品研究」の場合ですと、『パンとぶどう酒』など「三行連句詩型(エレギー詩型) 全作品の

隠れた主題」が、「現実の営みのある地上界と、この営みにより抑圧された冥界との相互関係」と規定されます。そして当然ながら皮相な「現実の営み」としては「パンとぶどう酒」の冒頭の都市像は理解され得ず、例えば第四句の「思慮深い家長」が第五句で「悠然と和やかにわが家にくつろぐ」と歌われる根拠づけも、ヴァックヴィッツ氏に依りますと第六句で話題とされる「市場での営業が儲かったからである」と説明されることとなります。

他方私は、この様な方向で「思慮深い家長」が「抜かりのない商人」と解されるのに異議を唱えておりまして、例えば資料(4)に示しました本学会の機関誌『ドイツ文学』七十三号などで今から三年程前にこの筋に反論を企てました。そこでの所論の要点を申し上げますと、「パンとぶどう酒」では既に冒頭の日常性の只中に内面への道が開かれているということであり、例えば第一句の「燈火の光(Erluchtung)」にして既に十分このことが伺えるというものです。

従いまして、確かに第七句より一層と詩想は内観に沈みゆくではありませんが、冒頭の都市像の日常性に離反して内面へと閉じてゆくのではなく、むしろ現実の諸相を契機としながら次第に意識の奥底へと開かれつつ、「至福なるギリシア(Seeliges Griechenland)」(第四節、第五五句)を指すと私は読んでおります。この点は本日話題の中心に据えました第十一句と第十二句を考える場合も留意されるべきことと思われまふ。すなわち「晩鐘」とか「時禱」の現実は、単に増長した詩人の頭脳に宿るのではなく、同時に当時の生きた現実と脈を通じ得ているという了解を忘れてはならないと私は申し上げたいのです。

ところが実際これ迄、話題の詩節はとかく現実から遊離した遁世の方向で受け取られ気味でありました。しかもこの伝統は既に十九世紀の初頭、今から百数十年前に溯るもので、その代表を詩人ブレンターノの場合に見ることが出来ます。そして前述のシュミット氏の研究を始めとして、更に英米系の研究成果、例えば資料(5)に挙げましたアンガー氏の著書『ヘルダーリンの主要な詩歌』におきましても、「時の分断性や無常性(万物流転、諸行無常)」の相の下に当詩節が把握されております。

(2) ブレンターノの「晩鐘」

それでは次にその様な万物流転の無常観に根ざしました代表といたしまして、浪漫派の詩人ブレンターノによるヘルダーリン理解を取り上げてみましょう。ブ

レンターノは資料(6)に示しましたゼッケンドルフ編『詩神年鑑(Musenalmannach)』(一八〇七年)所収の『パンとぶどう酒』第一節を「夜(Die Nacht)」の表題の下に受け取りました。すなわち「パンとぶどう酒」全九節は一八九四年に漸く始めて印刷されましたので、ブレンターノは果して目前の「夜」十八句がその後の様な詩想展開を迎えるかは知らなかったのです。但し仮に全九節を知り得たといえども、ブレンターノの読みは変わらなかったかも知れません。それ程にこの浪漫派詩人の無常観は確固たるものと思われまふ。

その具体例を見てみましょう。資料(7)に引用いたしました一八一〇年一月二十一日ルンゲ宛書簡の一節には、こうあります。

殊に「夜」は澄んで星辰に輝き、孤独で、そして過去へまた未来へとあらゆる想いの響く晩鐘(tönende Glocke)です。そもそも優れた詩歌とは、この様なもののことを言うのです。

この一節からブレンターノには、第一節の中で殊のほか第十一句の「晩鐘」が印象深く心に刻み込まれたと考えられます。此所では正に浪漫情緒に適う「無限への憧憬」が、時空を行方なくさ迷い、「過去」とか「未来」と申しましても、当所なき空漠とした「後方(rückwärts)」や「前方(vorwärts)」に過ぎませぬ。

これに対し「パンとぶどう酒」全体の詩想展開を考えますと、過去には西欧意識にとり魂の古里ギリシアが造形見事に厳然とパルテノン神殿の如く控え、他方この古典芸術世界を真理の鏡といたしまして未来の共和制民主主義の市民社会が、眼前の封建制下ドイツの彼方に遠望されます。かくして「パンとぶどう酒」という「聖書」にて始めて話題となります。「新たな盟約、つまり新約」の意味が明確化され、西欧キリスト者は自らの既成の殻を破り古典ギリシアの過去へと突き抜けるとともに、新たな人倫社会形成を啓蒙と革命の時代の課題として担ってゆくこととなります。

もし浪漫派の詩人に倣い、漠然とした「無限への憧憬」を専らといたしますと、十八世紀中葉のヴィンケルマンの『模倣論』以来、ゲーテの『イフィゲーニエ』やシラーの『ギリシアの神々』などを通じて培われて来ましたが、古典ギリシアへの憧憬を「パンとぶどう酒」に見損うことになり兼ねません。但しヘルダーリンの場合、この古典への憧憬はシラーやゲーテなどよりも遙かに徹底しており、言わば全身全霊で魂の古里ギリシアへと無限に理念追求してゆきます。すなわち、

ブレントナーの様な浪漫派の「無限への憧憬」が、『パンとぶどう酒』におきましては否定されているのではなく、一層と純化され「至福なるギリシア」に向けての「無限への憧憬」として現実の力、つまり封建制下西欧の既成意識を解体し、新たに形成する力、すなわち教養(Bildung)を獲得するのであります。

成程「パンとぶどう酒」の詩想は第七句より一層と内面世界を目指し、第八句では「孤独(einsam)」が歌われております。しかしながら詩人は此所で、ヴァックヴィッツ氏が申しました様に「現実の営みにより抑圧された冥界」へと閉じてゆくのではなく、一見そのようにも想われる外観を示すほど慎ましく密やかではあります。詩歌の言葉の響きや律動がそれを裏書きするように、ドイツ交響曲の如き底力を湛えた脈動が、敢て「孤独」を天窓として悠然と「至福なるギリシア」を目指します。それは冒頭六句の都市像に見られる日常性から離れ反れてゆくこと申しますよりは、むしろ都市像に見取れた動静、具体的には第一句、第三句、第六句で三度も繰返される「安らぎ(Ruhe)」の動機を、日常性の次元から更に新たに意識下へも開き、敢て「魂の安らぎ」とも申せませす「神自身」を指すと言ふことでもあります。

そして、この様な「孤独」な魂にこそ、第九句から第一〇句にかけて「噴泉が滔々と湧き進み」、第十一句では「晩鐘の音が響き渡る」と読み取れます。故に「晩鐘」の如くも出す「無限への憧憬」には、ブレントナーが読み取りました彼方へと揺れたゆとう浪漫情緒とともに、一心不乱に古典ギリシアを問う理念追求も内包されることになり、この後者の筋で注目すべき資料(8)に掲げましたシラーの抒情詩歌の脈動かと思われませす。

縦横は至高存在が無類無比であらうとも、
靈魂の国そのものなす玉杯より
神を指し泡立ちのぼる——無限。

とかく花鳥風月の自然詩とか有情の生を謳う体験詩に偏り易いわが国のドイツ抒情詩歌研究がつい見捨とし易い盲点が此所ではないでしょうか。ところがこの様なシラー流の理念追求において「泡立ちのぼる——無限」こそが、『パンとぶどう酒』のように敢て思想詩(Gedankenlyrik)と言い得る抒情詩歌とか、ベーターヴェンの『英雄』を始めとする大交響曲形式による壮大な抒情表現の母胎をなしているのが実情なのです。

とかく、ブレントナーの様な浪漫情緒の持ち主には、『パンとぶどう酒』第一節に触れて、このシラー流の「泡立ちのぼる——無限」が読み取れなかったようです。そして、どちらかと申しますと、むしろブレントナーの抱いた様な「無限への憧憬」を主軸とした解釈で以て、「過去へまた未来へとあらゆる想い出の響く晩鐘」に象徴されます夜の瞑想として、今なお『パンとぶどう酒』第一節は受け取られ気味なのであります。

(3) ブレントナーの「夜警」

今度は以上のような「無限への憧憬」に駆られ、浪漫派の詩人が具体的に「パンとぶどう酒」の各々の詩句を如何に扱えたか？ に注目してみましよう。それは資料(9)の一八一六年十二月の日記書簡の言葉です。訳します。

冒頭六句は、現実へ向けての世の営みが疲労(Ermüdung)へと至るものではないでしょうか。引き続く六句(第七句—第十二句)は(失なわれた)時への憧憬であり、喪失の感情ではないでしょうか。第七句に登場するのは、失なわれた無垢への回顧であり、(第九句から第一〇句にかけて)滔々と湧く噴泉は、正しき義人たちが飲んで元氣となる約束の永遠の泉について語っていないでしょうか？ この義人たちを(第十一句の)晩鐘は、響き渡る音を蔵する世界により、待ち望みそして祈るよう警告し、(第十二句の)夜警は時が満ちたのを声高に告げ知らせているのではないのでしょうか？

先程申し上げました第四句以下「思慮深い家長が(ein sinniges Haupt)／然と和やかにわが家にくつろぐ(Wohlfrieden zu Haus)」と頭韻なして「Haupt」／「Haus」と高唱されており市民生活の一駒も、ブレントナーによりますれば「疲労へと至る(bis zur Ermüdung)」に過ぎぬ詩想、すなわち資料(2)で既に触れましたシュミット氏の言葉で申しますと、「崇高な精神的瞑想の生活の価値領域には踏みこめないものとして限定づけられ」ました「忙しい生活の価値領域」と言うことになりました。そして、その資料(2)におきまして、シュミット氏は「精神的瞑想の生活の価値領域」といたしまして、「夜の時代におけるディオニューソス神バックスの歡び」を挙げておりますが、こちら資料(9)でブレントナーが話題といたしますのは、「喪失の感情」とか「義人たち」など『聖書』との関連が中心をなしております。しかし郭れにいたしましても「遁世」の

姿勢に変わりなく、日常の市民生活の只中には祈りの場が開かれて参りません。すると現世において「義人たちは」「捕われた者」と解され、「忙しい生活の価値領域」が言わば牢獄、すなわち資料(3)で既に見ましたヴァックヴィッツ氏の表現によりますれば、「現実の営みにより抑圧された冥界」となります。この様な解釈に基づき浪漫派の詩人は、更にヘルダーリンの『パンとぶどう酒』第一節への続篇を自ら創作します。資料(4)がそれです。これも訳してみましよう。

ああ夜は私を慰めぬ。私は夜を知っている。私は待ち、夜は近づく、
あたかも捕われた者へ忍び寄る夜警の如く。

ここに(ぶどう酒の)杯がある。そう夜は語る。この杯をあなたの涙で充た
しなさい。

此所のこの石を胸に抱きなさい。そうすれば石はあなたのパンとなるであ
らう。

流石プレントナーは詩人です。本来の表題「パンとぶどう酒」を知らなくとも、この様に続篇で文字通り「パン」と「ぶどう酒」について物語るほど「無限への憧憬」に駆られていたのです。

興味深いことは此所で、本日取り上げました「パンとぶどう酒」第十二句に關連します「夜警(Wächter)」が話題とされ、正に第一節の主題「夜」がこの「夜警」に喩えられている点です。もう一度「パンとぶどう酒」第十一句と第十二句を、資料(1)にて振り返っておきましょう。

十一 ひそやかに黄昏の夜気に響き渡る晩鐘の音、
十二 して時刻を想い、その数を夜警は声高に呼ばわる。

既に扱いました「晩鐘」(第十一句)と並びまして、この「パンとぶどう酒」続篇を留意しますと、「夜警」(第十二句)が浪漫派の詩人の心に深く刻まれていたことが解かります。つまり「パンとぶどう酒」第一節の中で殊のほか本日話題の第十一句と第十二句とが、プレントナーの場合には中心をなしていたと考えられるのです。

しかも第十二句の「夜警」に繋がる脈絡におきまして、明確に通世の方向が打ち出されております。現世は牢獄であり、「パンとぶどう酒」は此岸に「捕われ

た者」に対する「慰め」に過ぎなくなります。そうしますと、詩人に残された道は、せいぜい想像力の翼に乗り「至福なるギリシア」へと天翔る、言わば「靈感(Begierung)」の高揚となります。資料(1)にそのような解釈の実例がござい
ます。前述のシュミット氏の研究書五三頁です。

詩人は追憶の力により、神々しく充実した過去の時代の現存を眼前に思い浮かべ、古代の英雄や半神や詩人たちの崇高なる形姿に靈感を感じ取り困ま
れつつ、現今の乏しき時代における破壊的な威力、つまり生を空洞化し空無
へと開くあの威力から自らを救うのである。

もしこの様に読み取ることが可能となりますと、前世紀にハイムが『ロマン派』(初版、一八七〇年)で申しましたように、ヘルダーリンも「浪漫詩文の傍系」として片付けられるのではないのでしょうか。

本日此所で私が異議申し立てをいたしたいのは、正にこの様な「パンとぶどう酒」理解の趨勢に対してであります。成程ヘルダーリンの豊かな抒情の響きは、浪漫情緒をも十分に満喫させる「無限への憧憬」に溢れております。しかしながら、それだからと言って「浪漫詩文の傍系」へと引き込まれる筋のものとは思われません。なぜなら「パンとぶどう酒」第一節の瞑想の底からは、前述のシラー流の「泡立ちのぼる——無限」が生成して来るからであります。しかも当の「無限」の生成は、プレントナーの解したような通世の筋からと申しますよりは、むしろ目下の都市像に刻まれました日常性の只中からと読み取れます。

そしてヘルダーリンは、この点におきまして先聲のシラーやゲーテ以上に現実を包みこんだと申せます。例えば「パンとぶどう酒」のような思念豊かな抒情世界に、第四句では事もあろうに「収支得失(Gewinn und Verlust)」を慮る思慮深い家長」が高らかに歌い上げられます。当該の「晩鐘」や「夜警」も、この様な都市生活の日常性からまず汲み取られるべき表象かと私には思われます。そうしますと、話題の第十一句と第十二句は、あたかも十九世紀中葉のミレーの名画、すなわち資料(2)に示しました「晩鐘(U. Angels)」に似て、素朴な気取らぬ日常生活の只中における「時禱」の現実として浮き彫りにされます。そして控
え目で慎ましくも力強い謹厳な市民意識が、都市空間に反響する「晩鐘の音」や「夜警の声」とともに、このドイツと言つ「国の文化と気質」を伝える「人倫の偉容(eine stichtliche Größe)」として生成するのです。

恐らく先輩シラーも、実はこの様な抒情詩歌をこそ歌いたかったのではなかったかと思われまゝ。例えば資料⑬に引用いたしました遺作『ドイツの偉容』におきまして、シラーがこんな風に語っているからです。

ドイツ人の威厳は決して王侯の頭上に存しなかつた。政治上の価値を遠離し、ドイツ人は自ら固有の価値を樹立した。縦んば(神聖ローマ)帝国が滅んだとて、ドイツの尊厳は揺らがず悠然と留まらう。その尊厳は人倫の偉容であり、それが住まうのはその国の文化と気質なのである。

不思議と『パンとぶどう酒』には、シラーにとかく見られます教訓調の詩句が見られません。また教会の中で「パンとぶどう酒」を雄弁に物語る説教調も影をひそめております。ですがシラーの言わんとする所、或いは説教牧師の説かんとする所、それらが静かな理想の国ゲルマニアの「文化と気質」からにじみ出て参りますのが、ヘルダーリン詩歌の真骨頂かと思われまゝ。因みに封建制宮廷風オペラ文化は、『パンとぶどう酒』第二句で「松明に飾られ馬車が騒然と疾駆し過ぎ去る」とともに文字通り、内省する市民意識を何時とはなしに「過ぎ去る(Inweg)」と説めます。この詳細は資料⑭の筋を御参考下さい。此所で他方、生成する市民生活の諸相、即ち第一句の「燈火の光」に始まり、「晩鐘の音」(第十一句)や「夜警の声」(第十二句)に至るまで詩想は決して甘美な靈感へと流れて「浪漫詩文の傍系」へと解消せず、敢て謹厳なシラーの言葉で以て、「縦んば帝国が滅んだとて、ドイツの尊厳は揺らがず悠然と留まらう」と表明するに恥じない「人倫の偉容」を湛えております。そして今なお何処のドイツの町に投宿いたしましても、此所でヘルダーリンが歌い上げております詩の言葉は、市井に無理なく自然に響き渡り、それに必ずや「晩鐘の音」が協和してくれるのであります。

(昭和六三年・一九八八年 一月二四日受理)
 (昭和六三年・一九八八年 六月 四日発行)

- (9) Brentanos Tagebuchbrief. Dezember 1816: StA. Bd.7. 2. S.434.

Sind die ersten sechs Verse nicht das weltliche Treiben ins Reale bis zur Ermüdung, die folgenden sechs nicht die Sehnsucht der Zeit und das Gefühl der Verlorenheit. Tritt im siebten Vers nicht der Rückblick zur verlorenen Unschuld ein, und sprechen die immer quillenden Brunnen nicht von dem ewigen Quell der Verheißung, an dem die Gerechten sich laben? Mahnt diese die Glocke nicht durch die den Klang verhüllende Welt zu harren und zu beten, und ruft der Wächter nicht die Erfüllung der Zeit aus?

- (10) Brentanos Fortsetzung von Hölderlins Nacht („Brod und Wein“ V.1-18): StA. Bd.7. 3. S.539.

Ach und sie tröstet mich nicht, ich kenn' sie, ich laure sie nahet
Wie zum Gefangenen sich schleicht der Wächter heran
 Hier ist ein Becher so spricht sie füll ihn dir mit Tränen
 Hier diesen Stein nimm aufs Herz das er dir werde zu Brod

- (11) Schmidt: op.cit. S.53.

Indem der Dichter sich durch die Kraft der Erinnerung, der Mnemosyne, das Leben göttlich erfüllter Vergangenheit vergegenwärtigt, sich mit den hohen, begeisternden Gestalten der alten Helden, Halbgötter und Dichter umgibt, rettet er sich vor der leben- und sinnzerstörenden Macht der jetzigen Zeit.

Vgl. Haym, Rudolf „Die Romantische Schule“ (1. Aufl. 1870) III. Buch. 1. Kap. Über Hölderlin (S.289-324): Ein Seitentrieb der romantischen Poesie (S.289)

- (12) Millet, François „L'Angéus“ (1858f.): Musée de Louvre.

- (13) Schiller „Deutsche Größe“: Sämtliche Werke. 5 Bde. München. Hanser. 1965-76. Bd.1. 1965. S.473.

Die Majestät des Deutschen ruhte nie auf dem Haupt s. Fürsten. Abgesondert von dem politischen hat der Deutsche sich einen eigenen Wert gegründet, und wenn auch das Imperium unterginge, so bliebe die deutsche Würde unangefochten. Sie ist eine sittliche Größe, sie wohnt in der Kultur und im Charakter der Nation,

- (14) Takahashi, Katsumi: „Beleuchtung“ und „Erleuchtung“ («l'éclat des torches» et «les lumières aux fenêtres») — La culture de l'opéra au XVIII^e siècle des lumières et l'espace de la fête classique de Hölderlin (Le contrepoint des lumières dans l'image de la cité au début de „Brod und Wein“). VII^e Congrès Japonais des Lumières 1985. Bulletin N°1. p.5-8.

Vgl. Forschungsberichte der Univ. Kochi fürs Jahr 1985. Vol.34. Geisteswissenschaften. S.155-201: VERINNERLICHUNG UND ERLEUCHTUNG. (III) Erleuchtung und Beleuchtung (S.170-182).

„GLOKEN“ UND „STUNDEN“

Zum Verständnis von V.11-12 in Hölderlins
 „Brod und Wein“ Kyoto. 16.10.1987

TAKAHASHI, Katsumi

- (4) Takahashi, Katsumi: LANDAUER - „ein sinniges Haupt" in Hölderlins „Brod und Wein" (Doitsu Bungaku. Herbst 1984. Nr.73. S.83-91). S.83.

Dem verinnerlichenden Grundton des gedankenlyrischen Stadtbildes kann eher die „besonnene" Erwägung zum denkerischen Besinnen entsprechen als die „gescheite" Bereitschaft zur Berechnung der Einnahmen und Ausgaben, zumal wenn hinter dem „sinnigen Haupt" der Freund Hölderlins, Tuchhändler Christian Landauer(1769-1845) in Stuttgart, hervortritt, ...

- (5) Unger, Richard: Hölderlin's Major Poetry. The Dialectics of Unity. Bloomington. Indiana University Press. 1975. S.70.

The first three distichs of the evocative first strophe depict the ending of day as a time of cheerful busyness and mundane concern with the practical details of living: Satt gehn heim von Freuden des Tags ... However, the quietude of evening may also be an occasion for desire or nostalgic longing, as when a "lover" or "lonely man", making music, attempts to express and assuage a certain pang of absence. For such men the pleasant inactivity of nightfall is not especially restful, but fosters consciousness of deprivation. They find the incessant flowing of nocturnal fountains analogous to the persistence of time, while bells and cries of watchmen enforce their awareness of time's divisions and its transiency. These sounds thus induce authentic consciousness of temporality.

Vgl. Schmidt: op.cit. S.35.

Das in dieser Stunde vom Dasein der Welt selbst Vernehmbare ist aber gerade das, was im Treiben des Tages wegen seiner Unaufdringlichkeit und gesetzlichen Gleichmäßigkeit unbeachtet bleibt und doch viel tieferes Symbol unseres Daseins ist als die Gegenstände, denen unsere Aufmerksamkeit während der hellen Stunden gilt: das Abbild des Lebens selbst, der „immerquillende" Brunnen, welcher vom steten Werden und vom steten Vergehen spricht; die Glocken, deren Tönen den großen Puls der Zeit erfüllen läßt. - Zwei Hauptmotive der romantischen Poesie, das der Ferne und des Verfließens der Zeit, sind in der zweiten Distichentrias in seltener Reinheit verkörpert.

- (6) „Die Nacht": 1.Str. von „Brod und Wein"(V.1-18)
In: Seckendorf, Leo (Hrsg.) „Musenalmanach" 1807.

* „Brod und Wein"(Vollständig) Str.1-9(V.1-160). Erstdruck: 1894.

- (7) Brentanos Brief an Runge den 21.1.1810: StA. Bd.7. 2. S.407.

Besonders ist die Nacht klar und sternenhell und einsam und eine rück- und vorwärts tönende Glocke aller Erinnerung; ich halte sie für eines der gelungensten Gedichte überhaupt.

- (8) Schiller „Die Freundschaft" 10.Str. V.78-80: Werke. Weimarer Nationalausgabe. Bd.1. 1943. S.111.

Fand das höchste Wesen schon kein Gleiches,
Aus dem Kelch des ganzen Seelenreiches
Schäumt ihm — die Unendlichkeit.

„GLOCKEN" UND „STUNDEN"
Zum Verständnis von V.11-12 in
Hölderlins „Brod und Wein"

Kyoto. 16.10.1987
Katsumi TAKAHASHI

„GLOCKEN" UND „STUNDEN" — Zum Verständnis von V.11-12 in Hölderlins „Brod und Wein"
 Kyoto. 16.10.1987 TAKAHASHI, Katsumi

(1) „Brod und Wein" 1.Str. V.1-18: Sämtliche Werke. Stuttgarter Ausgabe(=StA). Kohlhammer. 1946-77. Bd.2. S.90.

Rings um ruhet die Stadt; still wird die erleuchtete Gasse, ← (14)
 Und, mit Fakeln geschmückt, rauschen die Wagen hinweg. ← (14)
 Satt gehn heim von Freuden des Tags zu ruhen die Menschen, — (2)
 Und Gewinn und Verlust wäget ein sinniges Haupt — (3)/(4) 5
 Wohlzufrieden zu Haus; leer steht von Trauben und Blumen,
 Und von Werken der Hand ruht der geschäftige Markt.
 Aber das Saitenspiel tönt fern aus Gärten; vielleicht, daß
 Dort ein Liebendes spielt oder ein einsamer Mann
 Ferner Freunde gedenkt und der Jugendzeit; und die Brunnen
 Immerquillend und frisch rauschen an duftendem Beet. 10
 Still in dämmeriger Luft ertönen geläutete Glocken, — (7)/(12) (5)
 Und der Stunden gedenk rufet ein Wächter die Zahl. — (10)
 Jezt auch kommet ein Wehn und regt die Gipfel des Hains auf,
 Sieh! und das Schattenbild unserer Erde, der Mond
 Kommet geheim nun auch; die Schwärmerische, die Nacht kommt, 15
 Voll mit Sternen und wohl wenig bekümmert um uns, — (6)/(7)
 Glänzt die Erstaunende dort, die Fremdlingin unter den Menschen
 Über Gebirgshöhn traurig und prächtig herauf.

(2) Schmidt, Jochen: Hölderlins Elegie „Brod und Wein". Berlin. Gruyter. 1968. S.34-35.

aber bei aller Freundlichkeit der Verse, ... (S.34/S.35) ... , bleibt der Wertbereich des geschäftigen Lebens doch abgegrenzt gegen den des hohen, geistesinnigen Lebens, ist beschränkt, noch nicht von tiefstem Daseinssinn erfüllt. Später wird im Gedicht nicht mehr von den „Freuden des Tags", sondern von der ganz anders gearteten dionysischen Freude in nächtlicher Zeit die Rede sein. ... Während die Geräusche des Tages langsam verstummen, erwachen die zauberischen Töne des innigeren Daseins in der stille gewordenen Welt: „Aber das Saitenspiel tönt fern ... " ... (V.7ff. —↑)

(3) Wackwitz, Stephan: Trauer und Utopie um 1800. Studien zu Hölderlins Elegenwerk. Stuttgart. Heinz. 1982. S.47/S.30.

Über V.2 (S.47): Die hinwegrauschenden fackelgeschmückten Wagen, so meine Deutung, sind eine esoterische Anspielung auf den Persephone-Mythos. Diese Anspielung, gleich am Eingang in die Elegie, weist auf das versteckte Thema des gesamten Elegenwerks, die Wechselbeziehung von Oberwelt, der gegenwärtigen Praxis, und der Unterwelt, dem von dieser Praxis Verdrängten.

Über V.4 (S.30): ... , ist die ökonomische Reflexion — die Überlegungen des „sinnigen Haupt“, des bourgeois — affirmativ. „Gewinn und Verlust" werden „wohlzufrieden" bedacht, denn die Praxis des Markts hat sich gelohnt.

* „der geschäftige Markt"(V.6)↑

Certe la «grandeur morale» chez Hölderlin comme chez Schiller ne se fonde pas sur un empire politique mais sur un empire spirituel qui se développe et se forme selon l'idéal classique d'une Grèce bienheureuse. Ici, cependant, cette patrie spirituelle abrite la culture et le caractère de la nation.

Seckendorf édita la première strophe de «Le Pain et le vin» dans l'Almanach des Muses en 1807 sous le titre «La Nuit». Dans une lettre à Runge (datant du 21 janvier 1810) Brentano en fait le commentaire suivant:

... la nuit est claire, étoilée, chargée de solitude et une cloche sonne le rappel de chacun de nos souvenirs. Je tiens ce poème pour l'un des plus réussis. Comme je le sentais résonner en moi, dans mon inconscient se formait le désir d'inventer un poème.

Brentano réalisa son ambition sous la forme d'une «Suite de la Nuit de Hölderlin»:

Hélas, elle ne me console point, je la connais, je la guette, elle approche

Comme le gardien qui se glisse furtivement vers son prisonnier.

Voici une coupe, dit-elle, remplis-la de tes larmes.

Prends sur ton cœur cette pierre, qu'elle te devienne pain.

«La cloche qui sonne le rappel de nos souvenirs» et «le gardien» évoquent sûrement les vers 11 et 12 de «Le Pain et le vin». Ils éveillent un romantisme nostalgique qui se perd dans l'infini. Un tel sentiment nostalgique de la perte n'est pas étranger à Hölderlin. C'est néanmoins l'image de la Grèce bienheureuse qui triomphe au sommet chantant de ce poème avec «la voix du grand Destin»:

Ô Grèce bienheureuse! Ô toi, demeure à tous les dieux donnée,

... ..

Ô salle des festins!

... ..

Mais les trônes, où sont-ils donc? Les temples? Où, les urnes

De nectar, et le chant qui doit réjouir le cœur des dieux?

Où brillent-ils, où donc, les oracles frappant au loin comme l'éclair?

Delphes dort, et la voix du grand Destin, où sonne-t-elle?

Où le dieu prompt? Lourd d'un universel bonheur, où, de quels cieux en fête

Jailli, frappe-t-il les regards de sa splendeur tonnante?

Éther, ô Père!

... ..

(«Le Pain et le vin» vers 55-65)

Par la suite le pouvoir du mot s'accroît progressivement. «... et la puissance de ce nom en est inconsciemment exaltée, O Père, Éther serein!» (vers 68-69). «L'Infini écume»:

Même si l'Être suprême ne trouvait pas d'égal,

Du calice de tout l'empire spirituel

Il écume vers Lui — l'Infini.

(Schiller «L'Amitié» 1782. vers 59-60)

Un pareil sentiment de l'Infini se reflète aussi dans les vers 11 et 12: «La voix des cloches ... le veilleur, gardien des heures ...». Le sentiment ne dirigera pas vers une rêverie isolée sans issue, mais s'épanouira et se déploiera en silence sur la terre ferme de là «grandeur morale», jusqu'à ce qu'il en soit à s'orienter finalement vers «l'Être suprême»: «Grèce bienheureuse!

« LA VOIX DES CLOCHES » ET « LES HEURES »

— VERS 11-12 DE « LE PAIN ET LE VIN » —

Katsumi TAKAHASHI

BULLETIN ANNUEL DE L'UNIVERSITÉ DE KÔCHI (JAPON)
L'ANNÉE 1988. TOME XXXVII. SCIENCES HUMAINES

SOMMAIRE SOUS LA DIRECTION D'UNE FRANÇAISE

(Résumé de l'exposé présenté au congrès automnal de l'Association Japonaise pour la promotion de la langue et de la littérature allemande, dans la salle de conférence du parc d'Okazaki à Kyôto le 16 octobre 1987)

La voix des cloches vibre au calme crépuscule
Et le veilleur, gardien des heures, crie un nombre à pleine voix.
(Hölderlin «Le Pain et le vin» vers 11-12)

La voix des cloches, à mon avis, rappelle non seulement le sentiment d'être perdu dont Clemens Brentano parle dans son journal en décembre 1816, mais cette voix témoigne aussi d'une grandeur morale. «De même que la nature déploiera en silence ses forces secrètes», cette grandeur morale s'étendra elle aussi. (lettre de Hölderlin à son frère, Nouvel an 1801)

La majesté de l'Allemand ne reposa jamais sur la tête de ses princes. Se démarquant de ce qui est politique, l'Allemand s'est forgé sa valeur propre. Ainsi, même si le Saint Empire allait à sa ruine, la dignité allemande resterait incontestée. Elle repose sur une grandeur morale, elle demeure dans la culture et dans le caractère de la nation. Elle est indépendante du destin politique.

(Schiller «Grandeur Allemande» 1797)

On retrouve également une telle «grandeur morale» dans le tableau de François Millet intitulé «l'Angélu» (Musée du Louvre): La dignité exigeante et modeste de la conscience populaire correspond à «la rue illuminée» qui «accueille le silence» (vers 1). Elle est en effet détachée de toute valeur politique et loin de la courtoisie des milieux bourgeois. Elle correspond aussi aux «fraîches fontaines intarissables» (vers 9-10).

La ville autour de nous s'endort. La rue illuminée accueille le silence,
Et les voitures parées de torches s'éloignent dans un bruit rapide.

...

.....

...

Dans l'arôme des parterres fleuris chantent les fraîches fontaines intarissables.

(«Le Pain et le vin» vers 1-10)

En contraste avec l'image précédente «les voitures parées de torches» symbolisent la bourgeoisie qui s'éloigne vers des plaisirs frivoles. Cette désinvolture s'évanouira tandis que la grandeur morale s'épanouira et déploiera en silence ses forces vastes et secrètes.

Les vers 11 et 12 qui suivent viennent renforcer cette conviction. De la même façon s'éteint l'esprit voltairien, favori à la cour sous l'ancien régime, alors que le citoyen de Genève J.J. Rousseau va influencer la génération montante de Hölderlin, Hegel etc.

Alors que Rudolf Haym estime que «Le Pain et le vin» ne devrait être regardé comme une «tendance accessoire de la poésie romantique», Jochen Schmidt, lui, considère que la vie affairée et la vie méditative, contemplative, ont des sphères de valeur qui ne sont pas incompatibles.

qui «se développe et se forme» comme la «nature spirituel»(Fichte «Le 13^e discours à la nation allemande» 1808: V(3)31). Cependant ce royaume «demeure dans la culture et le caractère de la nation».

Quant à la première strophe de «Le Pain et le vin», que Leopold Seckendorf édita sous le titre de «La Nuit» dans l'«Almanach des Muses» 1807, Clemens Brentano dit dans une lettre à Otto Runge le 21 janvier 1810(V(3)18):

Surtout la nuit est claire, étoilée et solitaire; elle est une cloche retentissant en arrière et en avant de tout souvenir; je la tiens pour un des poèmes les plus réussis. Pendant que je vivait tel chose, à mon insu se formait le désir d'inventer un poème,

Brentano réalisa son ambition avec la «Suite de la Nuit de Hölderlin» comme suit(V(3)28):

Hélas! et elle ne me console pas, je la connais, j'ai l'oreille au guet, elle approche

Comme le veilleur se coulant vers le prisonnier.

C'est ici une coupe, ainsi dit-elle, emplis-la avec tes larmes,

Voici cette pierre, tiens-la sur ton coeur, afin qu'elle devienne ton pain.

...

.....

La «cloche retentissant en arrière et en avant de tout souvenir» et le «veilleur», inspirés certainement des vers 11-12 de «Le Pain et le vin», éveillent une nostalgie romantique pour l'infini. Une telle nostalgie du «sentiment de perte» n'est certes pas étrangère à «Le Pain et le vin» de Hölderlin, mais il ne faut pas oublier que l'idée de la «Grâce bienheureuse» jaillit de ce poème avec «la voix du grand Destin»:

Ô Grâce bienheureuse! Ô toi, demeure à tous les dieux donnée,

... ..

Ô salle des festins! ...

... ..

Mais les trônes, où sont-ils donc? Les temples? Où, les urnes

De nectar, et le chant qui doit réjouir le coeur des dieux?

Où brillent-ils, où donc, les oracles frappant au loin comme l'éclaire?

Delphes dort, et la voix du grand Destin, où sonne-t-elle?

Où le dieu prompt? Lourd d'un universel bonheur, où, de quels cieux en fête

Jailli, frappe-t-il les regards de sa splendeur tonnante?

Éther, ô Père!

... ..

(«Le Pain et le vin» v.55-65: V(3)11-12)

Et par suite, «il s'accroît en dormant, le pur pouvoir / Du mot Père!»(v. 68-69: V(3)12). On dirait ici que «l'Infini écume»:

Même si l'Être suprême ne trouvait pas d'égal,

Du calice de tout le Royaume spirituel

Il écume vers Lui — l'Infini.

(Schiller «L'Amitié» 1782. v.58-60: V(3)21)

Un pareil sentiment de l'Infini se reflète aussi dans l'image de la cité au début de «Le Pain et le vin», particulièrement dans les vers 11-12. Il ne dirigera pas vers une rêverie isolée sans issue, mais s'épanouira et se déploiera en silence sur la terre ferme de la «grandeur de moeurs», jusqu'à ce qu'il s'oriente finalement vers «l'Être suprême»: «Grâce bienheureuse!

«LA VOIX DES CLOCHES» ET «LE VEILLEUR, GARDIEN DES HEURES»
— SUR LES VERS 11-12 DE «LE PAIN ET LE VIN» DE HÖLDERLIN —

Katsumi TAKAHASHI

BULLETIN ANNUEL DE L'UNIVERSITÉ DE KÔCHI (JAPON)
L'ANNÉE 1988. TOME XXXVII. SCIENCES HUMAINES

RÉSUMÉ

(Ce sommaire se conforme à la communication présentée au Congrès d'automne de la Société Japonaise de Langue et Littérature Germaniques dans la Salle de Conférence du Parc Okazaki à Kyoto, le 16 octobre 1987)

La voix des cloches vibre au calme crépuscule
Et le veilleur, gardien des heures, crie un nombre à pleine voix.
(Hölderlin «Le Pain et le vin» v.11-12: V(3)1)

«La voix des cloches» et «le veilleur, gardien des heures» évoquent non seulement le souvenir de «sentiment de perte» (Lettre du journal de Brentano, décembre 1816: V(3)25), mais ils témoignent aussi d'une «grandeur de moeurs», qui «s'épanouira et déploiera en silence, comme la nature en croissance, ses forces lointaines et secrètes» (Lettre de Hölderlin à son frère probablement vers Nouvel-An 1801: V(3)38):

La majesté de l'Allemand ne reposait jamais sur la tête de ses princes. Quittant la valeur politique il fonda sa propre valeur; si même le Saint Empire (962-1806) allait à sa ruine, la dignité allemande durerait sans inquiétude. Elle est une grandeur de moeurs; elle demeure dans la culture et le caractère de la nation.

(Schiller «Grandeur allemande» 1797: V(3)29)

Ce qui montre une telle grandeur de moeurs, c'est par exemple «L'Angélu» (1858-59) de François Millet, où se voit la dignité modeste du civisme quittant la valeur politique et courtoise du grand monde de l'époque. Elle correspond bien à «la rue illuminée» (v.1) et aux «fraîches fontaines infatigables» (v.10) dans l'image de la cité au début de «Le Pain et le vin»:

La ville autour de nous s'endort. La rue illuminée accueille le silence,
Et le bruit des voitures avec l'éclat des torches s'éloigne et meurt.

...

.....

...

et dans l'arôme

Des parterres fleuris chantent les fraîches fontaines infatigables.
(«Le Pain et le vin» v.1-10: V(3)1)

Dans les vers suivants 11-12 s'accuse la grandeur de moeurs en contraste avec les classes privilégiées qui «s'éloignent et meurent» dans une soirée luxueuse et parfois luxurieuse. «Le bruit des voitures» symbolisant le grand monde va disparaître «avec l'éclat des torches» (v.2), tandis que la grandeur de moeurs qui se reflète dans les autres vers «s'épanouira et déploiera en silence ses forces lointaines et secrètes». C'est comme l'opposition de Voltaire, favori de la cour et Rousseau, citoyen de Genève.

Si même «Le Pain et le vin» n'était que d'une tendance accessoire de la poésie romantique (Rudolf Haym «L'école romantique» 1870: V(3)19), «le domaine des affaires» de ce poème ne doit pas «rester hors du domaine de la méditation» (Jochen Schmidt «L'élégie de Hölderlin: Le Pain et le vin» 1968: V(3)27). Certes la «grandeur de moeurs» chez Hölderlin ainsi que chez Schiller ne se fonde point sur un État politique, mais sur un Royaume spirituel

sondern von einem „geistigen“ Reich, das nach dem klassischen Ideal eines „seeligen Griechenlandes“ (V.55) als „geistige Natur“ „sich entwickelt und gestaltet“ (Fichte „13. Rede an die deutsche Nation“ 1808: V(3)31), doch „wohnt“ dieses geistige Vaterland „in der Kultur und im Charakter der Nation“.

Von der ersten Strophe von „Brod und Wein“ (V.1-18), die Seckendorf unter der Überschrift „Die Nacht“ 1807 im „Musenalmanach“ herausgab, sagt Brentano in einem Brief an Runge vom 21. Januar 1810 (V(3)18):

Besonders ist die Nacht klar und sternenhell und einsam und eine rück- und vorwärts tönende Glocke aller Erinnerung; ich halte sie für eines der gelungensten Gedichte überhaupt. Während ich Solches erlebte, entstand in mir unbewußt die Begierde, ein Gedicht zu erfinden, ...

Dies verwirklichte Brentano als „Fortsetzung von Hölderlins Nacht“ (V(3)28) folgendermaßen:

Ach und sie tröstet mich nicht, ich kenn' sie, ich laure sie nahet
Wie zum Gefangenen sich schleicht der Wächter heran
Hier ist ein Becher so spricht sie füll ihn dir mit Tränen
Hier diesen Stein nimm aufs Herz das er dir werde zu Brod

Die „rück- und vorwärts tönende Glocke aller Erinnerung“ und der sich heranschleichende „Wächter“, die sicher die V.11-12 von „Brod und Wein“ voraussetzen, erwecken eine romantische Sehnsucht ins Unendliche. Obwohl auch Hölderlin in „Brod und Wein“ solch sehnsuchtsvolles „Gefühl der Verlorenheit“ nicht fremd ist, bricht hier die Idee vom „seeligen Griechenland“ im Höhepunkt des Gedichts als „großes Geschick“ unvermittelt „aus heiterer Luft über die Augen herein“ (V.62-64):

Seeliges Griechenland! ... 55

...

Festlicher Saal! der Boden ist Meer! und Tische die Berge,
Wahrlich zu einzigem Brauche vor Alters gebaut!
Aber die Thronen, wo? die Tempel, und wo die Gefäße,
Wo mit Nectar gefüllt, Göttern zu Lust der Gesang? 60
Wo, wo leuchten sie denn, die fernhintreffenden Sprüche?
Delphi schlummert und wo tönet das große Geschick?

Wo ist das schnelle? wo brichts, allgegenwärtigen Glücks voll
Donnernd aus heiterer Luft über die Augen herein?
Vater Aether! ... 65

(„Brod und Wein“ 4.Str. V.55/ V.57-65: V(3)11/ V(3)12)

Dementsprechend „wächst schlafend des Wortes Gewalt / Vater! heiter!“ (V.68-69: V(3)12), wie „die Unendlichkeit schäumt“:

Fand das höchste Wesen schon kein Gleiches,
Aus dem Kelch des ganzen Seelenreiches
Schäumt ihm — die Unendlichkeit.

(Schiller „Die Freundschaft“ 1782. 10.Str. V.58-60: V(3)21)

Solch ein Unendlichkeitsgefühl, das schon die „geläuteten Glocken“ (V.11) und der „rufende Wächter“ (V.12) andeuten, führt nicht in einen ausgeweglosen Traum, sondern es „wächst“ auf dem festen Boden einer „sittlichen Größe“, bis es sich schließlich auf das „höchste Wesen“ hin orientiert hat:

Seeliges Griechenland! du Haus der Himmlischen alle,

...

(„Brod und Wein“ 4.Str. V.55f.: V(3)11)

ÜBER DIE ERSTE STROPHE VON HÖLDERLINS „BROD UND WEIN“
 ‚HEILIGE NACHT‘ VIERTER TEIL :

— „GLOKEN“ UND „STUNDEN“ —

TAKAHASHI, Katsumi

(Seminar für Deutsche Philologie der Philosophischen Fakultät)

FORSCHUNGSBERICHTE DER UNIVERSITÄT KŌCHI (JAPAN)
 FÜR S JAHR 1988 VOL.37. GEISTESWISSENSCHAFTEN

INHALTSÜBERSICHT

- [I] EINLEITUNG (Vol.34. S.156-S.159) S. 2-S. 5
- [II] „RINGS UM RUHET DIE STADT“
 (1) Stabreim und Versfuß S.160-S.161) S. 6-S. 7
 (2) Verinnerlichung S.162-S.165) S. 8-S.11
 (3) „Die lebendige Ruhe“ S.165-S.169) S.11-S.15
- [III] „ERLEUCHTUNG UND BELEUCHTUNG“
 (1) „Das Werden im Vergehen“ S.170-S.171) S.16-S.17
 (2) Lampenlicht und Mondschein S.171-S.176) S.17-S.22
 (3) „Gährung und Auflösung“ S.176-S.182) S.22-S.28
- [IV] „EIN SINNIGES HAUPT“ (Vol.35.
 (1) Vorwort S. 68-S. 69) S.29-S.30
 (2) Christian Landauer S. 69-S. 74) S.30-S.35
 (3) „Landauersche Fußsteppiche- und
 Wollwarenhandlung“ S. 74-S. 77) S.35-S.38
 (4) Gemeingeist und Alleinherrschaft S. 77-S. 81) S.38-S.42
 (5) Schlußwort S. 81-S. 83) S.42-S.44
- [V] VON DER ABENDDÄMMERUNG ZUR HEILIGEN NACHT
 (1) „Abgeschiedenheit“ (Vol.36. S. 16-S. 21) S.45-S.50
 (2) „Brunnen“ S. 21-S. 27) S.50-S.56
 (3) „Glocken“ und „Stunden“ (Vol.37. S. 1-S. 8) S.57-S.63
 (4) „Hain“ und „Bund“
 a) „Wehn“
 b) „Hain“ und „ein eueriger Gott“
 c) Vom Urgrund zum Ursprung
 d) „Auge der Seele“ und „Seelengesang“
 e) „Die Eiche weht“
 f) „Tausendjährige Eichen“
 g) „Idyllische Wirklichkeit“ und „sittliche Größe“
 h) „Der leere Verstand“
 i) „Hingehefteten Blickes lange Wahl“
 j) „Die flüchtigen Dichter“
 k) „Hainbund“
 l) „Bund“
 m) „Heiliger Barbar“
 n) „Anmuth und Würde“
 o) „Das Musikalische“
 p) „Idealisierkunst“
 q) „Ein Bund der konservativen Kulturidee mit
 dem revolutionären Gesellschaftsgedanken“
- (5) Eleusis

QUELENNACHWEIS

Résumé

Zusammenfassung

INHALTSÜBERSICHT